

研究報告書 第65号

キャリア教育に関する研究

キャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発

平成19・20年度

茨城県教育研修センター

目次

I	研究の概要	1
1	研究主題	1
2	主題設定の理由	1
3	研究のねらい	1
4	研究の内容・方法	1
II	キャリア教育への取組の実態と課題	2
III	キャリア教育を推進するためのカリキュラム開発のステップ	3
	ステップ1 キャリア教育を推進するための組織をつくりましょう	3
	ステップ2 校内研修でキャリア教育についての共通理解を図りましょう	4
	ポイント1 「キャリア」、「キャリア発達」とは?	4
	ポイント2 キャリア教育とは?	5
	ポイント3 なぜキャリア教育が必要なのか?	6
	ポイント4 キャリア教育が「新しい教育内容の導入ではない」とはどういうこと?	6
	ポイント5 キャリア発達にかかわる諸能力とは?	7
	ポイント6 キャリア教育と進路指導の違いは?	7
	ステップ3 「学習プログラムの枠組み(例)」を自校化しましょう	8
	ステップ4 キャリア教育の全体計画を作成しましょう	10
	ステップ5 キャリア教育の年間指導計画を作成しましょう	12
	ステップ6 キャリア教育の視点を踏まえた学習指導案を作成しましょう	13
IV	研究協力校による実践事例	14
	小学校実践事例1 「一人一人の夢を大事にしたキャリア教育の推進」	14
	小学校実践事例2 「夢を育て、学習意欲を高めるキャリア教育のカリキュラムの開発と実践」	20
	小学校実践事例3 「学校内外の人々との交流活動を重視したキャリア教育の実践」	26
	中学校実践事例1 「学年組織や教科組織、地域人材を活用したキャリア教育の実践」	32
	中学校実践事例2 「教師の協働性を生かしたキャリア教育のカリキュラム開発と実践」	38
	高等学校実践事例1 「人間力を育むキャリア教育カリキュラム開発」	44
	高等学校実践事例2 「キャリア教育を支援するインターンシップ」	50
V	今後の課題	56
○	資料	57
	1 「キャリア教育への取組に関する実態調査」実施要項	57
	2 「キャリア教育への取組に関する実態調査」	58
	3 「キャリア教育への取組に関する実態調査」の結果と考察(小学校)	60
	4 「キャリア教育への取組に関する実態調査」の結果と考察(中学校)	64
	5 「キャリア教育への取組に関する実態調査」の結果と考察(高等学校)	68
	6 職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)	72
○	参考文献	73
○	研究関係者	74

I 研究の概要

1 研究主題 キャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発

2 主題設定の理由

今日、産業・経済の構造的変化や雇用の多様化・流動化等が進む中、子どもたちの進路をめぐる環境は大きく変化している。また、若者の勤労観、職業観の未熟さや、社会人・職業人としての基礎的な資質・能力の不十分さなどについても各方面から指摘されている。そこで、子どもたちが「生きる力」を身に付け、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟にかつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくことができるよう、キャリア教育の推進が強く求められている。

このような声に応えるべく、文部科学省は平成16年1月に「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（報告書）」を、平成18年11月には「キャリア教育推進の手引」を示し、茨城県教育委員会も平成17年度より「キャリア教育研修会」を実施するなどして、学校におけるキャリア教育の推進を支援してきた。

そこで、本教育研修センターでは、キャリア教育推進の一層の具現化を図るため、上記研究主題のもと研究協力校における実践研究を中心に、平成19・20年度の2か年の研究を進めることにした。

3 研究のねらい

キャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発に関する研究を行い、学校教育の充実に資する。

4 研究の内容・方法

〈理論研究〉

- ・キャリア教育の理念とカリキュラムの開発の考え方の明確化

〈調査研究〉

- ・「キャリア教育への取組に関する実態調査」の実施及び分析

〈実践研究〉

- ・研究協力校によるカリキュラムの開発及び実践

小学校：東海村立白方小学校，神栖市立深芝小学校，古河市立駒羽根小学校

中学校：日立市立日高中学校，阿見町立阿見中学校

高等学校：県立多賀高等学校，県立明野高等学校

〈助言者〉

早稲田大学大学院教授（平成19年度は国立大学法人上越教育大学准教授）

三村 隆男

〈研究期間〉

平成19～20年度

II キャリア教育への取組の実態と課題

現在各学校で取り組まれているキャリア教育の状況を把握するとともに、その実施上の課題を明らかにし、「キャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発」に関する研究の基礎資料を得るために、平成19年8月、県内すべての市町村立小・中学校及び県立高等学校を対象として、「キャリア教育への取組に関する実態調査」を実施した。

その結果、各校種において、以下のような現状と課題が明らかとなった（実施要項、調査の内容及び結果と考察の詳細については、p.57以下の〈資料1〉～〈資料5〉参照）。

〈小学校〉

- ・ 約9割の学校がキャリア教育に関する校内研修を実施し、6割以上の学校が学校教育目標や教育方針等にキャリア教育を位置付けるなど、キャリア教育を推進しようとする意識の高さがうかがえる。
- ・ 半数以上の学校で、教職員の共通理解や指導計画の作成がまだ十分ではない。

〈中学校〉

- ・ 約7割の学校でキャリア教育の共通理解や校内体制の整備、指導計画の作成が進んでおり、実践についてはほぼ全校で総合的な学習の時間や特別活動を中心に行っている。
- ・ 育成する能力・態度の明確化とそれに基づく指導計画の作成を一層推進し、実践をより充実させていくことが主な課題と言える。

〈高等学校〉

- ・ 約8割の学校で、学校教育目標や教育方針等にキャリア教育が位置付けられており、約6割の学校で校内体制の整備がなされている。また、6割前後の学校でキャリア・カウンセリングやインターンシップに取り組んでいる。
- ・ 校内研修を実施している学校は約4割であり、教職員の共通理解を課題として挙げている学校が最も多い。

以上のような結果から、研究の方向性を校種ごとに以下のように設定し、理論研究及び研究協力校による実践研究を行った。

〈小学校〉

- ・ キャリア教育についての基本的な考え方を分かりやすく示すとともに、教職員の共通理解を図るための効果的な校内研修の在り方や、指導計画の作成方法などを示す必要がある。

〈中学校〉

- ・ 「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」の自校化及び3年間の系統性に配慮した指導計画の作成と実践の方法を示す必要がある。

〈高等学校〉

- ・ 各学校の特性・特質を生かしつつ、育成する能力・態度を明確化するための校内研修及び指導計画の見直し・改善の在り方を示す必要がある。

Ⅲ キャリア教育を推進するためのカリキュラム開発のステップ

調査研究に基づく理論研究及び研究協力校による実践研究より、キャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発について、以下の六つのステップを提言する。

ステップ1 キャリア教育を推進するための組織をつくりましょう

キャリア教育は、学校の全教育活動を通して推進されます。そこで、キャリア教育の意義を正しく理解し、系統的・横断的な実践を組織的に展開するために、キャリア教育を推進する組織を、すべての教職員がかかわり協働性を発揮できるものにするのが大切です。

具体的には、既存の校務分掌を有機的に結び付けて、キャリア教育推進委員会等の委員会を組織してみましょう。キャリア教育推進委員会の役割として考えられることは、概ね以下のとおりです。ここで決定した内容を、職員会議等において提案します。

- ・ 自校のキャリア教育の目標の設定及び目指す児童生徒像の明確化
- ・ キャリア教育の全体計画、年間指導計画の検討
- ・ キャリア教育の評価及び次年度の計画の策定
- ・ 研修会（キャリア教育についての理解、授業研究等）の企画運営、情報収集・発信

下に示すのは、基本的な校内組織の例です。これを参考に、自校の実状に合った組織を工夫してみましょう。また、中学校、高等学校では、進路指導主事がキャリア教育主任となり、従来の進路指導部を生かした組織とすることが考えられます。その際は、従来の進路指導の域を出てキャリア教育を推進するという観点から（ステップ2ポイント6参照）、すべての教職員がかかわる全校的な組織に拡大するようにしましょう。

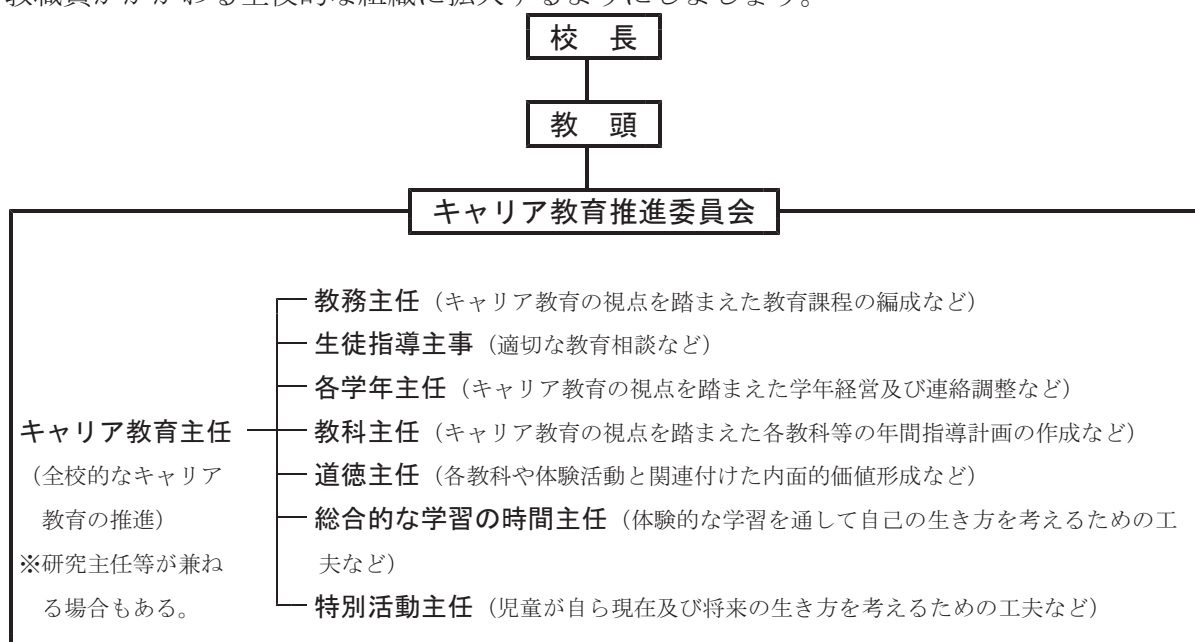


図1 キャリア教育を推進するための組織の例（小学校）

ステップ2 校内研修でキャリア教育についての共通理解を図りましょう

キャリア教育を推進するための組織ができれば、次に、校内研修でキャリア教育についての共通理解を図りましょう。キャリア教育は、すべての教育活動を通して行うものなので、キャリア教育を進める上で基本となる内容について、全職員で共通理解を図ることが重要です。以下に、教職員がキャリア教育を理解するために押さえておきたいポイント1～6を挙げてみます。

ポイント1 「キャリア」、「キャリア発達」とは？

これらについて、図2、3に示すKさん（小学校5年生）の具体的な発達の姿から考えてみましょう。

まず、「キャリア」の定義については、以下のように示されています。

「キャリア」とは？

「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」

（「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（報告書）」
平成16年1月 文部科学省（以下「協力者会議報告書」と表記））

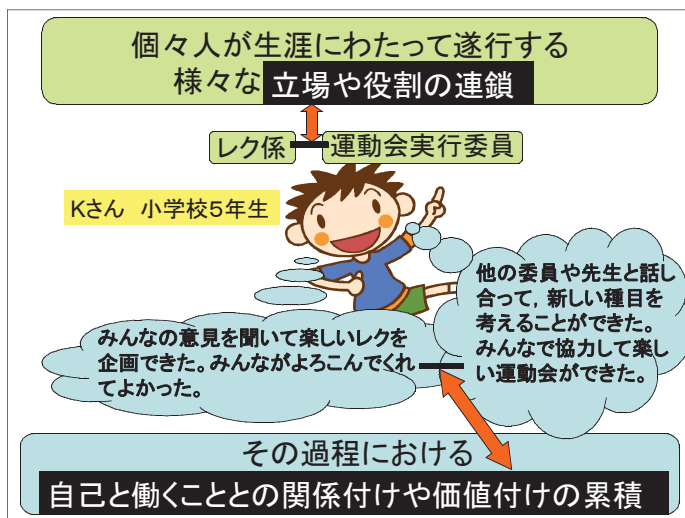


図2において、Kさんは「レク係」として活動し、「みんなの意見を聞いて楽しいレクを企画できた。みんながよろこんでくれたよかった。」と考えます。その体験から自信をもったKさんは、次に「運動会実行委員」として活動し、「他の委員や先生と話し合っ、新しい種目を考えることができた。みんなで協力して楽しい運動会ができた。」と考えます。この「レク係」から「運動会実行委員」へのつながりが「立場や役割の連鎖」であり、それらを通して得た思いや考えの重なりが、

図2 Kさんのキャリア

「自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」です。そして、これらを生涯にわたる視点からとらえたものが、Kさんのキャリアになります。

次に、「キャリア発達」の定義については、以下のように示されています。

「キャリア発達」とは？

発達とは生涯にわたる変化の過程であり、人が環境に適応する能力を獲得していく過程である。その中で、キャリア発達とは、自己の知的、身体的、情緒的、社会的な特徴を一人一人の生き方として統合していく過程である。具体的には過去・現在・将来の自分を考えて、社会の中で果たす役割や生き方を展望し、実現することがキャリア発達の過程である。

（「キャリア教育推進の手引」平成18年11月 文部科学省）

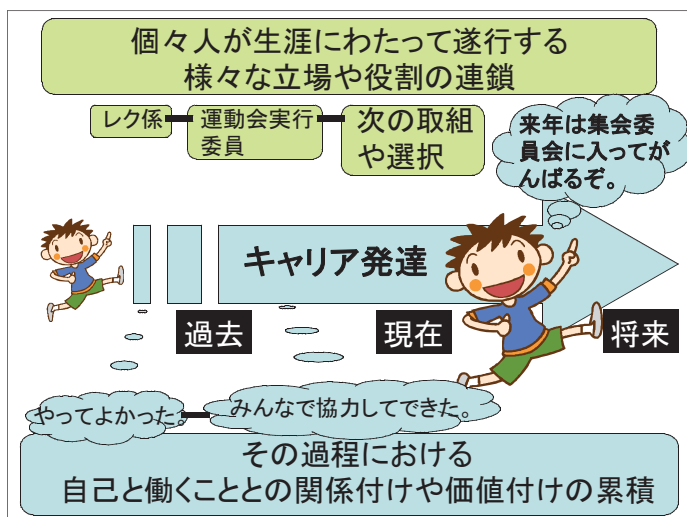


図3 Kさんのキャリア発達

レク係や運動会実行委員の経験が生かせるかもしれない」「今度は全校児童の前で司会をしてみたい」などの思いや考えに基づいています。このように、Kさんは、「レク係」や「運動会実行委員」の経験を基に、「自己の知的、身体的、情緒的、社会的な特徴」に目を向けて、「生き方として統合」したわけです。このKさんの一連の変容が、「キャリア発達」です。そして、このような営みは、Kさんの人生を通じて繰り返し行われ、「過去・現在・将来の自分を考えて社会の中で果たす役割や生き方を展望し、実現すること」になります。

ポイント2 キャリア教育とは？

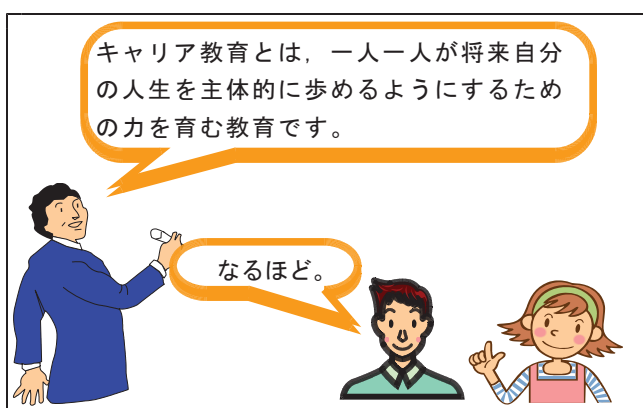
「キャリア教育」の定義については、以下のように示されています。

「キャリア教育」とは？

「キャリア概念」に基づいて、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」。端的には、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」（「協力者会議報告書」）

キャリア教育においては、勤労観、職業観を育てることを通して、児童生徒一人一人が生き方について自分で選択決定できる能力・態度を身に付けさせます。

「キャリア教育」について保護者等に伝える場合には、「一人一人が将来自分の人生を主体的に歩めるようにするための力を育む教育」のような分かりやすい表現を工夫するとよいでしょう。



ポイント3 なぜキャリア教育が必要なの？

一般に言われているように、キャリア教育には、若年者雇用の悪化等を受けた緊急対策や、勤労観、職業観の未熟さなどの若者自身の資質等をめぐる課題への対応など、子どもたちの外部からのニーズがあります。

一方で、下の調査結果のように、学校で「自分の個性や適性を考える学習」や「働く意義や目的を考える学習」などについてもっと指導してほしいという、子どもたち自身からのニーズがあることにも注目しましょう。

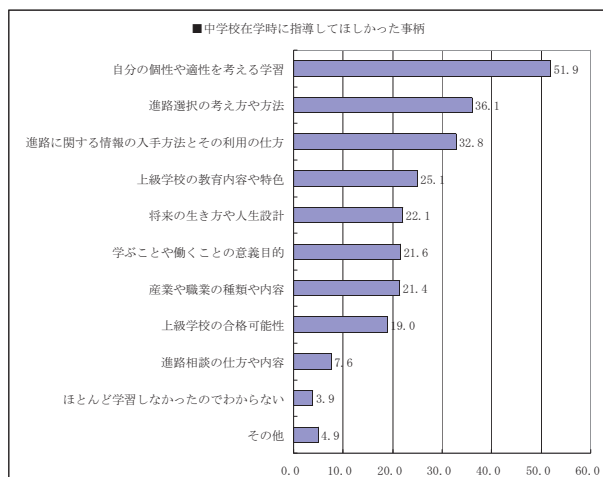


図4 文部省「中学校における進路指導に関する総合実態調査報告書（平成11年3月）」より

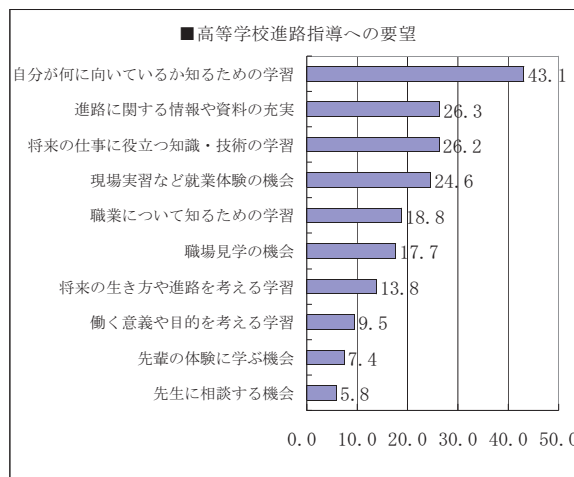


図5 文部科学省「高校生の就職問題検討会議報告（平成13年2月）」より

ポイント4 キャリア教育が「新しい教育内容の導入ではない」とはどういうこと？

キャリア教育では、全く新しいことを始めるのではなく、キャリア教育の視点から、今までの教育活動を見直すこと、つまり、各教科等の中のキャリア教育と関連する活動・内容を明確にとらえるとともに、そこで育むことができるキャリア発達にかかわる諸能力を意識しながら、教育活動を行うことが求められています。この点から、必ずしも新しい教育内容を導入するものではないと言えます。

キャリア発達にかかわる諸能力は、国立教育政策研究所生徒指導研究センターが開発した「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」(以下「学習プログラムの枠組み(例)」と表記)(P.72資料6参照)に示されています。これらの諸能力は、教育活動を見直す具体的な視点としても活用することができます。

キャリア教育が「新しい教育内容の導入ではない」とはどういうこと？

キャリア教育では、全く新しいことを始めるのではなく、キャリア教育の視点から、今までの教育活動を見直すことが求められています。ですから、必ずしも新しい教育内容を導入をするものではありません。

ポイント5 キャリア発達にかかわる諸能力とは？

キャリア発達にかかわる諸能力の代表的な例には、「人間関係形成能力」，「情報活用能力」，「将来設計能力」，「意思決定能力」があります。これらの四つの能力は，一般的に，社会的自立を図る上で必要な能力であると言われており，発達段階に沿って育成されるものです。「学習プログラムの枠組み（例）」には，小・中・高等学校の各時期に育成する能力が具体的に示されています。これらの四つの能力は，さらに，それぞれ二つの下位能力に分けられます。

これらの四つの能力の関係を，早稲田大学大学院教授の三村隆男氏は，図6のように，人間関係形成能力が他の能力の基盤となり，その上に情報活用能力と将来設計能力が位置し，意思決定能力を支える構造になっているととらえています。

ここに示された能力は，目標や評価の観点として用いることができます。各学校では，これらの四つの能力を参考にしながら，学校や地域の特性，児童生徒の実態に応じて，身に付けさせる能力を検討することが大切です。

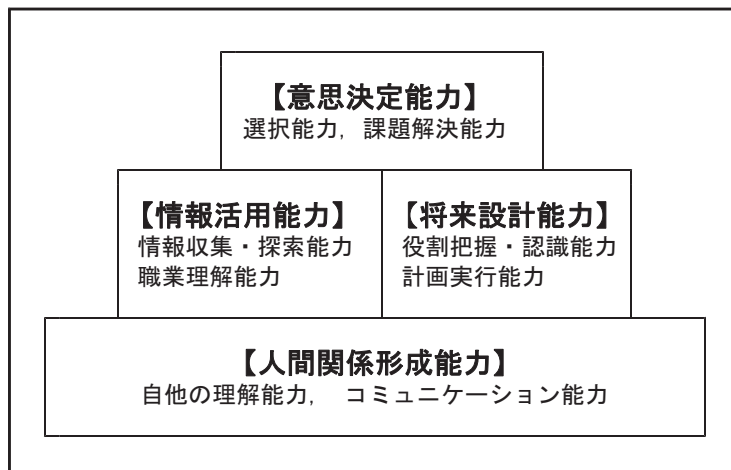


図6 キャリア発達にかかわる諸能力の構造図

ポイント6 キャリア教育と進路指導の違いは？

キャリア教育は，主体的な生き方を選択する力を養う本来の進路指導とは同質であり，その理念は，児童生徒のキャリア発達を促すことによって主体的なキャリアの形成を支援していくことです。

本来の進路指導は，生徒が自らの生き方を考え，将来に対する目的意識をもち，自らの意思と責任で進路を選択決定する能力・態度を身に付けることができるよう指導・援助することです。しかし，従来の進路指導では，進路決定の指導や出口指導，生徒一人一人の適性と進路や職業・職種との適合（マッチング）を主眼とした指導が中心となりがちでした。

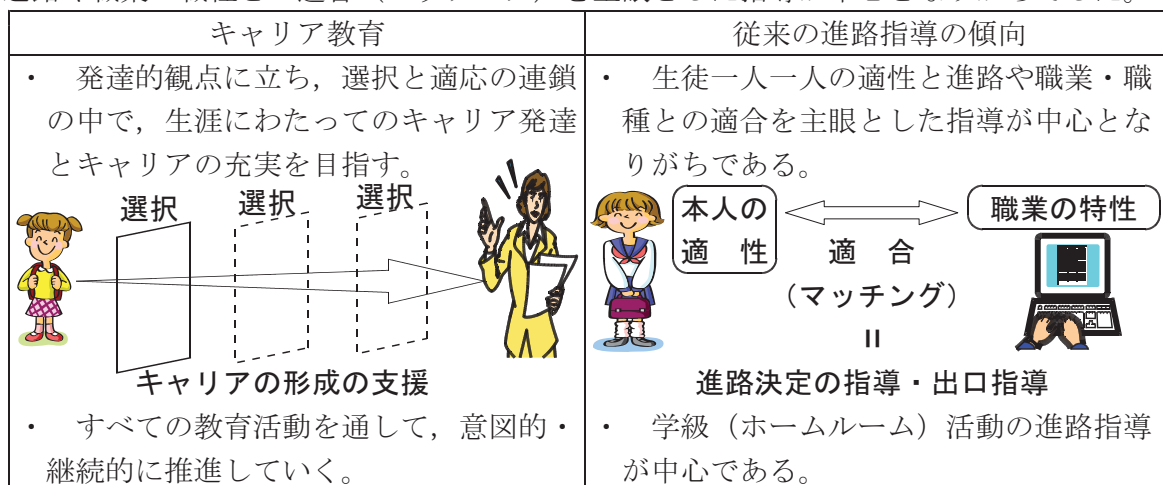


図7 キャリア教育と従来の進路指導の比較

ステップ3 「学習プログラムの枠組み(例)」を自校化しましょう

キャリア教育に取り組むに当たっては、児童生徒の実態などから、児童生徒の何が課題か、どのような能力の育成に重点を置くべきかを検討し、児童生徒に育成すべき能力に焦点を絞った自校のキャリア教育の「学習プログラムの枠組み」を作成する必要があります。その際に、キャリア教育はすべての教育活動を通して行われるので、全教職員が「学習プログラムの枠組み」の作成にかかわっていくことが大切です。

そこで、校内研修を中心に、「学習プログラムの枠組み」の作成について以下のような手順を進めていくとよいでしょう。

手順1 個人での検討

校内研修にのぞむに当たって、事前に自分の担当する学年の児童生徒の実態から、育みたい「能力・態度」を個人で検討するようにします。その際に、図8のようなワークシートを用意し、検討したことを付箋紙に記入し貼付して校内研修にのぞむようにします。

○「学習プログラムの枠組み」作成事前準備

職業的（進路）発達に関わる諸能力（4領域8能力）について、自分なりに「どんな能力」なのか、具体的にイメージしてください。できれば、何人かの先生方と話し合っておくとよいかもしれません。

次回の「校内研修」に向けて、大変でも次のことを準備しておいてください。
 ①「学習プログラムの枠組み（例）」をみて、職業的（進路）発達にかかわる諸能力（4領域8能力）について、どんな能力なのか自分なりに考えておいてください。
 ②付箋紙に「自分の担当学年の生徒に育みたい能力・態度」を具体的に書いて、シートにはっておいてください。

職業的（進路）発達にかかわる諸能力		職業的（進路）発達を促すために育成することが期待される具体的な能力・態度	
職業的（進路）発達に関する能力		職業的（進路）発達を促すために育成することが期待される具体的な能力・態度	
領域	領域説明	能力説明	2年生で育む具体的な能力・態度
人間関係形成能力	<p>他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。</p>	<p>【自他の理解能力】 自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力</p> <p>【コミュニケーション能力】 多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力</p>	<p>自分のよさを言える。</p> <p>友達のよさを理解しようとする。</p> <p>進んで友達とコミュニケーションがとれる。</p>
		<p>・自分の良さや個性が分かり、他者の良さや感情を理解し、尊重する。 ・自分の言動が相手や他者に及ぼす影響が分かる。 ・自分の悔みを話せる相手を持つ。</p> <p>・他者に配慮しながら積極的に人間関係を築こうとする。 ・人間関係の大切さを理解し、コミュニケーションスキルの基礎を習得する。 ・リーダーとフォロアーの立場を理解し、チームを組んで互いに支え合いながら仕事をする。 ・新しい環境や人間関係に適應する。</p>	<p>生徒の実態調査などを基に、自分の担当する学年の生徒に身に付けさせたい能力や態度を付箋紙に具体的に書いてください。（1枚につき一つ）</p>

○「学習プログラムの枠組み」作成事前準備

職業的（進路）発達に関する能力

職業的（進路）発達を促すために育成することが期待される具体的な能力・態度

領域

領域説明

能力説明

2年生で育む具体的な能力・態度

自分のよさを言える。

友達のよさを理解しようとする。

進んで友達とコミュニケーションがとれる。

生徒の実態調査などを基に、自分の担当する学年の生徒に身に付けさせたい能力や態度を付箋紙に具体的に書いてください。（1枚につき一つ）

図8 事前準備ワークシートの一部（中学校第2学年）

手順2 低・中・高学年（中・高等学校は学年）に分かれての検討

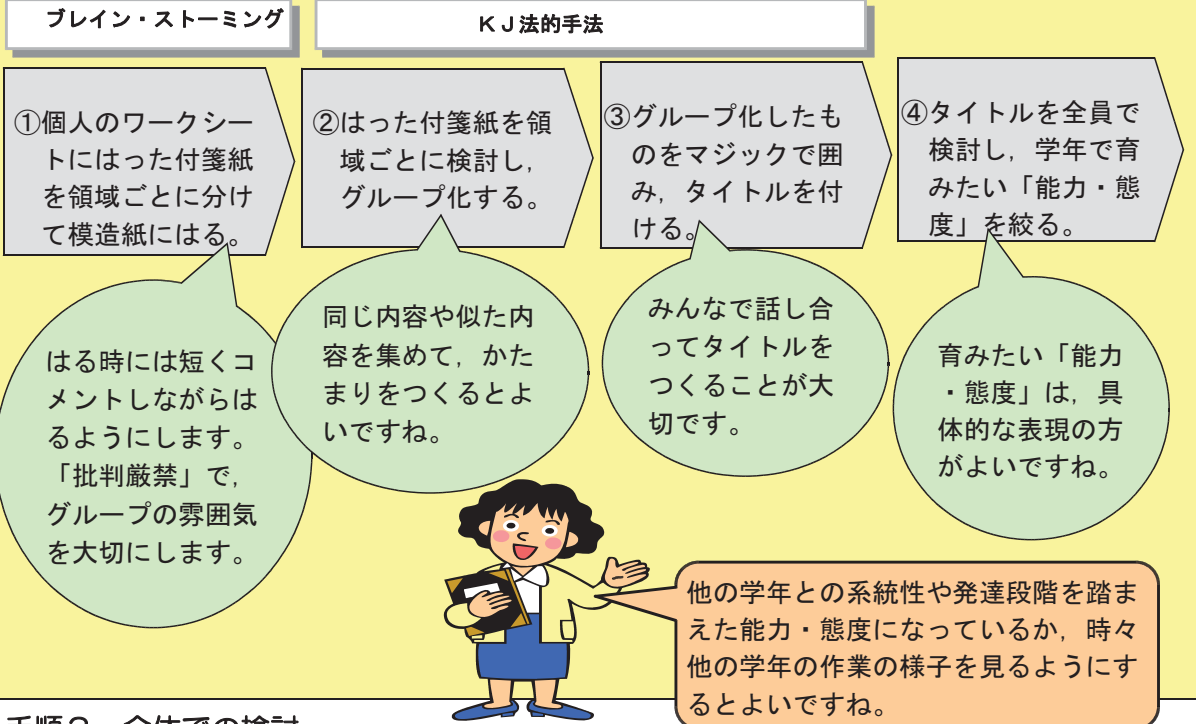
個人で検討したワークシートを持ち寄って校内研修を行います。グループは小学校は低・中・高学年のブロックごとに、中・高等学校は学年で編成します。会場は、教職員が学校全体でキャリア教育に取り組んでいることの意識をもつために、全グループが入れる広い場所がよいでしょう。

また、参加者の積極的な取組を促すために、ブレイン・ストーミングやKJ法的な手法を使って検討してみてください。グループでの検討の進め方は以下ようになります。

準備物

- ・ 模造紙各グループ2枚（4能力領域に区切っておく）
- ・ 2～3色のマジック

進め方



手順3 全体での検討

低・中・高学年（中・高等学校は学年）でまとめた育みたい「能力・態度」を全体で検討します。各学年の代表者が図9のワークシートの自分の学年欄に記入し、発表します。全学年の発表の後、「系統性があるか」、「学年の発達段階を踏まえた能力・態度になっているか」を全職員で確認していきます。

〇〇学校「学習プログラムの枠組み」

		職業的発達を促すために育成することが期待される具体的な能力・態度		
能力		() 学年	() 学年	() 学年
人間関係形成能力	自他の理解能力			
	コミュニケーション能力			

各学年でまとめた育みたい「能力・態度」を欄に記入し、全体でつながりが見えるようにします。

図9 全体検討のワークシートの一部

手順4 キャリア教育推進委員会での最終検討

全体で作成したものを何日間か職員室の一角にはっておきます。その間に新たな考えや文章表現の修正点が出たら、付箋紙ではるように共通理解をしておきます。そして後日、キャリア教育推進委員会での最終検討をします。

ステップ4 キャリア教育の全体計画を作成しましょう

1 全体計画を作成する意義

全体計画を作成することには、次のような意義があります。

- 自校の教育課程におけるキャリア教育の位置付けが明確になる。
- 学校として目指す児童生徒像や、発達段階を踏まえ各学年で育成を目指す能力や態度が明確になり、全体的な見通しをもつことができる。
- 各教科等におけるキャリア教育の指導の重点が明確になる。

2 全体計画を作成するに当たってのポイント

学校教育目標との関連からとらえたキャリア教育の目標や、育成したい能力や態度、各教科等におけるキャリア教育の指導の重点などを内容とするキャリア教育の全体計画を、次のポイントを参考に作成しましょう。

ポイント1 キャリア教育の目標の設定

学校の教育目標に照らし、キャリア教育の目標を設定する。「学習プログラムの枠組み(例)」を参考に設定することが考えられる。

ポイント2 目指す児童生徒像の明確化

児童生徒の実態を踏まえ、成長した姿を明確にする。

ポイント3 発達段階ごとに育成したい能力・態度の明確化

ステップ3で自校化した「学習プログラムの枠組み」に基づき、学年間の系統性を考慮して育成したい能力や態度を明確にする。

ポイント4 各教科等におけるキャリア教育の指導の重点の位置付け

各教科等の指導内容をキャリア教育の視点で見直し、キャリア教育の指導の重点を全体計画に位置付ける。

次ページに、小学校におけるキャリア教育全体計画の例(図10)を掲載しましたので、自校の全体計画作成の参考にしてください。なお、学校の実態に合わせて、キャリア教育の推進の基盤となるその他の教育活動や、家庭・地域との連携等を全体計画に位置付けることも考えられます。

また、全体計画は、教職員による共通理解を図るために、模造紙大に拡大し、職員室に掲示してみましょう。

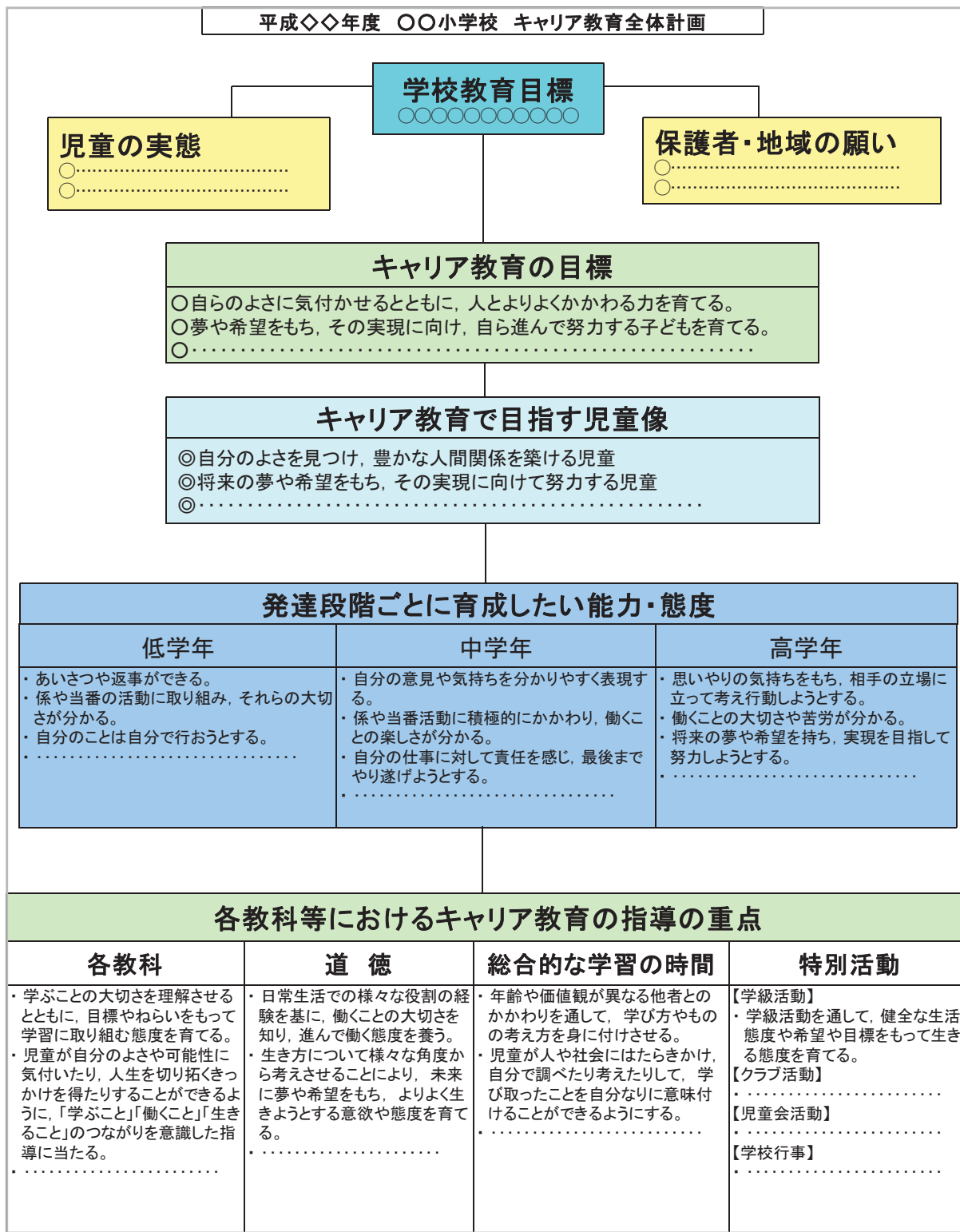


図10 小学校におけるキャリア教育全体計画の例

ステップ5 キャリア教育の年間指導計画を作成しましょう

キャリア教育の全体計画を基に、自校のキャリア教育の方向性を確認します。方向性を確認した後、具体的な実践に取り組むための年間指導計画を作成しましょう。

年間指導計画は、手順を2段階に分けて作成してみましょう。

手順1：図11のように、各教科等の単元・題材において育成することができるキャリア発達にかかわる諸能力を明らかにします。

時期	国語	社会	…	道徳	総合的な学習の時間	学級活動
4月	<ul style="list-style-type: none"> ○だいじょうぶ, だいじょうぶ ○水のこころ <p><自他の理解> <コミュニケーション></p>	<ul style="list-style-type: none"> ○米づくりのさかんな庄内平野 <p><情報収集・探索> <職業理解></p>		<ul style="list-style-type: none"> ○「百シャアのふたごしまい」きんさん・ぎんさん <p><自他の理解></p>	<ul style="list-style-type: none"> 「広げようお米ワールド」 ○米づくり農家の見学 <p><情報収集・探索> <職業理解></p>	<ul style="list-style-type: none"> ○5年生になって ○楽しい学級をつくらう <p><役割把握・認識> <職業理解></p>
5月	<ul style="list-style-type: none"> ○伝え合おう, 5年生でがんばりたいこと ○国語辞典を活用しよう <p><コミュニケーション> <情報収集・探索></p>	<ul style="list-style-type: none"> ○水産業のさかんな枕崎市 <p><情報収集・探索> <職業理解></p>		<ul style="list-style-type: none"> ○いつも全力で(不撓不屈) <p><計画実行></p>	<ul style="list-style-type: none"> ○田植え体験 <p><計画実行> <コミュニケーション></p>	<ul style="list-style-type: none"> ○楽しい読書 ○クラスの和を広めよう <p><選択> <自他の理解></p>

単元・題材に育成できる能力を明記する。

図11 単元・題材とキャリア発達にかかわる諸能力を関連付けた例（第5学年）

手順2：図12のように、全体計画に基づき、学年でキャリア教育の中心となる学習を焦点化し、その学習と他の学習を系統的に関連付けた年間指導計画を作成します。

時期	各教科	道徳	総合的な学習の時間	学級活動
4月	<p>社会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米作りのさかんな庄内平野 <p><情報収集・探索> <職業理解></p>	<p>関係を線で結ぶ。</p>	<p>「広げようお米ワールド」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米づくり農家の見学 <p><情報収集・探索> <職業理解></p>	<p>楽しい学級をつくらう</p> <p><職業理解></p>
5月	<p>国語</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝え合おう, 5年生でがんばりたいこと <p><コミュニケーション></p>	<p>いつも全力で(不撓不屈)</p> <p><計画実行></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・田植え体験 <p><計画実行> <コミュニケーション></p>	<p>中心となる学習</p>

図12 中心となる学習と他の学習を関連付けた年間指導計画（一部）の例（第5学年）

このようにすることで、学年として明確なねらいと見通しをもったキャリア教育の実践が行えるようになります。現行の年間指導計画にある学習を見直し、キャリア教育の中心となる学習と関連する学習を明確に位置付けながら年間指導計画を整備していきましょう。

ステップ6 キャリア教育の視点を踏まえた学習指導案を作成しましょう

<作成手順の例>

手順1： 各教科等の学習がキャリア教育の全体計画及び年間指導計画とどのようにかかわっているかを確認します。

手順2： 単元や題材の目標と自校の学習プログラムの枠組みに示した育みたい能力や態度との関連を踏まえ、単元や題材におけるキャリア教育の視点を確認します。

手順3： 各教科等の目標を達成するために、学習のどの場面でどのようなキャリア発達にかかわる諸能力を伸ばしていくのかを明らかにし、ふさわしい学習活動・内容を位置付けます。キャリア教育でふさわしい学習活動としては、問題解決的な活動や体験的な活動などが考えられます。

<学習指導案の作成のポイント>

- 1 単元（題材）名 ○○○○
- 2 単元の目標
- 3 キャリア教育の視点

自校化した学習プログラムの枠組みに基づいて、本単元（題材）で特に育みたい能力や態度を重点化して書きましょう。

- 4 単元について

キャリア教育の視点からも、指導観や児童生徒の実態をとらえておくようにしましょう。

- 5 単元の指導計画

時	主な学習活動	評価	キャリア発達にかかわる諸能力

各時間でキャリア発達にかかわる諸能力の育成を意識して指導できるように、それぞれの学習活動と関連の深い能力や態度を明らかにしておくようにしましょう。

- 6 本時の指導

- (1) 本時のねらい
- (2) キャリア教育との関連
- (3) 展開

本時では、どの場面でどのような能力や態度を育みたいのか、具体的に書きましょう。

学習活動・内容	指導上の留意点・評価
<p>問題解決的な活動、体験的な活動、外部人材の活用、地域とかかわる活動、生活とつながる活動などを工夫しましょう。</p>	<p>(2)で示した能力や態度を育むための場の工夫や指示、助言内容などをできるだけ具体的に書きましょう。</p>

IV 研究協力校による実践事例

小学校実践事例1 「一人一人の夢を大事にしたキャリア教育の推進」

東海村立白方小学校 URL : <http://www.tokai-shirakata-e.ed.jp/>

1 学校の概要

本校は、昭和37年4月1日に東海村立白方小学校として開校した歴史と伝統ある学校である。地域には原子力発電所がある一方農業も盛んであり、農村と都市の雰囲気共存している。本校の児童数は662名で村内では一番の大規模校である。「信頼される学校」「児童が主役の学校」「美しく、明るく、潤いのある学校」をモットーとして、日々教育活動に取り組んでいる。平成18年度には文部科学省の指定を受け、栄養教諭を中核とした学校・家庭・地域の連携による食育推進事業に取り組み、「食」に関する実践研究を行った。

2 キャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発の概要

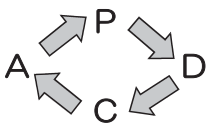
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30px; margin: 0 auto;">1 年次</div> <div style="text-align: center; margin: 10px 0;">↓</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30px; margin: 0 auto;">2 年次</div>		<ul style="list-style-type: none"> ・「キャリア教育」に関する校内研修 ・職業観・勤労観を育む諸能力、態度の洗い出し ・全体計画、学習プログラムの枠組み作成 ・授業研究の実施
	<p>P : Plan (計画)</p> <p>D : Do (実行)</p> <p>C : Check (評価)</p> <p>A : Action (改善)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリアコーナーの設置 ・児童、保護者の実態を把握 ・1年次の振り返り ・2年次の取組の柱立て ・授業研究等の実践 ・児童、保護者の実態を把握 ・2年間のまとめ (成果と今後の課題)

図1 キャリア教育カリキュラムの開発の手順

3 特に力を入れてきた取組

- (1) 教職員の共通理解（ワークショップ型研修）
- (2) 指導計画の自校化
 - ① 校内体制の整備
 - ② 職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組みの作成
 - ③ 二つの視点でとらえたキャリア教育年間計画の作成
- (3) 授業実践

4 実践内容

- (1) 教職員の共通理解（ワークショップ型研修）

2年間にわたり、「キャリア教育を推進するためのカリキュラムを開発する」ために最初に取り組んだのは、いかにして「キャリア教育」を教職員に理解してもらうかということであった。そのために、校内研修を利用して以下の三つのことを実践した。

① キャリア教育についての校内研修

研修の前に先生方からキャリア教育に関する疑問点を出してもらおうと、「キャリア教育とは何か」、「教育活動の中でどのように取り入れていったらよいのか」、「小学校からでは早すぎないのか」、「何から始めればよいのか」、「校内の組織や体制はどうすればよいのか」などの声があがってきた。この疑問点を踏まえ、平成19年6月に校内研修を実施した。内容は、以下の五つの項目で行った。

- ア キャリア教育研究協議会の報告
- イ 本校で身に付けさせたい職業的（進路）発達にかかわる四つの能力の設定
- ウ キャリア教育全体計画の作成
- エ キャリア教育推進のための組織づくり
- オ 平成19年度の実践計画の立案

研修では、「キャリア教育は従来の教育の在り方を幅広く見直していくことであって、新しいことを始めるものではない」ことを特に強調した。また、小・中・高等学校の12年間の教育活動全体を通し勤労観・職業観を育成しながら、生き方（進路）を自分で選択決定する能力を育てることが重要であることを確認した。

② 外部講師（茨城県教育研修センター等の指導主事）を招いての校内研修会

平成19年度は、外部講師を3回招き、次のような内容で校内研修会を行った。

- ア 研究部ごとの実践計画についての助言指導
- イ 研究授業参観と協議
- ウ 計画訪問時の授業参観と今後の方向付け

3回の研修は、それぞれ異なった内容であったが、現在の取組における問題点や、これからの研究推進についてのアドバイス等をいただくなど、大変有意義な研修であった。これらの校内研修会を通して、本校職員は「キャリア教育」に関する疑問点を徐々に解決していった。

③ 教職員一人一人の参画意識を高める校内研修体制

本校では、研修意識を高める手立てとして、平成18年度よりワークショップ型の校内研修を取り入れ実践している。キャリア教育推進についても、この研修方法を取り入れ、職員一人一人の意見を取り入れながら実践に結び付けてきた。

研修は、以下の手順により進めた。

- ア 課題について気付いた点、改善点、アイデア等をメモする。
- イ 概念化シートにメモしたものをはっていく。
- ウ 同じ内容をいくつかにまとめ、見出しをつける。
- エ 短期にできるものから、実践していく。

資料1 ワークショップ研修で課題を協働的に解決する



(2) 指導計画の自校化

① 校内体制の整備

図2に示したように、推進委員会を中心に三つの研究部を組織した。全体計画については、推進委員会で原案を作成して研究部ごとに検討を加えた。

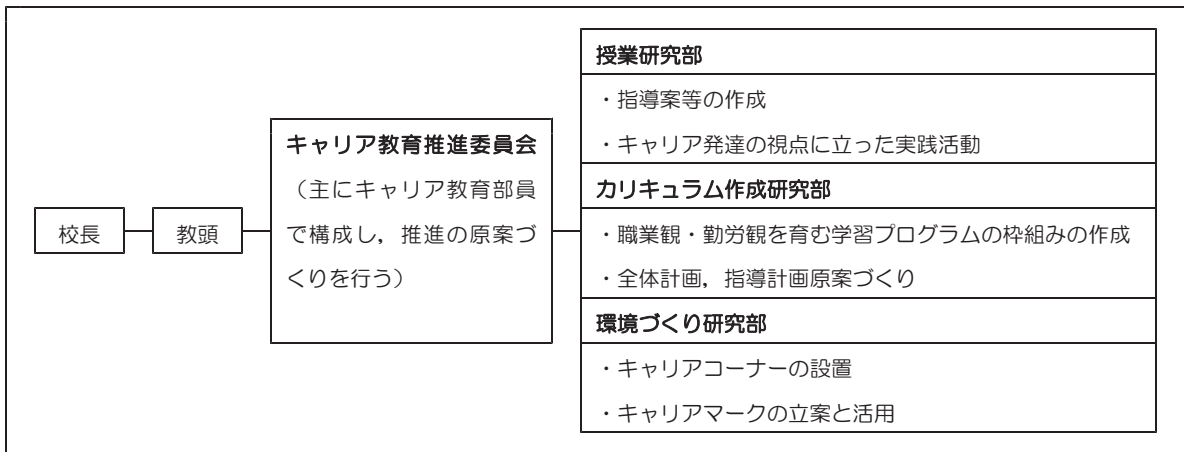


図2 キャリア教育推進のための校内体制

② 職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組みの作成

図3が、本校で自校化した「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み」である。これを作成するに当たり、1年目に、低、中、高学年に分かれて、職業的（進路）発達を促すために育成することが期待される具体的な能力・態度について検討した。話し合いについては、ワークショップ型の研修方法を取り入れ、参加している全員の意見を生かし、考えを一つにまとめて共通理解を図るようにした。

○ 職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み 2007. 7. 30作成 白方小学校

領域	能力	低学年	中学年	高学年
人間関係形成	自他の理解能力	・自分の好きなことや嫌なことをはっきり言う。 ・友達と仲よく遊び、助け合う。	・自分のよさが分かり、自分を好きになる。 ・相手の気持ちが分かり、異なる意見を理解できる。	・自分の長所や短所に気付き、自分らしさを発揮する。 ・友達のよいところを認め、励まし合う。
	コミュニケーション能力	・自分の気持ちを相手に伝える。（「ありがとう」や「ごめんなさい」を言う。） ・気持ちよいあいさつや返事をする。	・相手を尊重しながら、自分の気持ちを伝える。 ・友達と協力して活動に取り組む。	・思いやりの気持ちをもち、相手の立場に立って考え行動しようとする。 ・好ましい人間関係の大切さを理解し、自分の意見や気持ちをよりよく表現する。
情報活用	情報収集・検索能力	・身のまわりで働いている人のことが分かる。	・身近な職業について知る。	・様々な職業について必要な情報を探す。 ・収集した情報をもとに、気付いたこと、分かったことを分かりやすく発表する。
	職業理解能力	・係や当番の活動に取り組み、それらの大切さが分かる。	・将来のことや働く人への興味・関心をもつ。	・学んだことや体験したことを通して、働くことの大切さや苦労が分かる。
将来設計	役割把握・認識能力	・家族、学級の一員としての役割の必要性が分かる。	・家族、学級の一員として係や当番、家の手伝いを積極的に行う。	・社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さが分かる。 ・異年齢集団の活動に進んで参加し、その役割と責任を果たそうとする。
	計画実行能力	・きまりを守ろうとする。	・時間やきまりを守ろうとする。 ・準備や片付けを計画的に行う。	・将来の夢や希望をもち、実現をめざして努力する。 ・決められた時間やきまりを守ろうとする。
意思決定	選択能力	・自分のやりたいこと、好きなことに気付く。 ・よいこと、悪いことに気付く。	・自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え、進んで取り組む。	・主体的に判断し、よりよい選択・決定を行う。
	課題解決能力	・自分の身の回りのことは自分でできる。 ・嫌なことでも最後までがんばる。	・自分の仕事に責任をもって最後までやり通す。 ・自分の力で課題を解決しようと努力する。	・生活や学習の課題を見付け、自分の力で解決しようとする。

図3 白方小学校「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み」

③ 二つの視点でとらえたキャリア教育年間計画の作成

各学年ごとに、学習プログラムと全体計画を参考に作成した。指導計画の作成について

は、平成19年度はキャリア教育の視点から、「全ての授業の見直しをしよう。」といった観点で取り組んだ。したがって、計画訪問や授業公開日等で実践した指導案すべての中にキャリア教育の視点（4能力領域・8能力）を入れ、指導者は、その視点を意識して授業を展開した。

1年次の終わりに、2年次に向けて、児童・保護者からのアンケートをもとに、平成20年度の計画について話し合いをした。その結果以下のような課題が挙げられた。

- ・キャリア教育に対する児童や保護者への意識付けを図る。
- ・学年に応じたコミュニケーション能力を高めるスキル学習を実践する。
- ・児童の自尊感情を高める。
- ・仕事や働くことの大切さを理解させる。

この課題をもとに、平成20年度は各学年毎に、職業観・勤労観を育むことに深くかかわる「道徳」と「特別活動」を重点的に実践していく方針を立て、キャリア教育推進委員会で、以下に示したような「キャリア教育白方プラン」を作成した。

—キャリア教育の2つの視点—

- ・間接的なキャリア教育…職業観・勤労観を育むために必要となる基礎的な能力を育てる学習活動
- ・直接的なキャリア教育…人との触れ合いや体験活動を通して実践的な能力を育てる学習活動

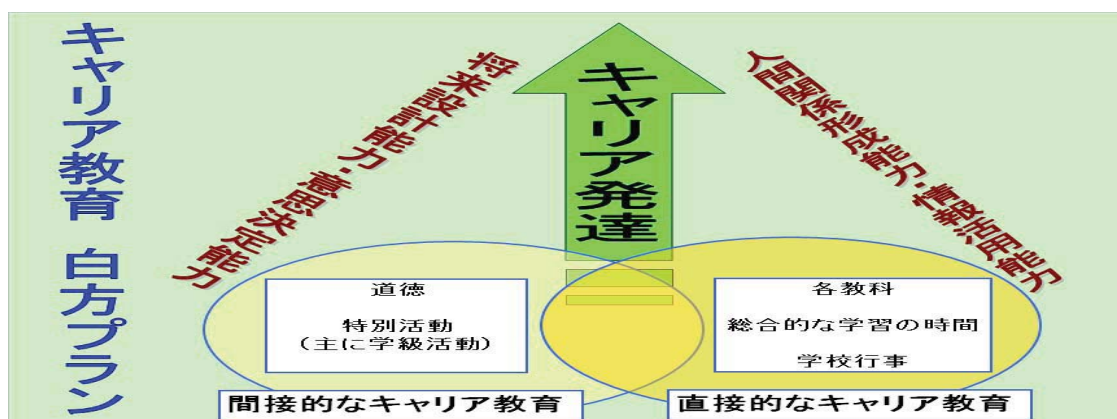


図4 平成20年度キャリア教育白方プラン

(3) 授業実践

① 間接的なキャリア教育

ア 道徳の実践

日々の家庭生活は、各家庭の存在と愛情に支えられている。しかし、児童が父母や祖父母、兄弟などの愛情を意識する機会は少ない。そこで、「家族のありがたさについて考えさせ、感謝や敬愛の念をもたせるとともに、自分から進んで家族のためにどんな手伝いができるかを考え、実践していこうとする態度を育てる」ことをねらいとして取り組んだ。キャリア教育では、「家族の一員としての役割の必要性が分かる（将来設計能力）」としてとらえ、授業を行った。

イ 特別活動（主に学級活動）の実践

集団生活の中では、他人とのかかわりをもって生きる力を高めることが求められている。その中でも、人の話が聞け、自分の話を分かってもらうことは、集団生活においても社会に出ても、大切な能力の一つである。この能力を人間関係形成能力

の中の「コミュニケーション能力」ととらえ、平成19年度は、5・6年生を対象にソーシャルスキルトレーニングを実施した。方法については、担任と担任外のT・T（ティーム・ティーチング）により行った。また、今年度は、1～4年生においてもコミュニケーション能力を高めるための授業実践を行っている。

② 直接的なキャリア教育

ア 学校行事としての実践

この写真は、平成20年10月14日の5・6年生児童を対象にしたキャリア教育講演会の様子である。講師の人材育成コンサルタントの増田勝之先生には、「夢に向かって」と題して、ゲームやクイズを取り入れて分かりやすく話を進めていただいた。特に、『夢の木』を描く場面では、子どもたちがスケッチブックに自分がイメージした思い思いの木を描き、その木を育てるためには、水や肥料をあげること、つまりは努力が大切であることを強調していた。講演会後の子どもたちの感想は以下のとおりである。

資料2 キャリア教育講演会の様子



- ◆キャリア教育講演会で、「夢の木」を描いて夢をかなえようと努力しているのは自分だけでなく、家族も協力してくれていることがわかりました。(5年男子)
- ◆私の夢はデザイナーです。でも今まで一度も努力していません。なのでこれからは、自分のやりたい職業のために努力してがんばろうと思いました。(6年女子)

イ 総合的な学習の時間の実践

3年生は、「ふるさと発見、東海村」の単元で、ゲストティーチャーを迎えて落花生の栽培を実践した。

(4) 児童の意識付けを図るための環境づくり

① キャリアコーナー

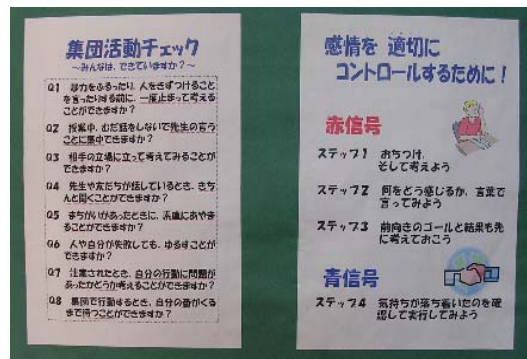
環境面では、以下に示すねらいで、各学年がキャリアコーナーを設置し、現在の実践が目で見分けるようにした。

- ・児童の意識付けを図る。
- ・目に触れることで、活動の見通しをもたせる。
- ・キャリア教育に対する理解を深める。

資料3 1年生のキャリアコーナー



資料4 5年生のキャリアコーナー



② キャリアマークの作成と活用

ア キャリアマークのデザインについて

平成20年度の1学期に、第5・6学年の児童を対象として、将来に向かって人とのつながりが大切だという視点から、「友だちと協力する」、「仲良くする」、「たくさんの人と知り合う」をキーワードとしたキャリアマークを募り、1点を選出した(図5)。デザインの意味は、以下のとおりである。

- ・星のマークは、将来の夢を描いた自分
- ・握手は、友達と仲良くするイメージ
- ・チョキは、たくさんの人と知り合える喜び
- ・グーは、友達と協力する喜び



図5 キャリアマーク

イ 使い方

- ・キャリアコーナーでの掲示に用いる。
- ・授業でキャリア教育に関する内容を示すときのポイントにする。
- ・児童のノート等への励ましスタンプとする。
- ・その他

5 研究のまとめと本校からの提言

(1) 児童・保護者のアンケートから

2年間のキャリア教育に関する研究の成果と課題を明らかにするために、平成19年11月と平成20年11月に全校の児童と保護者を対象に、アンケート調査を実施した。調査の内容は4能力領域に基づいた11項目とした。児童の調査結果では、大部分の項目において上昇傾向が見られ、特に「友達のよいところを見付けることができますか」「一人で宿題をしたり、明日の準備をしたりすることができますか」については上昇率が高い。児童と保護者の結果の関連では、90%以上の児童が「将来の夢やつきたい仕事がある、または少しある」と答えているのに対して、家庭では児童と将来の夢や職業について十分に話し合えていないという結果が得られた。このような結果を基に、学校・学年だより、授業公開日等を通して、「ぜひ家庭で将来のことについて話し合う機会を増やしてほしい」等、キャリア教育に関する学校の考えを伝えるようにした。

(2) 本校からの提言(カリキュラム作成に当たっておさえたいポイント)

- ・児童の実態をとらえ、何をどう伸ばすか重点を明確にすること
- ・キャリア教育にかかわる教育活動は広いので、焦点化して取り組むこと
- ・キャリア教育の視点で教育課程を見直すという意識が大切であること
- ・目指す児童像を明確にすること
- ・学年に応じた(系統性のある)取組を大切にすること
- ・学校の取組を家庭に伝え、理解と協力を得ること

小学校実践事例2 「夢を育て、学習意欲を高めるキャリア教育のカリキュラムの開発と実践」

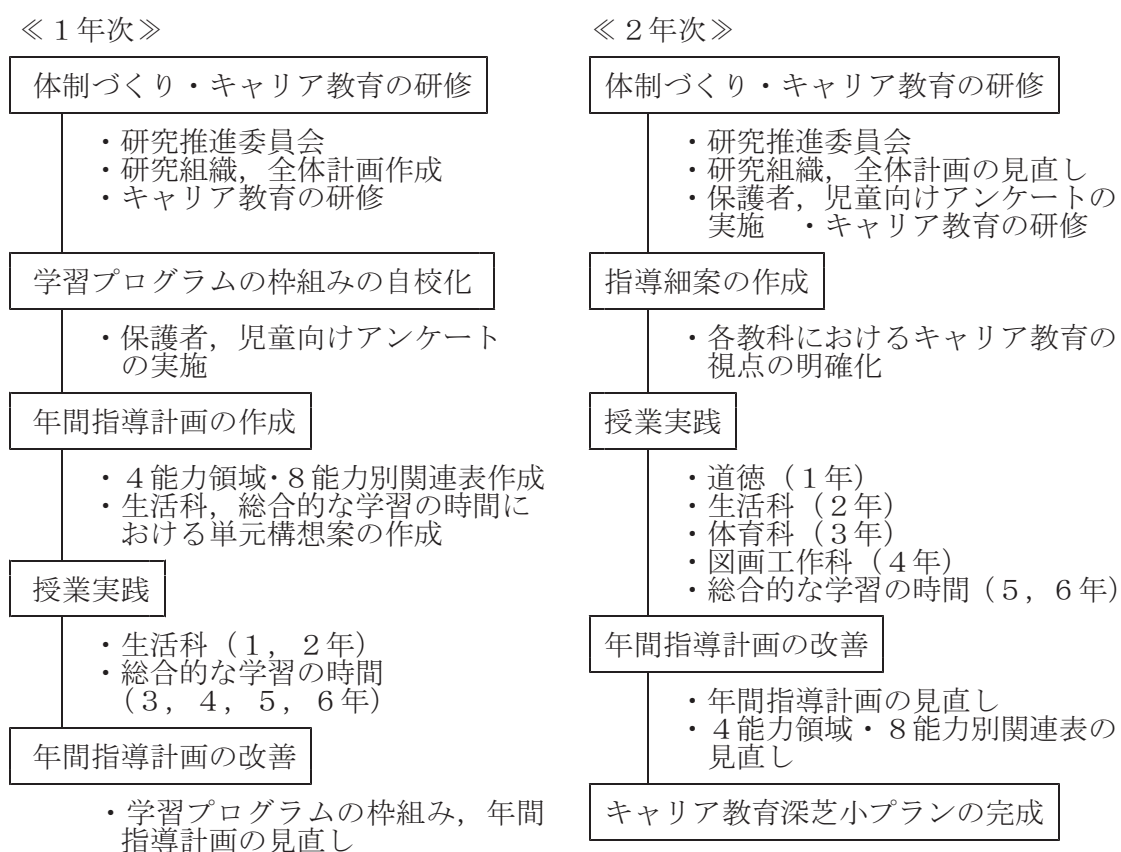
神栖市立深芝小学校 URL: <http://www.sopia.or.jp/fukashiba/>

1 学校の概要

本校は、神栖市の北西部に位置し、区画整理し造成された新しい住宅地域にある。学区としては、新旧住民が住んでおり、開校4年目を迎えた新しい学校である。平成20年12月16日現在、児童数577名、教職員数32名の中規模校である。今も新しい住宅が増えており、児童数は開校当時に比べると、145名ほど増加している。校内には、メディアセンターやオープンスペースの教室などがあり、施設面でゆとりがある環境の中で、「心豊かでたくましく、自ら学び自ら考え、実践できる児童を育てる」という学校教育目標を達成するため、全教職員が一丸となって日々の教育活動に取り組んでいる。

2 キャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発の概要

研究は、カリキュラムを開発しながら、授業実践を行い、疑問が生じたら話し合うというスタイルで、「計画→実践→改善→実践」という形式をとった。



3 特に力を入れてきた取組

- (1) 誰にでも指導できる「キャリア教育指導計画」の作成
- (2) 簡単にできる「総合的な学習の時間や生活科，他の教科での取組」
- (3) やってよかった「5年生と中学生との交流授業」

4 実践内容

(1) 誰にでも指導できる「キャリア教育指導計画」の作成

① 学習プログラムの枠組みの自校化

国立教育政策研究所生徒指導研究センターから出ている「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」を参考に、「職業観・勤労観を育てる学習プログラムの枠組み」を自校化していった。自校化のポイントは、次の3点である。

- 児童の実態に合っているか。
- 低学年，中学年，高学年と系統的になっているか。
- 家庭の教育力や保護者の実態に合っているか。

② 指導計画の作成

すべての教育活動はキャリア教育に結び付いているが、キャリア教育ととらえられるかどうかは、その内容が児童のキャリア発達を支援する観点に立って有機的に関連付けられているかどうかにかかってくる。そこで、次のように指導計画を作成した。

Step 1 育てたい力と単元の関連付け

すべての教科の単元についてキャリア教育の視点の位置付けをした。

Step 2 年間指導計画の作成

キャリア教育に関係の深い内容の単元を絞り込んで作成した。

Step 3 4能力領域・8能力別関連表作成

年間指導計画に書かれているものを4能力領域・8能力別に分類した。

Step 4 単元構想案（生活科・総合的な学習の時間）の作成

年間指導計画に沿って、生活科・総合的な学習の時間の単元構想案（指導計画，他教科との関連図）を作成した。

Step 5 指導細案の作成

年間指導計画に書かれている教科，道徳，学級活動についてキャリア教育の視点を入れた，表1のような指導細案を作成した。

表1 指導細案 第3学年 国語科「自分を紹介するスピーチをしよう」

単元名	国語「自分をしようかいするスピーチをしよう」5月	
目標	<ul style="list-style-type: none"> ○自分をよりよく知ってもらおうとしながら話したり，話し手のことをよく知ろうとしながら聞いたりしようとする。（関心・意欲・態度） ○スピーチに取り上げる順序を考えて話したり，知りたいことを考えながら聞いたりし，紹介したいことを書き出したりして，順序を整理することができる。（話すこと・聞くこと） ○新出漢字・読み替え漢字・語句の意味を身に付けることができる。（言語事項） 	
キャリア教育の視点	1-①（自他の理解能力） ○友達のよいところを見付け，相手を尊重する。 1-②（コミュニケーション能力） ○自分の意見や気持ちを相手に分かりやすく伝える。 ○友達の気持ちや考えを理解しようとする。	
時	学 習 内 容	キャリア教育の視点
1	1 自己紹介のスピーチをするという課題を知り，自分について知ってもらいたいことを書き出す。漢字の練習をする。	1-① ・友達のスピーチを聞き，相手のことをよく知ろうとしながら話を聞くことができるようにする。 1-② ・知りたいことを考えながら友達のスピーチを聞き，自分の考えを相手に分かりやすく伝えることができるようにする。
2	2 友達に知らせたいことの中から，スピーチで取り上げる事柄を選ぶ。	
3	3 スピーチで話す順序を考えながら，スピーチメモをつくる。	
4	4 スピーチの仕方，聞き方に気を付けて，グループでスピーチの練習をする。	
5・6	5 互いに自己紹介のスピーチを行い，スピーチに適した話し方や聞き方を身に付ける。	

(2) 簡単にできる「総合的な学習の時間や生活科、他の教科での取組」

① 第6学年 総合的な学習の時間「地域の人から夢を見つけよう」

資料1 第6学年 総合的な学習の時間 指導計画

第6学年では、総合的な学習の

時間に自分の将来の夢や職業について学習している。この単元は内容的にも勤労観、職業観に直接関係しており、学習方法的にもキャリア教育の4能力領域・8能力が育つように構成されている。

「であう」では、自分で調べてみたい職業を決め、仕事に対する自分の考えをまとめたり、家の人の仕事に対する考えを調べたりするが、第14時では、保護者の中から様々な職業の方にゲストティーチャーとして来ていただき、話を聞いた。本やインターネットだけではなく、人のかかわりの中から仕事の内容や工夫、仕事に対する思いについて触れることができた。

「ふかめる」では、体験を通して職業について調べ、働くことの大切さについて考えた。第30時では、保育園、食料品店、衣料品店、ホームセンター、薬局店、エステ店で職場体験を実施した。1時間半から3時間という短い時間ではあるが、仕事の難しさややりがいなどを子どもたちなりに実感することができ、働くことについての関心が深まり、働くことの大切さについて考えることができた。

「ふりかえる」では、夢に向かった計画を立てた。第54時では学んだことの発表会や意見交換を行い、自分の将来を見つめ直し、今の自分にできることを考えた。

目 標

- 自分らしさを生かし、相手の立場に立って考え、発言したり、行動したりすることができる。(人間関係形成能力) 1
- 様々な職業についての理解を深め、働くことの大切さが分かり、自分の生活と生き方との関連を考えたり、自分に必要な情報を選んだりすることができる。(情報活用能力) 2
- 憧れとする職業をもち、今しなければならないことを考えることができる。(将来設計能力) 3
- 目標実現のための方法を考え、主体的に努力することができる。(意思決定能力) 4

<キャリア教育の視点>

- 1-①自分の長所や短所に気付き、自分らしさを発揮する。
- 1-②相手の立場に立って考え発言したり、行動したりしようとする。
- 2-①自分が必要な情報を探し、活用する。
いろいろな職業や生き方が分かる。
- 2-②職業体験等を通し、働くことの大切さや苦勞が分かり、自分の生活と生き方との関連を考えようとする。
- 3-①社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さが分かる。
- 3-②就きたい職業やなりたいものなどの希望をもち、今しなければならないことを考え、実践するための簡単な計画を立てる。
- 3-③就きたい職業やなりたいものなどの希望をもち、実践するための簡単な計画を立てる。
- 4-①自分に適した職業を主体的に選択し、自分に合った生活や学習上の課題を見つける。
- 4-②将来の夢や希望をもち、実現を目指して努力しようとする。

学習活動計画 (55時間扱い)

時	学 習 活 動	1	2	3	4
であう	1～8	① ②			
	9～10				①
	11～15	① ②	① ②		
ふかめる	16～29		① ②	②	
	30～42	①	②	①	
	43～46	① ②	②		
	47～48			②	
ふりかえる	49～53		①		
	54～55	②		②	① ②

- 1 人間関係形成能力 (かかわる力) 2 情報活用能力 (見つける力)
- 3 将来設計能力 (えがく力) 4 意思決定能力 (もとめる力)

② 第2学年 生活科「レッツゴー！町たんけん」

生活科の授業では、生活科の学習内容を行いながら、キャリア教育の4能力領域・8能力をどう育てていったらよいか分かりやすくするために、目標を表2のように整理した。

表2 第2学年 生活科 目標

キャリア教育の視点 単元の目標	○自分や友達のよいところに気付く。 1-① ○お世話になった人に感謝する。 1-① ○自分の考えをみんなの前で話す。 1-② ○友達と仲良く活動する。 1-②	○身近で働く人々の様子に興味・関心をもつ。 2-① ○当番の活動に取り組んだり、自分の役割を果たしたりすることができる。 2-②	○集団の一員としての役割の必要性が分かる。 3-① ○見通しをもって計画を立て実行することができる。 3-②	○自分のやりたいことに気付く。 4-① ○自分で決めたことを最後まで実践しようとする。 4-②	
	○自分の生活している町に関心を持ち、地域の人々や様々な場所に親しみをもってかかわったり、友達と協力して春の町を探検したりしようとする。 (関心・意欲・態度)	○グループの仲間と協力して春の町を探検しようとする。 1-②	○自分の生活している町に関心を持ち、身近で働く人々やお店などに、親しみをもってかかわろうとする。 2-①	○見通しをもって町探検の計画を立てることができる。 3-②	○探検したい場所や調べたい場所を決めて、春の町を探検しようとする。 4-②
	○地域の人々や様々な場所と適切にかかわることや、安全に生活することについて考え、町探検で見つけたことや気付いたことについて自分らしい方法で表現することができる。 (思考・表現)	○町探検で見つけたことや気付いたことを友達と協力して発表することができる。 1-② ○町探検でお世話になった人に感謝することができる。 1-①	○地域の人々や様々な場所と適切にかかわることや、安全に生活することを考えることができる。 2-① ○発見したことや気付いたことについて、進んで表現することができる。 2-① ○自分の分担された役割を果たすことができる。 2-②	○グループの中で自分の役割の必要性が分かり、発見したことについて表現することができる。 3-① ○町探検で見つけたことについて、自分らしい発表の方法を選び、計画を立てて準備することができる。 3-②	○グループの中で自分がやりたいことに気付く、役割分担することができる。 4-① ○グループで分担した役割を最後まで頑張る、発見したことや気付いたことを自分らしい方法で表現することができる。 4-②
	○町の自然や人々、社会、公共施設などの様子や自分たちの生活とのかかわりに気付くとともに、自分の町のよさに気付くことができる。 (気付き)	○町のよさについて、友達と意見を交流してお互いのよさに気付くことができる。 1-①	○発表会を通して、町の自然や人々、社会、公共施設などの様子や、自分たちの生活とのかかわりに気付き、地域で働く人々に関心をもつことができる。 2-①		

生活科の目標をキャリア教育の視点と照らし合わせるにより、生活科の学習をしながら、キャリア教育を実践していくことが可能となった。また、評価を行うときにも、生活科としての評価を行いながら、キャリア諸能力の育ちを見とることができた。

探検の場所を家の周りや通学路、身近に遊んでいる公園などにすることによって、児童は意欲的に探検することができた。身近な場所だったので、自分の意見や考えをもちやすかったようだ。グループ活動では、資料2のようにワークシートを工夫し、一人一人の役割や分担を明確にすることで、自分の活動に責任をもって取り組むことができ、友達と協力することの大切さを知ることができた。

資料2 ワークシート

しげき		を作る
グループ名 花と木たんけんたい		名前
探検の ドキドキワクワク町たんけん		
みんなに教えたいこと		書く人 何人
① いすのいどうこうえんにいぬのほばかたさんあつたよ。		
② 木かげの前にパンとビオラとかげのアカイはいあつたよ。		
③ リカのほがふさふさしてたよ。		
④ ほたけのいねがきれいです。		

探検後の発表会では、発表の中にクイズなどを入れ、発表者と聞き手との交流を図った。発表を聞いた後、自分の意見をまとめる時間を設けることで意見交流が活発に行われた。また、意見を伝えることが苦手な児童は、意見表明のプラカードを活用することで参加しやすくなった。更に、聞き手が一生懸命聞くことで、意見を交流することの楽しさを味わうことができた。単元終了後、自分の意見や考えを伝えることのできる友達と一緒に協力して活動することのできる児童が増えた。

③ 4年 図画工作科「ようこそ 絵の世界へ」

資料3 4年 図画工作科 指導計画

<p>目 標</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 作品の表現のよさや込められた思いを進んで感じ取ろうとしたり、感じたことを進んで伝えようとしたりする。(関心・意欲・態度) ○ 作品を通して、作品の表現のよさや込められた思いを考えたたり想像したりすることができる。(発想や構想の能力) ○ 自分なりの感覚を働かせて、作品の表現のよさや込められた思いを感じ取ることができる。(鑑賞) <p><キャリア教育の視点></p> <p>1-②自分の意見や気持ちを相手に分かりやすく伝える。 友達と協力して学習に取り組む。</p> <p>2-①作品に込められた作者の思いを、自分なりに感じ取ることができる。</p> <p>学習活動計画 (2時間扱い)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>次</th> <th>時</th> <th>学 習 活 動</th> <th>関</th> <th>発</th> <th>創</th> <th>鑑</th> <th>1</th> <th>2</th> <th>3</th> <th>4</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>1</td> <td>アイマスクを着用した友達に、複製画の説明をする。</td> <td>○</td> <td>○</td> <td></td> <td>○</td> <td>②</td> <td>①</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>2</td> <td>複製画の作者になったつもりで、お気に入りの複製画の紹介文を書く。</td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>①</td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table> <p>1 人間関係形成能力 (かかわる力) 2 情報活用能力 (見つける力) 3 将来設計能力 (えがく力) 4 意思決定能力 (もとめる力)</p>		次	時	学 習 活 動	関	発	創	鑑	1	2	3	4	1	1	アイマスクを着用した友達に、複製画の説明をする。	○	○		○	②	①				2	複製画の作者になったつもりで、お気に入りの複製画の紹介文を書く。		○		○		①		
次	時	学 習 活 動	関	発	創	鑑	1	2	3	4																								
1	1	アイマスクを着用した友達に、複製画の説明をする。	○	○		○	②	①																										
	2	複製画の作者になったつもりで、お気に入りの複製画の紹介文を書く。		○		○		①																										

キャリア教育の視点を取り入れた、図画工作科の鑑賞の授業である。第1時では、ミレー作「落穂拾い」やゴッホ作「ひまわり」など12作品の複製画を用意し、3人グループで1作品を鑑賞した。グループの中で、1人はアイマスクをし、残りの2人が絵の様子を伝え、最後にアイマスクを外して、印象の違いを話し合った。児童は絵の様子を相手に分かるように伝えるために表現の仕方を工夫した。中には、作品に込められた作者の思いまで伝えようとするグループもあった。

第2時では、自分で気に入った複製画の紹介文を書いた。

(3) やってよかった「5年生と中学生との交流授業」

5学年の総合的な学習の時間のテーマは二つあり、「ふれあい ささえあう 思いやりの心」(福祉：56時間)と「中学校へ夢をつなげよう」(10時間)である。

本校では、中学校への移行をスムーズにするために、5年生で中学生との交流を考えた。6年生になると、入学説明会や授業参観、部活動参観等があるが、中学生になる準備に十分な時間がかけられ、これからの小学校生活をより充実させたいという理由で、5年生での交流を進めた。

表3 5年 総合的な学習の時間 学習活動計画

10時間扱い	
であう	○中学生についてのイメージや中学生になった自分について話し合う。(1時間)
ふかめる	○中学生による学校紹介を聞く。(中学校と小学校の違い、自治的・自主的活動、頑張っている点などについて) ○中学生と一緒に学び、ものの方や考え方を深める。 ○中学生から学んだことをまとめ、お互いに発表し合い、自分の学びや考えを深める。(8時間)
ふりかえる	○中学生からの学びを通して、自分の生き方について見つめ直し目標を実現するために自分が努力すべきことを考える。(1時間)

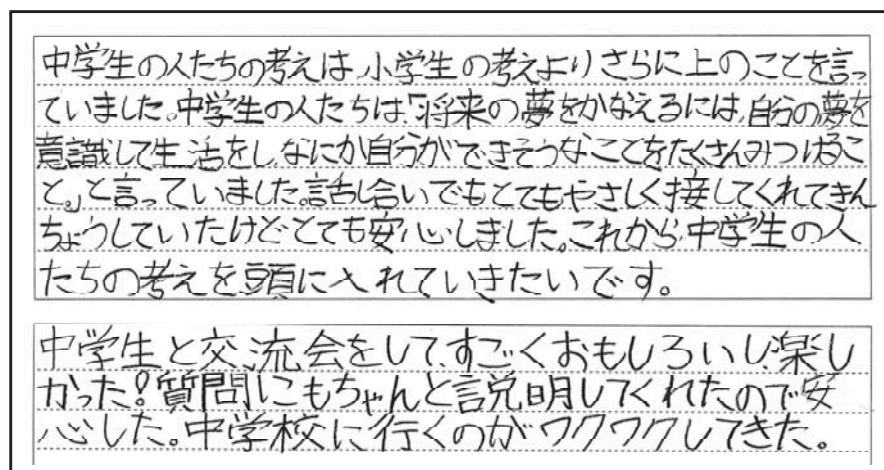
「であう」では、中学生についてのイメージづくりをし、「ふかめる」では、学校紹介や交流授業を通して中学校への考えを深め、「ふりかえる」では、今後の目標を作り、自分が努力すべきことを考えた。

中学生による学校紹介では、中学校から新旧生徒会役員14名が小学校に来て、中学校生活と小学校生活との違いについて分かりやすく説明してくれた。小学生からの質問にも快く答えてくれ、冗談をまじえながら楽しく交流することができた。中学校の様子が分かり、中学校への期待が膨らんだ児童が多かった。

その後、中学校に行き、5年生3クラスと中学3年生4クラスの児童生徒で、小中学生混合の8名ずつのグループをつくり、小学校と中学校の先生によるTTで交流授業を行った。テーマは「将来の夢について」である。それぞれの夢について聞いた後で、小学生は中学生が夢に向かって努力していることや、中学校生活で頑張っていることについて話を聞いた。小学生は、

中学生が夢に向かって頑張っている話を聞いて、すごいと感じたり、自分もそんな中学生になりたいと憧れたりする様子が見られた。中学生は自分を見つめ直し、改めて自分の夢について確認したり、実現に向けての意欲を高めたり、同じ中学生の頑張りに刺激を受けたりしているようだった。中学校に行くことについて楽しみだと答えたのは、この単元を始める前に25人(29%)だったのが、交流授業後には68人(80%)に増えた。

資料4 中学生との交流授業後の感想



保育士になりたいと言っていた児童は、この交流授業で中学生から「ピアノを練習した方がいいよ」というアドバイスをもらい、実際にピアノの練習を始めた。中学生からのアドバイスが、自分の夢をさらに深く考えるきっかけとなったようである。

5 研究のまとめと本校からの提言

(1) 研究のまとめ

キャリア教育を進め、四つの力（人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力）を育てる学習プログラムの枠組みを自校化し、さらに授業実践を通して見直すことによって、育てたい力が明確になった。また、指導計画を基に授業を行った結果、児童の意識が変化し、将来の夢や希望をもつ児童が増え、自分の夢や希望を実現するために、意欲をもって学習や運動、生活に取り組む児童が増えた。また、家庭でも、将来のことについて話し合うことが多くなった。

(2) 本校からの提言

○ 学習プログラムの枠組みを自校化しよう！

ポイントを決めて、学習プログラムの枠組みを自校化し、勤労観・職業観を育てる指針を明確にすると、キャリア教育で育てたい力がはっきりし、指導しやすくなる。

○ 年間指導計画を作成し、実践してみよう！

本来、キャリア教育はすべての教育活動に結び付いているが、あえて単元を絞って指導計画を作成すると、実践しやすくなる。

○ 総合的な学習の時間、生活科や教科で実践してみよう！

総合的な学習の時間や生活科は、目標とキャリア教育の視点の関連が深いため、実践しやすい。また、その他の教科は、今までの教育活動をキャリア教育の視点で見直すことによって、簡単に実践することができる。

○ 地域との連携を大切に！

保護者や地域の方々と連携することによって、貴重な体験ができ、キャリア教育に結び付く体験も簡単に計画できる。

○ 小中連携は思ったより簡単！

中学生は、身近なキャリアモデル。ぜひ中学生と交流し、「あんな中学生になりたい」から、「小学校生活でこんなことを頑張る」という意欲につなげたい。

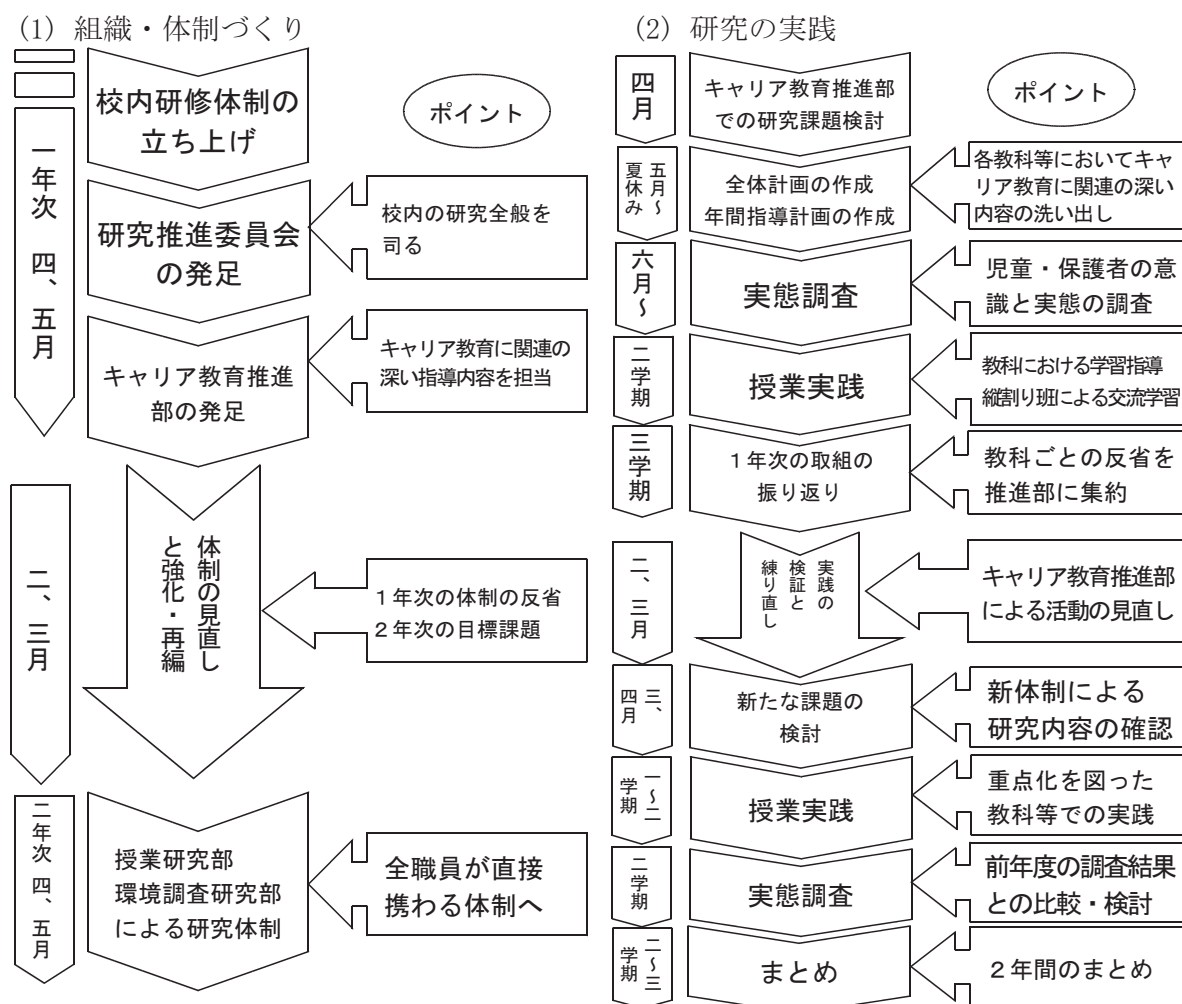
小学校実践事例3 「学校内外の人々との交流活動を重視したキャリア教育の実践」

古河市立駒羽根小学校 URL: <http://www12.ocn.ne.jp/~komasho/>

1 学校の概要

本校は、県西部、古河市の中心部に位置し、昭和50年創立の、全校児童 280名の中規模校である。学区に隣接する工業団地等の企業に勤務する職員の社宅が多く建ち並び、その家庭の子どもたちの通学の便を考え、近くの小学校から分離、新設された学校である。現在は、社宅があった所が住宅地になってきて、他の地域から転居してきた住民も多くなり、様相も変わってきている。学区内北寄りの地域は、農耕地が多く、この地域には創立当時から多くの住民が多い。

2 キャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発の概要



3 特に力を入れてきた取組

- (1) 機動性と協働性を生かした組織づくり
- (2) 学校の実態に応じた年間指導計画の工夫改善
- (3) 学校内外の人々との交流活動を通じた勤労観、職業観の育成

4 実践内容

(1) 機動性と協働性を生かした組織づくり

① キャリア教育推進部の設立（1年次）

1年次は、国語、基本的な生活習慣の育成及びキャリア教育を校内研究の三つの柱として取り組んだ。キャリア教育の研究を推進する組織としてキャリア教育推進部を設立し、そこで研究内容の原案等について検討し、それを全体会で図り、共有化するようにした。キャリア教育推進部の部員は低・高学年ブロックより各2名と研究主任の5名で、月2回を目安に部員会を開催した。少人数の組織であるためスケジュール調整がしやすく、必要に応じて部員会を開催できるなど、機動的な活動を行うことができた。

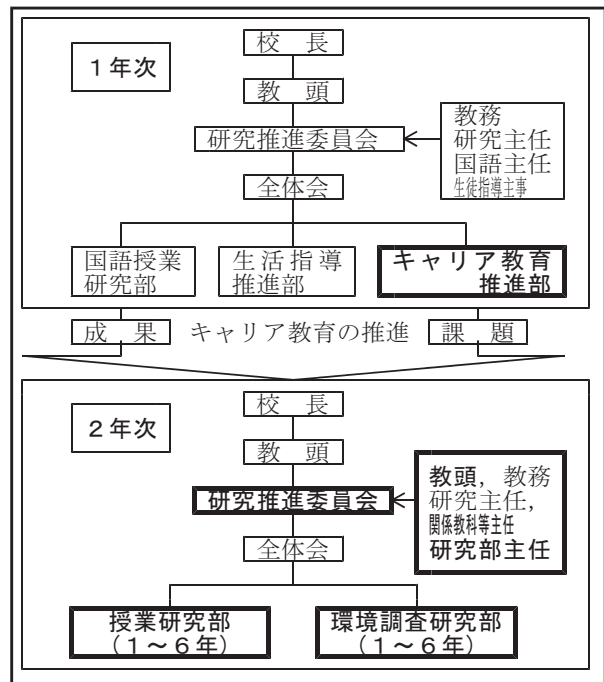


図1 1年次から2年次における組織の改編

② 全職員で取り組む体制へ（2年次）

ア 研究推進委員会の強化

2年次は、校内研究をキャリア教育の一つに絞り、学校全体でキャリア教育の研究に取り組めるようにした。また、そのための組織改編を行った。まず、キャリア教育推進部を廃し、その機能を研究推進委員会に取り入れ、そこを核として研究を推進するようになった。研究推進委員会の構成員も新たにした。具体的には、教頭が加わり、交流活動に関わる外部との交渉を効率的に行えるようにした。また、キャリア教育の内容に関係の深い生活科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の主任等が研究推進委員会に加わり、キャリア教育の内容の重点化を図るという2年次の研究に対応した組織の改編を行った。本委員会は、研究の基本的な方向性を検討したり、各研究組織と連絡調整等を行ったりする場として月に1回を目安に、必要に応じて開催するようになった。

イ 授業研究部、環境調査研究部の新設

全職員の協働性を発揮して、より深く研究に携われるよう、二つの研究部を新設し、誰もがいずれかの研究組織に所属して活動できるようにした。

- ・ 授業研究部…授業研究会を通しての、年間指導計画の作成と実践検証、見直し
単元構想表の作成（低・中・高学年ブロックの小グループ化）
- ・ 環境調査研究部…学習の足跡が分かる掲示物の作成、事前調査、実態調査
（アンケート担当、掲示物担当など小グループ化）

ウ 組織改編による利点

- ・ 研究推進力と組織間の連絡調整力の向上
- ・ 全職員参加の研究体制確立による協働性を発揮した研究の推進
- ・ 組織の小グループ化による機動性を発揮した研究活動の展開

(2) 学校の実態に応じた年間指導計画の工夫改善

① キャリア教育の年間指導計画の作成（1年次）

先進校の年間指導計画等を参考に、国立教育政策研究所が示した「学習プログラムの枠組み（例）」を自校化し、それに基づいて年間指導計画を作成した。各教科等において、1年間を見通してキャリア教育にかかわる内容を指導する単元や、その単元において育むキャリア諸能力を洗い出し、表記した。

キャリア教育は、どの教科等でも行うことができるものであり、キャリア教育との関連を意識した指導を行うことで4能力領域・8能力を育むことができることを職員間で共通理解を図り、共通実践のための方向性を明確にした。

② キャリア教育を行う教科等の重点化と単元構想表の作成（2年次）

1年次に、全教科等にわたってキャリア教育の4能力領域・8能力を育む指導を行ったが、実際に指導してみると、勤労観、職業観にかかわる内容が色濃く出る教科等と間接的な指導が多い教科等があったことから、2年次は、キャリア教育を行う教科等の重点化を図った。具体的には、生活科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間においてキャリア教育の視点を踏まえた指導を重点的に行い、そのねらいが効率的、効果的に実現できるようにした。これらの教科を選んだ主な理由は、次のとおりである。

- ・生活科…教科のねらいで掲げられている自立の基礎を養うという点がキャリア教育の自立の視点と通ずる。
- ・道徳…勤労観の育成にかかわる内容項目があり、働くことの大切さや喜びの内面化を図る指導を行うことができる。
- ・特別活動…集団活動を特質としており、人間関係形成能力の育成に適している。
- ・総合的な学習の時間…体験活動を重視した課題解決学習の展開は、選択能力や課題解決能力の育成に適している。また、指導内容が学校の裁量に任されており、研究実践の場として効果的である。

表1 年間指導計画の抜粋

第5学年 キャリア教育年間指導計画			
月	4月	5月	6月
国語	本に親しみ、人間を見つめよう 1-①	要旨をとらえよう 2-① 調べたを整理して書こう 2-①	読書の世界を広げよう 3-①
社会	米づくりのさかんな庄内平野 2-①②	水産業のさかんな枕崎市 2-①	これからの食料生産とわたしたち 2-①②
算数	小数 3-② 整数の見方と計算 1-①	垂直と平行 1-② 小数のかけ算とわり算 2-②	いろいろな四角形 2-①
理科	植物の発芽 3-①	植物の成長と肥料・日光 3-②	天気の変化 2-① 植物の成長と肥料・日光 3-②
音楽	にっぽんのうた みんなのうた 1-②	音の重なり 1-②	曲の持ちようを生かして 1-②
図画	紙を切りぬいて 1-①	こんなとき感じる こと 1-①	
家庭	どのように生活しているのかな 1-①	わたしにできる ことをやってみよう 3-①	
体育	体ほぐしの運動 1-① フォークダンス 1-②	体力テスト 2-② 短距離・リレー 4-① 鉄棒運動 4-①	ソフトボール 1-② けがの防止 2-① 水泳 3-①
道徳	命 1-① ドラえもんの声 3-①	愛する茶々ちゃんへ わたしの心のアルプス 上を向いて歩こう わたしは広がる 3-①	うばわれた自由 3-① 母とながめた一番星 4-② ことばのおくりもの チョモランマ 清福登山殿 2-②
学級活動	学級のめあて 3-② 学級の組織 3-① きれいな学校にしよう 3-① 1学期の決意 3-②	友達の輪を広げよう 1-② 楽しい宿泊学習 3-② 学習の仕方 3-② 私たちの体と成長の変化 1-①	雨の日の過ごし方 3-① 声のポストの使い方 4-② 原子力について 2-① 歯周病の予防と口の衛生 2-①
学級活動の時間	体や地球にやさしい食生活を求めて ○水田をつくろう 3-①	○課題をつくろう 4-②	○野菜をつくろう 3-①
行事	始業式 3-①	英語活動 1-② 宿泊学習 1-①	英語活動 1-② 陸上記録会 4-②

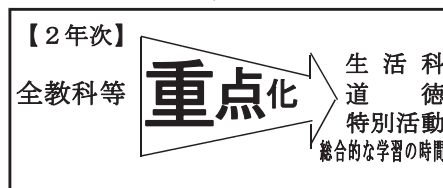


図2 教科等の絞り込み

さらに、重点指導する教科等では、年間指導計画等をさらに具現化した表2のような単元構想表を作成し、どの場面でどう進めていくのかがとらえやすいようにし、それを活用しながら実践できるようにした。

表2 6年 総合的な学習の時間 単元構想表の抜粋

総合的な学習の時間におけるキャリア教育単元構想表			
4月	5月	6月	7月
<p>明日を見つめて 今年度の見通し 将来つきたい職業を 考えよう ・自分が調べたい仕事について調べ、まとめる計画を立てることができる。(3-②)</p>	<p>さつまいもの畝作り・苗 うえ ・仕事の大切さがわかり、責任を持って取り組むことができる。(2-②)</p>	<p>職業につくためには、どうすればよいか調べよう。 ・身近な人から学ぼう ・身近な人から学んだことを基に、自分がつきたい職業について考えることができる。(3-①)</p>	<p>(2) 働く人から学ぼう ・話を聞くことにより仕事にはさまざまな役割があることやその大切さがわかる。(3-①) ・自分が聞きたいことを相手にわかりやすく伝えることができる。(1-②)</p> <p>じゃがいも掘り ・縦割り班活動を通して、高学年としての役割を自覚することができる。(3-①)</p>

(3) 学校内外の人々との交流活動を通じた勤労観、職業観の育成

① 全校で取り組む異学年間の交流活動（生活科・総合的な学習の時間）

じゃがいも・さつまいもを育て収穫する学習活動において、異学年間で交流活動を行った。上級生と下級生のかかわり方を学び合ったり、植物を育てたりする作業を通して、特に勤労観を育てていくことをねらいとして行った。

交流するためのグループとして、全学年児童を10数班の縦割り班に分け、畝作りから除草作業や収穫まで、異年齢集団の班を母体として活動した。畝作りを高学年が担当するなどして、高学年児童が自分の縦割り班の中での役割を学んだり、低学年児童は、その姿を見ることによって、分担することの大切さを学んだりすることができた。収穫後は、縦割り班の活動から離れ、学年間の交流活動を行った。高学年と低学年の交流活動では、収穫した芋を高学年が調理し低学年と一緒に会食する活動を、中学年のブロックでは、廃棄される芋の蔓を用いて一緒にグループをつくって遊ぶ活動を計画し、実施した。

高学年は、自分たちが楽しむだけでなく、下級生にも楽しんでもらえるような企画を考えるなど、下級生とのかかわり合いを意識した活動を行うことができた。会食する場面でも、高学年の児童は低学年の児童を思いやる言動が見られた。低学年の児童は、ケーキ、天ぷら等を作ってくれた高学年の児童にお礼の手紙を贈り、感謝の意を表した。中学年ブロックでは、蔓で長縄や籠を作って一緒に遊び、楽しむ活動を行った。異学年間の交流活動を通して人間関係形成能力を育むことができた

資料1 協力して畝を作る児童



資料2 児童の感想

さつまいもとりのと同時に、虫とりを、三年生とやりました。
けいそのあとさつまいもほりを行いました。
小さいさつまいもは、かいたけい、三年生との関係は、ふかまてよかったです。

また、これらの異学年との交流活動を通して、上級生は、自らの役割を自覚し、下級生は身近なキャリアモデルである上級生への憧れの気持ちを、将来の自分の在るべき姿とリンクさせてとらえることができた。

② 保護者とかかわり、学ぶ活動（1年 生活科）

本校には、授業者の補助的な指導をお願いする生活科ボランティア登録制度がある。「みんなだいすき」という単元において保護者をゲストティーチャーとして招いて学習活動を行った。

この単元は、家族が喜ぶ仕事を行うことを学習課題とし、家事を体験しながら家族の役割や仕事の内容を学ぶとともに、自分の役割を考え、実行するという構成である。

掃除、靴洗ひ、アイロン掛けなどの家事を体験する場面では、最初は、うまくいかなかった作業も保護者の方の実演を交えた指導を通して、コツをつかみ、上手くできるようになっていった。「できた！」という喜びの声が教室のあちこちであがった。児童は家事の大変さを肌で感じるとともに、家事を行ってくれていた保護者に感謝の気持ちをもつことができた。自分ができる家の仕事を考え、実行することで保護者から褒められる体験をした児童も多くいた。

家庭内の役割を学び、自分の役割を果たす喜びも体験することができるなど勤労観の育成につながる学習を行うことができた。

③ ロータリークラブの方との交流活動（6年 総合的な学習の時間）

2年次の取組として、校外の人々との交流活動を多く取り入れるようにした。その一つとして、6年の単元「明日をみつめて」の「つかむ」段階において、ロータリークラブに所属している方5人を招いて話を聞く学習活動を行った。5人の方が従事している職業は、介護福祉、農業、不動産、幼稚園（教育）、建築業であった。

事前の打合わせにおいて、職業に対する仕事の内容などの知識面の話がメインとなるのではなく、仕事に対する夢ややりがい等を話していただくことをお願いした。

体育館において、職業別の五つのコーナーを設置し、課題を同じくするメンバーのグル

表3 1年 生活科 指導計画

1 単元名 みんなだいすき		2 指導計画(12時間扱い)				
内容	時間	主な学習活動	キャリア教育の視点	評価規準		
				関	思	気
家族っていいな。家の人と一緒にやろう。お仕事名人になろう	2	○自分の家族のすてきなところを見つける。	1-②			○
	2	○家族が喜ぶことを考えて、家族を喜ばす計画を立てる。	3-① 1-②	○	○	
家でもチャレンジ私に任せて	5	○学校で練習できそうな家の仕事を決め、計画を立てる。	1-② 3-①	○	○	○
	3	○学校で練習した仕事や他にもできることを見つけて、やってみる計画を立てる。	3-①	○	○	○

表4 6年 総合的な学習の時間 指導計画

1 単元名 明日をみつめて		2 学習計画(51時間扱い)				
過程	時間	主な学習活動	キャリア教育の視点	評価規準		
				課	問	表
つかむ	12	○仕事について考えよう。 ・係活動や清掃活動など、現在の仕事について考える。 ・「わたしの夢」を用い、自分のライフサイクルを考える。 ・身近な人から仕事の様子について取材する。	2-② 3-① 4-①	◎	○	○
		・自分の適性や自分に向いている仕事を知る。 ・地域の社会人の方から仕事についての話を聞く。 ・調べてみたい仕事について課題をもつ。	2-①② 4-①		◎	
			2-① 1-② 4-②	○	◎	
				◎	○	
調べる	17	○仕事について調べよう。 ・課題ごとにグループをつくり、調べ、まとめる計画を立てる。 ・インターネットや図書資料を通して仕事の内容について調べる。	3-② 2-①②	○	◎	◎
まとめる	7	○仕事についてまとめよう。 ・図や表、グラフなどを活用して、自分たちの課題についてまとめよう。	2-①②	○	◎	
発表する	1	○1次発表会をしよう。 ・順序よく話したり、予想される質問の答えを考えたりして、相手に分かりやすい発表の練習をする。 ・調べたことをポスターセッション形式で発表する。 ・発表を聞き、分かったことについてまとめる。	1-①② 2-② 1-①② 1-①②	○		◎
					◎	
深める	5	○1次発表会の反省をしよう。 ・発表して、疑問に思ったことや追究してみたいことを発表資料に付け加える。 ・職場見学をして、職場で作業する	2-① 2-①②	◎	○	○
					○	

ープが各コーナーを回りながら話を聞くことができるパビリオン方式で行った。

自分の農園で栽培しているそばが認められサミット会場のホテルに納入している話を聞き、「もしかすると世界の首脳がこの人が作ったそばを食べたかもしれない」と驚く児童、建築に携わっている人から、面積を求める公式が仕事に役立っており今の勉強が大切だと聞いて、メモを取る児童など、心を動かされ真剣に聞いている姿が多く見られた。

児童の多くが働くことと学ぶことがつながっていることを感じる事ができた。また、職業そのものに対する理解というより、職業に携わっている人に魅力を感じ、あこがれのイメージをもつ事ができた。

小学校段階では、職業そのものよりも、そこに従事している人の生き方の向こうに職業が見えるようにすることが大切だと考える。

資料 3 説明に聞き入る児童



図3 交流の幅の拡大

5 研究のまとめと本校からの提言

(1) 機動力と協働性が発揮できる組織をつくる。

全職員が協力し、創意工夫を凝らした研究をすることで大きな成果を得られることから、機動力と協働性が発揮できる組織をつくる必要がある。そのためには、全職員が何らかの組織に所属し活動できるようにすること、各研究部の人数は多くしないこと、研究内容と密接なかわりのある組織をつくる事が重要である。

(2) 取り組む教科等の重点化を図る。

全教科等で取り組んだ1年次の研究から見えてきたことは、キャリア教育が進めやすい教科等と難しい教科等があるということである。そこで、2年次は、生活科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の四つの教科等に絞って研究に取り組んだ。その結果、研究の成果を手応えとして感じながら、確かな研究の歩みをする事ができた。初めてキャリア教育に取り組む際には、キャリア教育の内容が色濃く出ている教科等から取り組む方が取りかかりやすいと考える。

(3) 役割を果たし、役立っている実感を得られる場面を設定する。

他学年児童、保護者、社会人との交流活動から勤労観を育む事ができたことが、今回の収穫であった。アンケート調査の結果では、昨年度と比較して、「家で自分の役割を考えて、手伝いをする」と答えた児童が73%から80%へ、「自分でやるべきことを最後までできる」と答えた児童が68%から82%へ、それぞれ数値が高くなっている。小学校段階では勤労観の育成に重点をおくというキャリア教育の考え方に立つとき、「役割の把握」は、大切にしたいキャリア能力の一つである。このことから、指導に当たって、他者とのかわりの中で、自分の役割を果たし、それが認められ、役立っている実感を得られる場面を設定することが大切である。

中学校実践事例 1 「学年組織や教科組織，地域人材を活用したキャリア教育の実践」

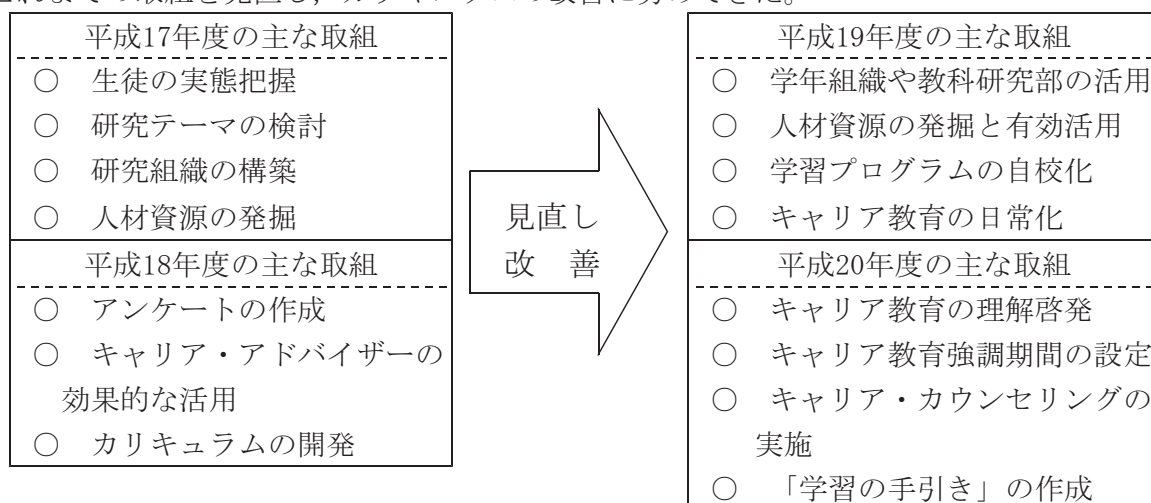
日立市立日高中学校 URL:<http://www.hitaka-kyoiku.ed.jp/>

1 学校の概要

日立市は茨城県の北部に位置し，日立製作所を中心に工業で栄えた町である。日高中学校は，市内の北部に位置しており，東に川尻漁港，西には小木津山自然公園を有し，海や山林，田畑などに囲まれた自然豊かな教育環境の中にある。生徒数は535人であり，横ばいから近年やや減少傾向にある。素直で明るい生徒が多く，部活動への取組が活発である。保護者は学校の教育活動にとっても協力的である。日立電線株式会社日高工場が近くにあり，キャリア教育に関する豊富な資源を提供してくれる。

2 キャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発の概要

本校は，平成17年度から2年間，日立市教育委員会の指定を受け，キャリア教育の研究に取り組んできた。そして，平成19年度からは，その継続として，茨城県教育研修センターの研究協力校として，キャリア教育のカリキュラムの開発に関する研究に取り組んだ。教育研修センターの研究協力校としては，下記のように，日立市教育委員会の指定によるこれまでの取組を見直し，カリキュラムの改善に努めてきた。



3 特に力を入れてきた取組

- (1) アンケートの実施とカリキュラムの改善
- (2) 学年組織を生かしたキャリア教育の推進
- (3) 教科組織を生かしたキャリア教育の日常化
- (4) キャリア・アドバイザーの活用

4 実践内容

- (1) アンケートの実施とカリキュラムの改善

キャリア教育に関する実践がある程度進んできた段階で必要なことは，実践を評価して改善することである。本校では，アンケートを活用して評価，改善を行った。

① キャリア教育に関するアンケートの実施

キャリア教育で育てたい四つの能力領域に視点を当てたアンケート項目を設定し、年2回のアンケート調査を実施した。その結果を基に、生徒の実態を把握するとともに、カリキュラムを評価し、改善を行った。

ア アンケート項目の作成

キャリア教育で育てたい諸能力の変容を見るために、28項目の評価項目を設定した。

○人間関係形成能力に関する内容：8項目 ○情報活用能力に関する内容：8項目

○将来設計能力に関する内容：6項目 ○意思決定能力に関する内容：6項目

イ アンケートの実施と結果の分析

平成19年9月に第1回のアンケートを実施し、生徒の実態を把握した。その後改善に向けた実践を行い、平成20年7月に第2回のアンケートを実施した。

第1回のアンケート結果から、四つの能力領域の中の「人間関係形成能力」と「情報活用能力」に課題があることが分かった。

第2回のアンケート結果では、すべての項目で第1回の調査結果を上回る成果が得られた。学年が上がるほど評価がよい項目が多く、指導の結果が順当に反映されていると考える。特に、「人間関係形成能力」の中の「新しい環境（進級・進学など）や新たな人間関係に適応することができる」の項目と、「情報活用能力」の中の「社会情勢の変化に合わせて、職業や仕事の種類・内容が変化していくことをおおよそ理解している」の項目で、顕著な伸びを示した。

② アンケートを活用したカリキュラムの改善

ア 総合的な学習の時間や各教科の指導の改善

学年組織を中心に、総合的な学習の時間等のカリキュラムの改善を検討し、学年の特色を生かしたカリキュラムを中心に内容の見直しを図った。また、教科の実践については、日常的にキャリア教育を意識した実践ができるように、教科組織を中心に実践内容の検討を行った。

イ キャリア・カウンセリングの実践

アンケート結果を基に、生徒の悩み等に対応するためにキャリア・カウンセリングの実践を計画した。

○ アンケート結果の活用

アンケートの調査結果をクラス単位でまとめ、一覧表で各担任に配付した。項目によって、気になる回答をしている生徒が分かるようになっており、それをもとに個別指導に役立てることができる。

例えば、悩みを相談できずに悩んでいる生徒や自分に厳しくほとんどの項目に評価1や2をつける生徒が見えてくる。学級担任は、これらの生徒の意識を大切にしながら、良さを認め、励ましながら改善できるように支援した。

○ キャリア・カウンセリングに関する校内研修

・講師：臨床心理士、学校心理士 鈴木 宏子先生

キャリア・カウンセリングの研修を通して、職員一人一人のカウンセリングの能力向上を図った。やる気や生きがい、自信を育むカウンセリングができるようになることを目指した。

(2) 学年組織を生かしたキャリア教育の推進

中学校は、部活動や授業の準備等に時間がとられ、職員が集まって研修する時間がとれない現状がある。共通理解、共通実践を目指しても、学校全体で足並みをそろえることが難しい。そこで、中学校は学年組織などの小さな組織を活用することが効果的であると考えた。キャリア教育の実践も、学年組織を中心に共通理解を図ることで、確かな実践につなげるようにした。

① 学習指導案の共同作成

学年スタッフが共同で道徳や学級活動、総合的な学習の時間の指導案を作成し、実践するとともに、評価・改善を行った。

ア 共通理解

共同で指導案を作成する過程で、共通の課題を明らかにするとともにキャリア教育に関しての共通理解を図った。

イ 教材等の活用

学年スタッフで協議を重ね情報を共有することで、資料やキャリア・アドバイザー、施設などを無駄なく有効に活用するようにした。

ウ 授業の相互参観

学年内で授業を相互に参観し、評価することで、カリキュラムの改善を図る。

エ 環境整備

学年の中の資料活用研究部を中心に、キャリアコーナーの設置を工夫し、キャリア教育で育てたい諸能力に関する情報を提供し、生徒の興味・関心を高めた。

② キャリア教育の強調期間の継続

キャリア教育の強調期間として、学年ごとに重点的に取り組む体験的な活動を計画し、実施した。

第1学年：心ゆたかな体験学習（三本柳さんさ踊り）

- ・キャリア教育のねらい…「人間関係形成能力」の育成
- ・日時…平成20年6月19日～20日（1泊2日）
- ・主な内容…「三本柳さんさ」踊り、飯ごう炊飯、コース別体験

第2学年：職場体験学習（42の事業所で実施）

- ・キャリア教育のねらい…「人間関係形成能力」と「情報活用能力」の育成
- ・日時…平成20年6月19日～20日（2日間）
- ・主な内容…各事業所での職場体験

第3学年：修学旅行と高校体験学習

○修学旅行

- ・キャリア教育のねらい…「人間関係形成能力」と「情報活用能力」の育成
- ・日時…平成20年5月28日～30日（2泊3日）
- ・主な内容…班別・クラス別学習（職業体験、文化や歴史調べなど）

○高校体験学習

- ・キャリア教育のねらい…「将来設計能力」と「意思決定能力」の育成
- ・日時…夏季休業中
- ・主な内容…施設見学、部活動見学・体験

(3) 教科組織を生かしたキャリア教育の日常化

道徳教育と同様にキャリア教育においても、学校の教育活動全体を通して育てたい諸能力の育成に取り組む必要がある。そこで、学年のイベント的な行事だけでなく、教科の指導を中心にキャリア教育の日常化を図り、キャリア教育を無理なく継続できるようにした。ここでは、小さな組織として教科組織を生かすこととした。

① 教科の特性を生かしたキャリア教育

下のように、キャリア教育で育てたい諸能力と各教科の特性を関連させることにより、指導場面で諸能力を意識した実践ができるようにした。

キャリア諸能力	活動場面・活動内容・教材	関連する教科
人間関係形成能力	様々な指導者との出会い グループ活動やコミュニケーション 様々な生徒との出会い	国語・英語・数学 理科・社会・音楽 美術・技家・保体
情報活用能力	資料活用，辞書事典活用，パソコン テレビ，ビデオ，DVD，ラジオ 新聞，図書館，専門家，地域住民	国語・英語・数学 理科・社会・技家
将来設計能力	見通しをもつ・構想を練る・備える 多くの事例を参考にする 因果関係を大事にする	数学・理科・美術 技家・保体
意思決定能力	選択する・判断する・実行する 経験を生かす，失敗に学ぶ 自分の夢をもつ，信念をもつ	美術・技家・保体 国語・英語・数学 理科

② 学習指導案にキャリア教育との関連を明記

本時の指導とキャリア教育との関連を明確にするために、学習指導案に「キャリア教育との関連」の項目を設け、その中にキャリア教育で育てたい諸能力との関連を明記するようにした。また、本時の展開の中にも、キャリア教育との関連、特に育てたい諸能力について触れ、常に諸能力を意識した授業が展開できるようにした。

③ 「学習の手引き」の作成

ア 「学習の手引き」作成のねらい

キャリア教育による自己理解や状況理解が進むにつれ、生徒は進むべき進路を実現するために自己の努力事項に気付くようになる。例えば、学力をつけようと決意したが、どうすればよいか分からずに夢をあきらめてしまう生徒が少なからず存在する。すぐにその悩みを担任に相談できればよいが、できない生徒が意外に多い。そこで、自分の夢に向かって努力するために必要な情報が得られるように、「学習の手引き」を作成した。

イ 職員の共通理解

「学習の手引き」を既に作成している学校は多いと考えるが、本校はキャリア教育の視点を生かした「学習の手引き」を作成した。「学習の手引き」を作成するに当たり、職員間で下記のような共通理解を図った。

- キャリア教育で育てたい四つの能力の明記（どのようなことをすれば伸ばせるのかに触れる）

- どんな職業があり，どのような人が向いているのかを知る資料の提供
- 家庭でのお手伝いのすすめを強調し，行動や実践から学ぶ体験の充実
- 各教科の学習とキャリア教育との関係についての理解の深化
- キャリア教育で育てたい諸能力を伸ばす手立ての紹介
- 進むべき進路を考える上で，必要な知識や情報の提供
- 自分の目標を実現するために必要な能力や技能の示唆
- 家族の理解と協力を得ることや地域の教育関係施設との連携協力

ウ 「学習の手引き」の主な内容

生徒にとって使いやすく，有益な情報が盛り込まれた手引きとなるように，形式の工夫と内容の精選を図った。

形式はファイル形式とし，常に新しい資料を付け加えられるようにした。3年間で1冊にまとめたものではなく，共通する内容と学年の実態に応じた内容が組み合わせられるようにすることで，自分のための「学習の手引き」ができる。

内容は，生徒にキャリア教育に関する情報として提供したいものを中心に掲載した。具体的には，「学習する目的」，「キャリア教育で育てたい力」，「教科別の学習法アドバイス」，「家庭学習の仕方」，「主な上級学校」，「職業紹介」などの情報を盛り込んだ。

(4) キャリア・アドバイザーの活用

① キャリア・アドバイザーとしての人材発掘

ア 生徒の情報網を活用

生徒にアンケート調査を行い，一芸に秀でた人，苦難を乗り越えた人などの，家族や近所の人材資源を発掘した。

また，どんな人からどのような話を聞いてみたいか，どんな人の指導の下にどのような体験をしてみたいかなどの希望を調査した。

イ 本校職員の活用

身近な人材資源を発掘するために，本校職員から人材資源の情報を収集した。また，機会があれば，本校職員をキャリア・アドバイザーとして活用できるようにした。職員の専門教科はもちろんのこと，趣味や特技，貴重な体験談などの活用を試みている。

ウ 保護者の活用

P T Aの教養委員会を中心に，人材資源の提供に協力してもらった。保護者からも自薦他薦を問わず，キャリア・アドバイザーとして活用できるようにした。

② 日立市の人材バンク「いきいき百年塾」の活用

日立市には「いきいき百年塾」という人材資源バンクがある。名簿に様々な分野の人材資源が登録されている。この人材資源を活用するとともに，活用した情報を整理し，本校で活用できる人材の名簿を作成した。

③ 写真や動画，書籍，作品等の活用

身近な人材をキャリア・アドバイザーとすることが理想であるが，本校ではキャリア・アドバイザーの定義を広げ，ビデオ映像や声のメッセージ，手紙，作品や著書などもキャリア・アドバイザーとして活用するようにした。

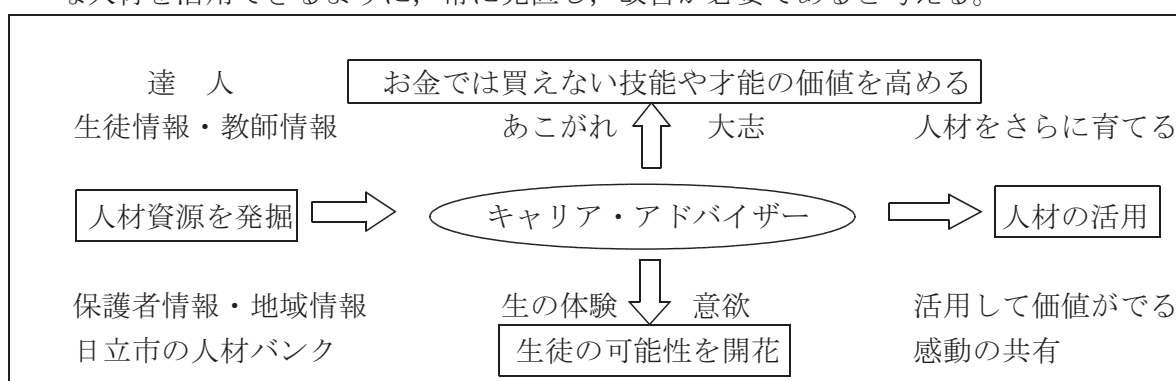
④ キャリア・アドバイザーの活用場面

キャリア・アドバイザーの活用例として、「達人に学ぶ」という学習において本物の人材資源との出会いを設定した。専門性を生かして達人として活躍している人との触れ合いを通して、自分の生き方について考えることができると考えた。

- ・柔道家「山口 香さん」(平成18年度, 全校集会で講演)
- ・野鳥の達人「安西 英明さん」(平成19年度, 第1学年の総合的な学習の時間で講義)
- ・地震先生「ドクターナダレンジャー」(平成20年度, 第1学年の理科学習で講義)

⑤ キャリア・アドバイザーの効果

キャリア・アドバイザーは、専門的に優れた知識、技能や豊富な人生経験をもっている。これらの人材を活用することで、下記に示すような効果を期待できる。特に、本物の体験ができるという効果が大きい。今後も、人材ありきではなく、必要な場面で適切な人材を活用できるように、常に見直し、改善が必要であると考えます。



5 研究のまとめと本校からの提言

- (1) 生徒へのアンケート調査などを行い、常に実態を把握するとともに、よりよい実践に向けた改善を行うことにより、校内のキャリア教育を活性化することができる。また、アンケートの結果をキャリア・カウンセリングに活用することにより、個に応じた適切な対応ができるようになる。
- (2) 学年組織や教科組織を生かすことによって、中学校でのキャリア教育を推進しやすくなる。朝から放課後の部活動の指導まで、中学校は毎日が忙しい。しかし忙しい時でも、学年組織や教科組織のような小さな組織であれば、まめに協議を行うことができる。学年や教科部員の中にキャリア教育を推進するリーダーがいれば、キャリア教育に関する実践を行うことができる。
- (3) キャリア教育の視点を盛り込んだ学習の手引きは、生徒が自分のペースで自分に合った学習をしたり、自分の進路について考えたりする資料として役立つ。手引きを活用することで、主体的な活動が多くなる。ファイル形式の手引きとすることで、常に新しい情報を追加したり、差し替えたい情報を簡単に交換したりできる。
- (4) 望ましい勤労観や職業観を養うキャリア教育を推進するために、キャリア・アドバイザーの活用は有効である。キャリア・アドバイザーの活用を推進することによって、生徒の意識の中にお金では買えない技能や才能の価値を植え付けることができる。さらに、生徒は自分の技能や才能を伸ばすことへの夢やあこがれをふくらませ、部活動などに真剣に取り組む姿勢が見られるようになってくる。

中学校実践事例2 「教師の協働性を生かしたキャリア教育のカリキュラム開発と実践」

阿見町立阿見中学校 URL http://www.town.ami.ibaraki.jp/school/junior/ami_ih/

1 学校の概要

本校は、霞ヶ浦湖畔の阿見町の中央に位置し、通常の学級12、特別支援学級2の計14学級の中規模校である。周辺には、茨城大学農学部や県立医療大学があり、町内の文教地区として、保護者の教育に関する関心も高まりつつある地域である。生徒たちは、明朗で素直な面があり、落ち着いて学校生活を送っている。生徒会活動も活発であり、地域に広げるボランティア活動等も数年前から積極的に展開している。

2 キャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発の概要

2年間の推進の手順（研究プロセス）を明確にして、推進の方向性を示し、「協働性」をキーワードに全職員の共通理解のもとで進めていくこととした（図1）。また、図2のように校内指導体制を組織したが、特に、指導計画作成時は学年会がその中心的な役割を果たした。

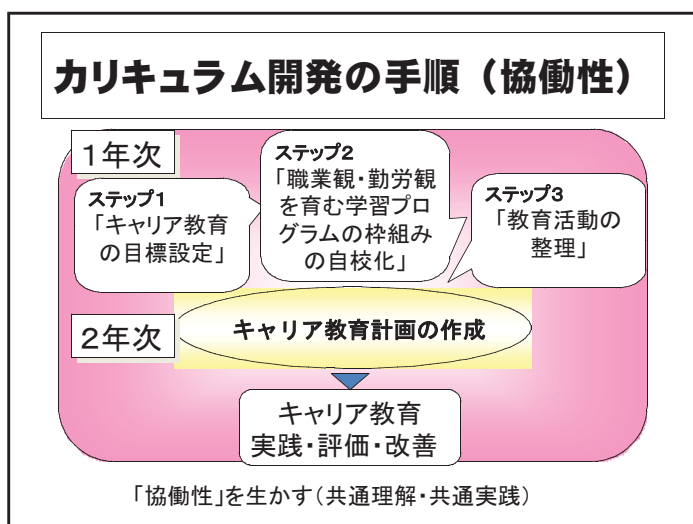


図1 キャリア教育カリキュラム開発の手順

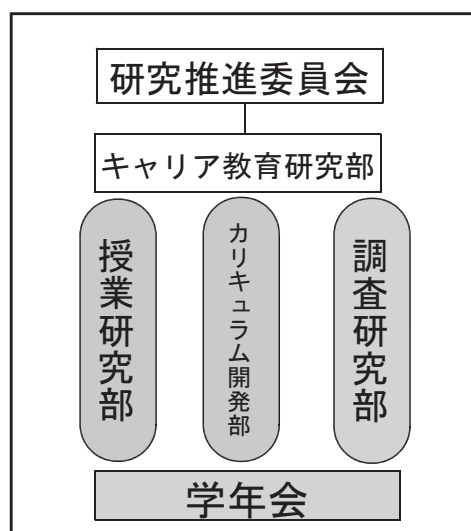


図2 校内指導体制

3 特に力を入れてきた取組

- (1) 「協働性」をもたせるワークショップ型校内研修の実施
- (2) 生徒の実態を踏まえた「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」の自校化（以下「学習プログラムの枠組み」と表す）
- (3) 職場体験学習の事前・事後活動の工夫

4 実践内容

- (1) 「協働性」をもたせるワークショップ型校内研修の実施

本校では、平成18年度より5日間の職場体験学習を実施してきたが、職員間では、「キャリア教育」＝「職場体験学習」といった認識があった。また、職場体験学習においても、当該学年の職員のみがかかわる状況にあった。そこで、職員のキャリア教育に対する意識の改善と共通理解を図る場として、校内研修を中心に位置付け、全職員が主体的に研修に取り組めるようにワークショップ型の校内研修を実施した。

- ① ゼロからのスタート～「何をすれば・・・」ではなく、「なぜ、必要か」から～

キャリア教育に対する理解が不十分な実態があったので、まず、以下のように理論研修からスタートした。

第1回	これまでのキャリア教育の振り返り
第2回	キャリア教育の理念と意義 キャリア教育で育成すべき4能力領域・8能力
第3回	「学習プログラムの枠組み」で日々の教育活動を見直す

研修の中で、「従来の進路指導との違い」や「キャリア教育を通してどんな生徒を育てるのか」について話し合っ確認した。また、授業の中で、キャリア教育の「視点」や「機能」を職員が意識して実践していくことが重要であることを共通理解できた。

- ② 学校としてのキャリア教育の目標設定～本校のキャリア教育のキャッチフレーズ設定～
次の研修では、「生活アンケート」の調査結果をもとに、1回目の演習で「本校生徒の生活面・学習面の強みと弱み」の共通理解を図った。ここでは、下記に示すように概念化シートと付箋紙を用いて生徒の実態や状況の把握を行った(図3)。その結果を基に、2回目の演習において、キャッチフレーズと目指す生徒像を設定した(図4)。

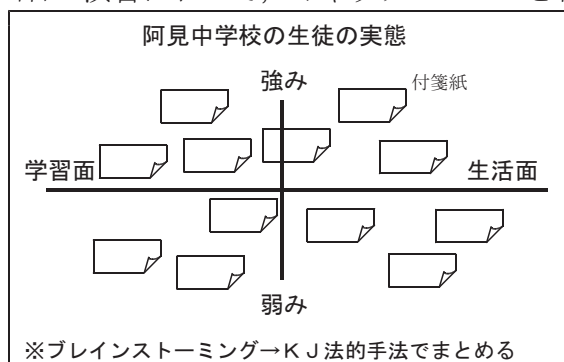


図3 概念化シート

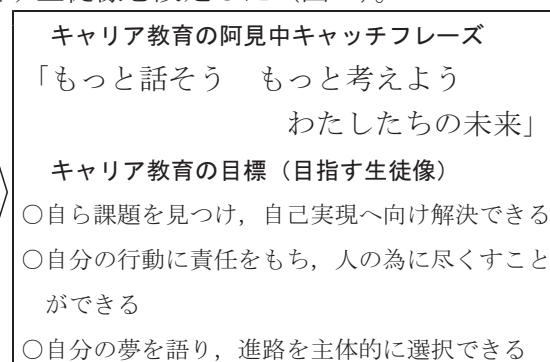


図4 目指す生徒像

キャッチフレーズづくりでは、各グループで作成した概念化シートをもとに、「キャリア教育を通して阿見中生をこんな生徒に育てたい」という視点で話し合った。その結果、四つの案が出され、その中から全職員で投票を行い、「もっと話そう もっと考えよう わたしたちの未来」に決定した。第1学年では、人間関係形成能力を高める時期として「もっと話そう」、第2学年では、職業理解能力を高め、将来設計能力にまで力点を置いた「もっと考えよう」、そして、集大成として意思決定能力を高める第3学年では、「わたしたちの未来」とし、各学年間の系統性を意識して設定した。

- ③ 職員の意識の変化

本校ではキャリア教育に対する「協働」の意識をもたせるために、ワークショップ型校内研修を実施してきた。校内研修実施に当たり、目標設定や指導計画作成時は、多様なアイデアが出るように意図的に異学年職員でグループを組み、また、授業研究の際には参観のポイントを示し、付箋紙に意見を書き込んだ上で、研究協議会に参加するなど、積極的な研修へのかかわりを意識化した。このワークショップ型の研修スタイルは、職員一人一人の意見が十分に生かされることや、学年間の指導の系統性が見えるという点で非常に効果的であった。そして、何より共通理解が図られ、「自分たちで学校を変える」といった「協働」の意識を高めることに一番有効であったと考える。全職員でキャリア教育を行うといった意識の変化こそが、キャリア教育の大きな推進力になると考える。

(2) 生徒の実態を踏まえた「学習プログラムの枠組み（例）」の自校化

① 4能力領域・8能力の「キャリア諸能力」についての生徒の実態把握

進路発達にかかわるアンケート（日高中学校サンプル）を実施し、調査研究部が分析を行った結果、次のような特徴が見られた。（平成19年10月実施）

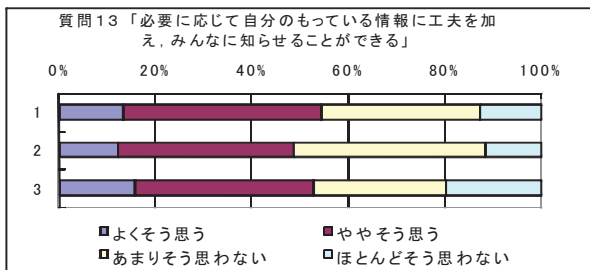


図5 生徒調査（情報活用能力）

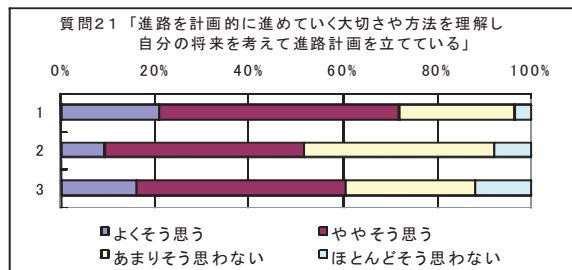


図6 生徒調査（将来設計能力）

考察 ・情報収集・探索能力の育成の部分で課題が見られた。本校において授業改善の必要性を感じる。
 ・計画実行能力の達成度が不十分である。・人間関係形成能力領域では、ある程度達成できている。

② 学年間の系統性を考慮した阿見中学校版「学習プログラムの枠組み」の作成

国立教育政策研究所から出されている「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」を参考に、「自分の担当学年の生徒に育みたい能力・態度」を生徒の実態を考慮しながら学年ごとに協議し、「学習プログラムの枠組み（例）」の自校化を図った。

○阿見町立阿見中学校版「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み」

職業的（進路）発達段階		現実的探索と暫定的選択の時期		
○職業的（進路）発達課題		<ul style="list-style-type: none"> 肯定的自己理解と自己有用感の獲得 興味・関心等に基づく職業観・勤労観の形成 進路計画の立案と暫定的選択 生き方や進路に関する現実的探索 		
職業的（進路）発達にかかわる諸能力		職業的（進路）発達を促すために育成することが期待される具体的な能力・態度		
領域	能力	1年生	2年生	3年生
人間関係形成能力	【自他の理解能力】	相手の気持ちを考えながら、発言したり、行動することができる。	自分のよさや個性がわかる。 友達のことを理解し、それに合わせた言動ができる。	自他の違いを受け入れ、お互いのよさを磨きあいながら、よりよく成長しようとする。
	【コミュニケーション能力】	自分から進んで話しかけることができる。 人前で自分の考えをはっきり述べるができる。	自ら進んで友達とコミュニケーションを図ることができる。	所属する集団の中で、受容的な立場で他者を受け入れ、幅広い人間関係を築くことができる。
情報活用能力	【情報収集能力・探索能力】	進路に関する情報を自分で収集しようとする。	上級学校・学科の種類や特徴を調べ手立てがわかる。	積極的に進路や職業に関する正しい情報を収集し、理解する。 集めた情報を基に自らの考えを深め、他者に伝えることができる。
	【職業理解能力】	なぜ、働くのかを考えることができる。 職業と学業生活とのつながり考えることができる。	職業体験を通して学んだ勤労の意義、働く人の思いを生かして生活することができる。	職場体験やボランティア活動の意義を理解し、学校全体において、自分がやるべきことを考え、実践することができる。
将来設計能力	【役割把握・認識能力】	自己の役割を理解し、係、委員会活動に主体的に取り組むことができる。 約束や期限を守ることができる。	学校生活において、1年生の手本となり、3年生のサポートができる。 職業体験や発表を通して、多様な職業があることを知り、将来の職業選択に興味を持つことができる。	自分の役割を自覚して、将来の生き方を考えることができる。
	【計画実行能力】	自分の将来について考え、目標を持って授業や自主学習に取り組むことができる。 職業調べを行い、職業への理解を深め、夢を持つことができる。	興味を持った職業にたどりつくまでの過程を知り、そのために、今何をすべきか目標を明確に持つことができる。	将来を見据えた進路計画を立て、実行することができる。
意思決定能力	【選択能力】	自分の興味・関心・特技・適性を理解することができる。 卒業後の進路のイメージを描くことができる。	自分の適性・能力に基づいて、高校・進路について調べることができる。	多様な選択肢の中から、自他ともによりよい選択を考え、決定することができる。
	【課題解決能力】	若手克服のために、主体的に家庭学習に取り組むことができる。 進路に向かって、学習方法を考え、実行することができる。	学習や生活を振り返り、課題意識を持って改善しようと努力することができる。	自らの課題を見つけ、解決に取り組むことができる。

図7 阿見中学校版「学習プログラムの枠組み」

「学習プログラムの枠組み」の作成を通して、本校生徒の実態を考慮した「育みたい能力・態度」を学年全体で考えることができた。さらに、全体計画、年間指導計画の作成、各教科等でのキャリア教育の視点に立った教育活動の見直し、洗い出しを行う必要性を確認できた。「学習プログラムの枠組み（例）」の自校化のポイントとしては、以下の3点が挙げられる。

- 生徒の実態や学校教育目標を踏まえて作成すること
- 学年の発達段階に応じ、系統性をもたせて、具体的な能力・態度を設定すること
- 協働性をもたせるために、必ず、学年職員共同で作業を行うこと

③ 全体計画、年間指導計画の作成

学習プログラムを基に、各教科等でキャリア教育の視点に立った見直しを行い、各種指導計画を作成した。その後、各種指導計画を基に、学年ごとにキャリア教育の視点を取り入れた「生き生き活動プラン」を作成した。この「生き生き活動プラン」は、平成18年度に教科等の年間計画を関連付けて作成したものであり、新たに各学年の中核となる体験活動を中心に、キャリア教育の視点から再構成した。既存のものに改善・修正を加えて作成することも効果的であるとする。

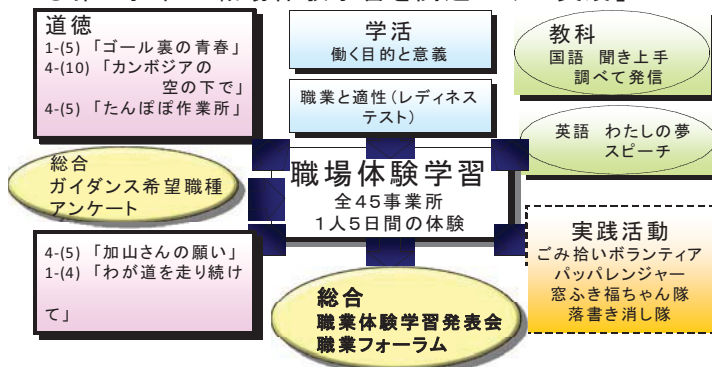
(3) 職場体験学習の事前・事後活動の工夫

年間指導計画「生き生き活動プラン」は、各学年のキャリア教育の見通しや学年間の系統性をもたせるには便利であったが、実際は、「いつ、どの教科等を関連させ、どんな能力・態度を育てるのか」が分かる具体的な実施プログラムの開発が必要になった。そこで、カリキュラム開発部が中心となり、体験活動を中核とした「生き生きタイム実施プログラム」を学年ごとに作成した。

① 職場体験学習を核とした生き生きタイム実施プログラムの開発

実践内容(3)－①
生き生きタイム実施プログラム

○第2学年「職場体験学習を関連づけた実践」



特に、第2学年における「職場体験学習」は、本校のキャリア教育の柱であり、各教科領域との関連を図り、より効果的に学習が展開できるよう、実際の職場体験学習はもとより、事前・事後指導の工夫・改善を図った(図8)。

職場体験学習が体験するだけの学習にならないように、事前指導では、自分の適性を知り、働く意義を理解し、勤労意欲を高めて体験させていくこと、事後

図8 生き生きタイム実施プログラムの関連図

指導では、体験したことを分かりやすく伝えること、そして改めて働くことについて考えることをねらいとして実践に取り組んだ。「生き生きタイム実施プログラム」には、授業時のキャリア教育の視点(能力・態度)を設定したので、教師がキャリア教育の視点を意識しながら授業に臨めるようになった点で、非常に効果的であった。また、生徒も職場体験学習により主体的に取り組むことができるようになり、体験学習後、職業理解や自己理解が深まっ

たことから、学校独自の実施プログラムの開発は必要不可欠である（図9）。

② 事前指導の充実

「職場体験学習の事前指導の授業の在り方」をテーマに授業実践・研究協議を行った。6月に、第2学年の学級活動において、進路適性の吟味と進路情報の活用を通して将来の職業生活を考える授業を実施した。自分の適性に合う職種を知り、適切な進路選択へ向けてしっかりと自分の価値基準をもつことができることを授業のねらいとした。

授業では、職業レディネステストのプロフィールを自分で作成し分析を行ったことにより、より主体的に話合いに臨むことができた。RIASECの六つの領域において、適性結果と自分の夢や希望が合致していたかどうか、三色カードを用いて確認した。約3割の生徒が合致せず、そのギャップに驚いていた。その後、領域ごとに集まり、職業調べの情報を交換し合った。また、パネラーとして代表者を選出し、ほかの適性グループとの協議の時間を設けた。「なぜ、その職業に就きたいのか」「どうすればその職業人を目指せるのか」など具体的な質問が出ていた。最後のシェアリングでは、「自分の進路に自信がもてた」、「自分の適性とは遠い職種を職業体験してみた」などの発表があり、授業を通して自分の適性と職業についてより深く考えることができたと思われる。この授業を通して、多くの生徒が、夏休みに行われる職場体験学習に主体的に取り組んでいこうとする意欲が高まった。

③ 職場体験学習の実施（45事業所：第2学年生徒160名）

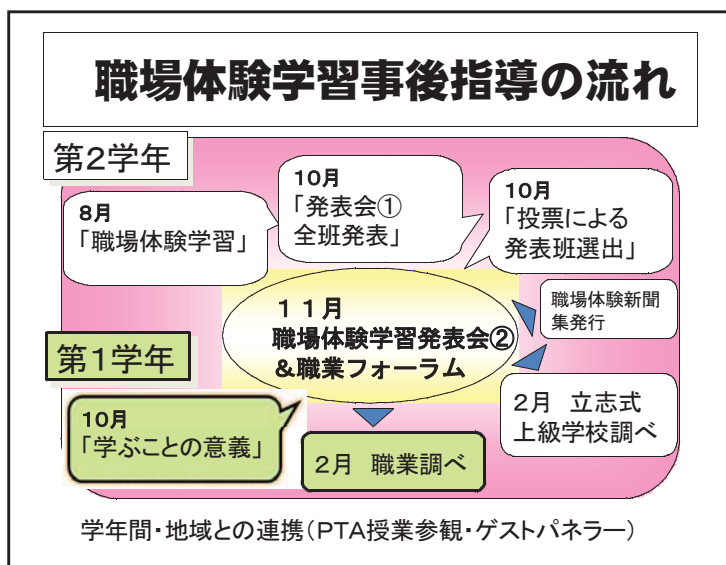
今年度も5日間を原則に45事業所の協力を得て実施することができた。公的機関を中心に5日間の完全実施ができなかったところもあるが、複数の事業所と合わせて、約8割の生徒が5日間の職場体験学習に取り組むことができ、体験終了の報告時には、どの生徒の顔も充実感でいっぱいであった。授業で行った職業レディネステストの、自分の興味・適性とは反対の職種にチャレンジした生徒からも、「思ったより仕事が楽しかった。この職種を真剣に考えたい。」等の感想が聞かれた。

④ 事後指導の工夫と改善～職場体験学習発表会&職業フォーラムの開催～

今年度は、職場体験学習のまとめとして、従来行ってきた発表会の他に、職業人をゲストパネラーとして招き職業フォーラムを開催した（図10）。2年生の他に1年生も参加し、多数の保護者参観のもと開催した。テーマは「働くことについて考えよう」で、活発な話

第2学年 生き生きタイム「職場体験学習」実施プログラム			
1 キャリア発達目標			
<ul style="list-style-type: none"> ・職業体験での人とのふれあいを通して、社会人としての基本的マナーや言葉遣いなど、社会的スキルを身につける。【人間関係形成能力】 ・職業体験を通して学んだ勤労の意義・働く人の思いを理解し、生活することができる。【情報活用能力】 ・興味をもった職業にたどりつくまでの過程を知り、そのために、今何をすべきか目標を明確に持つことができる。【将来設計能力】 			
2 指導の留意点			
<ul style="list-style-type: none"> ・レディネステストを活用し、自分の適性を知った上で職業調べを行い、職業体験先を選択させる。その際、自分の適性や興味と異なる職種を選択することも「働く」ということを学ぶためには大切であることを伝える。 ・職業体験発表会では、1年生も参加させることにより、来年度の職業体験学習に生かしていく。また、職業フォーラムを行うことにより、体験学習での学びを更に深められるようにしたい。 ・立志式では、職業体験で学んだことを生かし、働くことの大切さや社会の一員として果たすべき責任というものを意識させた上で、将来の目標をしっかりとめさせたい。 			
3 活動計画			
月日	領域・教科 [] (1) (2) (3) (4) (5) (6)	活動内容	キャリア教育からの視点 (能力・態度)
4/16	国語(1)	「空間や人数に合わせてよう」	○状況に合わせて、話し方を工夫することができる。 【コミュニケーション能力】
5/9	国語(1)	「聞き上手になるう」	○他者の考えを受け入れ、自分の考えを深めることができる。 【コミュニケーション能力】
6/4	総合(1)	ガイダンス 希望職種アンケート	○職業にたどりつくまでの過程を知り、そのために、今何をすべきか目標を明確に持つことができる。 【計画実行能力】
9/0	学活(1)	「働くことの意義を考えよう！」	○なぜ働くのかを考えることができる。 【職業理解能力】
6/9 5/11	学活(2)	適性検査レディネステスト 適性検査検討 「職業と適性について考えよう！」	○自分の職業適性や志向性を知り、自分の進路選択の価値基準を持つことができる。 【自他の理解能力】

図9 「職場体験学習」実施プログラム（抜粋）



合いをすることができた。2年生にとっては、職場体験を通して感じたこと、学んだことを改めてフォーラムの中で考え、深め合うことによって、自分なりの勤労観や職業観をもつことができた。1年生にとっても、次年度の職場体験学習に向けての心構えをもつことに有効であった。また、事前に全班発表を学年PTA時に開催し、全生徒が体験発表を行った。発表形態も様々であり、第2学年生徒のコミュニケーション能力の高まりもうかがえた。代表班選出を投票

図10 「職場体験学習」事後指導の流れ

による方式としたことで、まとめの活動も意欲的になり、どの班も協力して発表を行うことができた。参加した保護者から以下のような感想が寄せられた。

- 【子どもの変容】 ・将来についての話を以前よりするようになった。
・親の仕事について共感するようになった。・家事を手伝ってくれるようになった。
- 【意見・感想】 ・フォーラムは大変よかった。私たち大人も一緒に考える機会になりました。
・体験期間が短かすぎでは？フォーラムは職場体験の前でもよいのではないか。
- 【発表会について】 ・生き生きと発表していて頼もしかった。フォーラムの司会や構成がよかった。

5 研究のまとめと本校からの提言

- (1) キャリア教育のカリキュラム開発に当たっては、「協働性」をキーワードに、一人一人がキャリア教育の意義や視点を理解した上で、主体的に取り組むことが大切である。組織を立ち上げ、役割分担の中での取組も必要であるが、カリキュラム開発についての全職員による共通理解からスタートできると、効果的に従来の教育活動にキャリア教育の視点を取り入れ、工夫・改善を行うことができる。そのためにも、全員参加のワークショップ型の協議会や授業研究等、校内研修の充実が極めて重要であると考えている。
- (2) 「学習プログラムの枠組み(例)」の自校化は、キャリア教育を推進する上で、最初に取り組むべき最優先課題である。ここでの視点は、自校生徒の実態を把握した上で、「3年間の中でキャリア教育を通してどんな能力・態度を育てていくのか」ということであり、生徒の発達段階を考慮した系統的な能力設定を具体的にを行う必要がある。なお、「学習プログラムの枠組み」の作成にあたっては、全職員がかかわることにより、3年間を見通したキャリア教育の方向性を職員一人一人が意識することができるよさがあると思われる。
- (3) 本校でも、職場体験学習をキャリア教育の中核と位置付け、指導計画等を作成してきたが、より効果的にキャリア教育を推進していくためには、事前・事後指導の工夫・改善が求められる。事前においては自分を理解すること、事後においては、体験したことをさらに深めることが大切である。

高等学校実践事例 1 「人間力を育むキャリア教育カリキュラム開発」 茨城県立多賀高等学校 URL: <http://www.taga-h.ed.jp/>

1 学校の概要

本校は、昭和28年、茨城県北部の工業都市日立市に、地元の熱望によって設立された。平成12年度から4年間定員割れが続き、学級数も減った時期があった。このため、平成13年度から、人間力の向上、文武不岐をスクール・アイデンティティとし教育活動全般の見直しを行った。平成16年からは定員も充足し、現在は、1学年7クラスの共学校として、キャリア教育の推進に取り組んでいる。

2 キャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発の概要

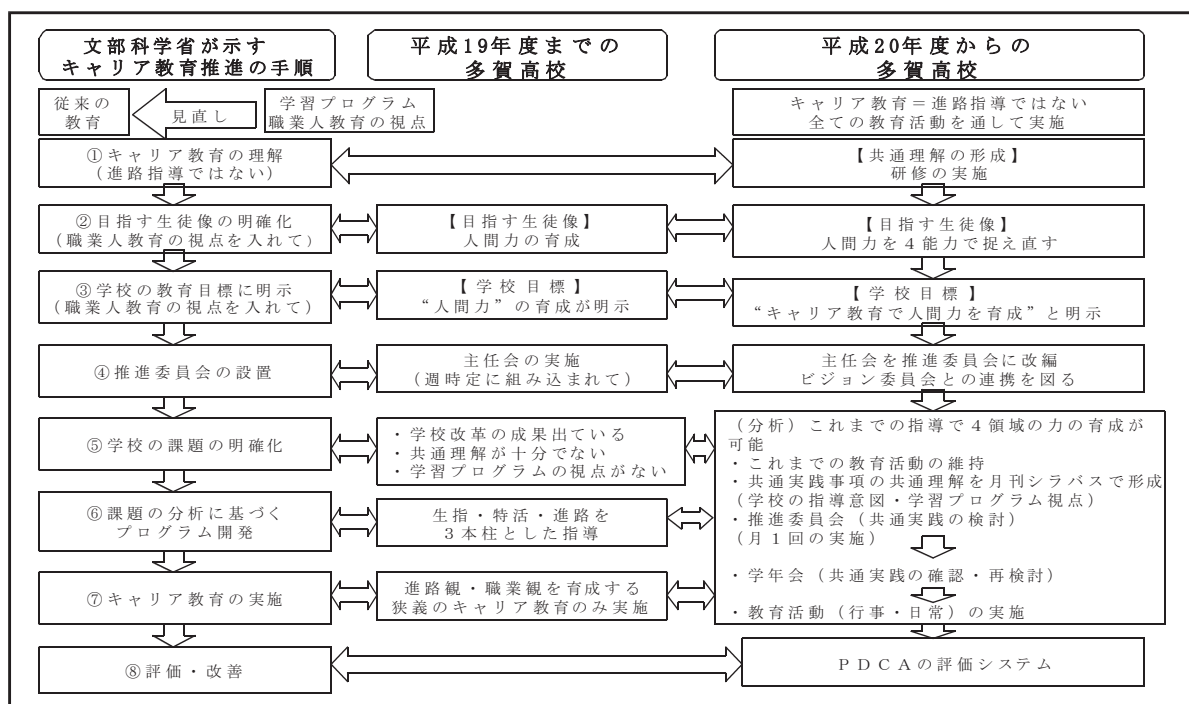


図1 多賀高校におけるキャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発の概要

3 特に力を入れてきた取組

- (1) 教育活動の「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」(以下、「学習プログラムの枠組み(例)」と表記)からの検証とキャリア教育の推進組織の整備
- (2) キャリア教育の共通理解の形成
- (3) キャリア教育見学会の実施
- (4) 生徒の「学習プログラムの枠組み(例)」における4領域の能力形成の把握

4 実践内容

- (1) 教育活動の「学習プログラムの枠組み(例)」からの検証とキャリア教育の推進組織の整備

① 教育活動の「学習プログラムの枠組み(例)」からの検証

ア 卒業生アンケートにみる進路指導、生徒指導、特別活動の必要性

本校では、平成13年度から教育活動全般の見直しを行い、平成17年度からは、校長裁量による特色ある学校づくり支援事業で「人間力形成向上プロジェクト」を開始し、教育活動全般を通して生徒の個々の人間力の向上を目指している。

表1 「自分の進路結果に満足している」と答えた生徒が評価を高くした評価項目ベスト10

順位	評価項目	平均
1	進路実現のために一生懸命努力した。	4.7
1	自分に最適な進路を実現したいと思っていた。	4.7
1	高校生らしい頭髪で生活できた。	4.7
2	部活動では人間的に成長できた。	4.6
2	先生方の進路指導に満足している。	4.6
2	高校生らしい服装で生活できた。	4.6
2	気持ちのよい挨拶ができた。	4.6
2	集会にはきちんとした態度で臨んだ。	4.6
2	部活動ではルールやマナーを身に付けられた。	4.6
2	勉強・部活動・学校行事など物事をやり遂げた経験が多い。	4.6

検証のために、平成18年度から卒業生に「振り返りアンケート」を実施している。この中で、「自分の進路結果に満足している」を評価5（最高値）にした生徒が、他の評価項目で評価を高くしたベスト10は表1のとおりである。本校では、生徒指導、進路指導、特別活動を3本柱として人間力の向上を目標に教育活動を展開しているが、このことから、進路指導上の満足度を高めるためには、生徒指導、

特別活動の充実が欠かせないことが分かった。

イ 本校の3本柱（生徒指導、進路指導、特別活動）の検証

キャリア教育の導入に当たり、「学習プログラムの枠組み(例)」を項目化し、本校の教育活動の3本柱（生徒指導、進路指導、特別活動）を各項目の指導機会ととらえ、これまでの教育活動の中で、どれくらいの項目が該当するのか数値化し検証した。

結果は表2のとおりである。各指導間で重複はあるが、全103項目中96項目（93%）

表2 「学習プログラムの枠組み(例)」での3本柱の検証

	生指	進路	特活	該当数
人間関係形成能力（全30項目）	7	6	29	30
情報活用能力（全25項目）	1	18	3	21
将来設計能力（全24項目）	3	16	8	23
意思決定能力（全24項目）	4	18	14	22

が本校の教育活動で該当しており、平成19年度までの教育活動で「学習プログラムの枠組み(例)」の4領域の能力を育成する機会が豊富であることが分かった。これは、本校がすでに人間力を育成するために教育活動全般の見直しを行っていたため、職業観・勤労観を育む4領域の能力を育成するキャリア教育と同質の視点をもっていたためであろう。

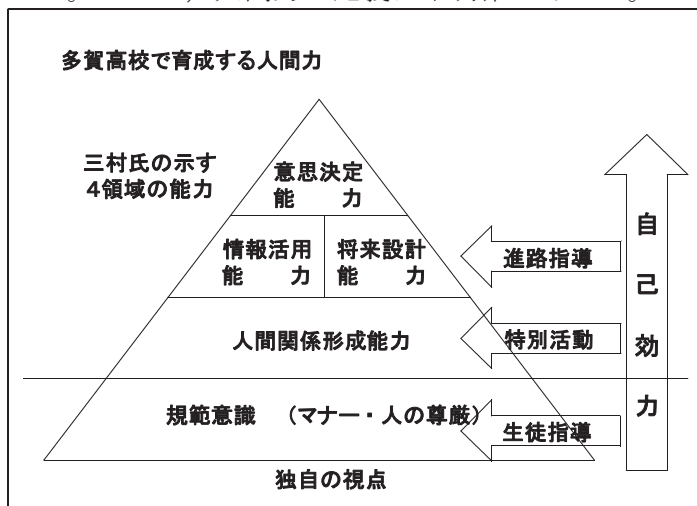
また、この検証により、本校では、人間関係形成能力は、主に特別活動で養い、将来設計能力や情報活用能力は、主に進路指導で育み、意思決定能力は主に特別活動、進路指導で育てていることも分かった。「振り返りアンケート」の結果もあり、本校ではこれまでも3本柱を教育活動の中核と位置付け重視してきたが、4領域の能力を育成するために、3本柱の重要性を改めて意義付けすることとなった。

さらに、検証では、部活動が43の項目に該当し、本校の中で最大の該当数であった。本校でのキャリア教育の推進における部活動、そして水戸藩の藩校、弘道館の理念からいただいた本校の校是「文武不岐」に新たな視点から意義付けを行うことができた。

以上のことから、キャリア教育の推進にあたっては、新たな行事等の実施は行わず、平成19年までの教育活動の展開を維持することとした。

ウ 「学習プログラムの枠組み(例)」の視点からの人間力像の構築と共有

平成19年度までの教育活動の中でも、本校では人間力の向上が理念として共有されていた。しかし、人間力の定義は不明確であった。キャリア教育の推進に当たり、人間力を4領域の能力としてとらえ直し、明確なイメージを共有するために、早稲田大学大学院教授の三村隆男氏が示す4領域の能力の構成図に本校独自の視点を加え、図2のとおり本校の3本柱でいかに人間力を育成するかを共有することとした。本校の基本は生徒指導であり、その上に特別活動と進路指導が展開され、教育活動全般を通して意思決定能力が形成されていくことを図式化したものである。



を4領域の能力としてとらえ直し、明確なイメージを共有するために、早稲田大学大学院教授の三村隆男氏が示す4領域の能力の構成図に本校独自の視点を加え、図2のとおり本校の3本柱でいかに人間力を育成するかを共有することとした。本校の基本は生徒指導であり、その上に特別活動と進路指導が展開され、教育活動全般を通して意思決定能力が形成されていくことを図式化したものである。

図2 多賀高校で共有する人間力像

自己効力は、「振り返りアンケート」の結果等により、自己効力感の高い生徒が何事にも一生懸命に取り組むことから独自に付け加えたものである。

② キャリア教育の推進組織の整備

本校では、学年、分掌間の密な連携を図るため、主任会（各学年主任、教務主任、進路指導部長、特別活動部長、生徒指導部長）を設け、週時定に組み込んで実施してきた。構成員は、文部科学省が「キャリア教育推進の手引」で示す構成員の条件をほぼ網羅している。このため、主任会に、学校の教育活動全般の改善を推し進めるビジョン委員会の委員長を加え、キャリア教育推進委員会に改編した。キャリア教育推進委員会とビジョン委員会との共同体制については図3のとおりである。

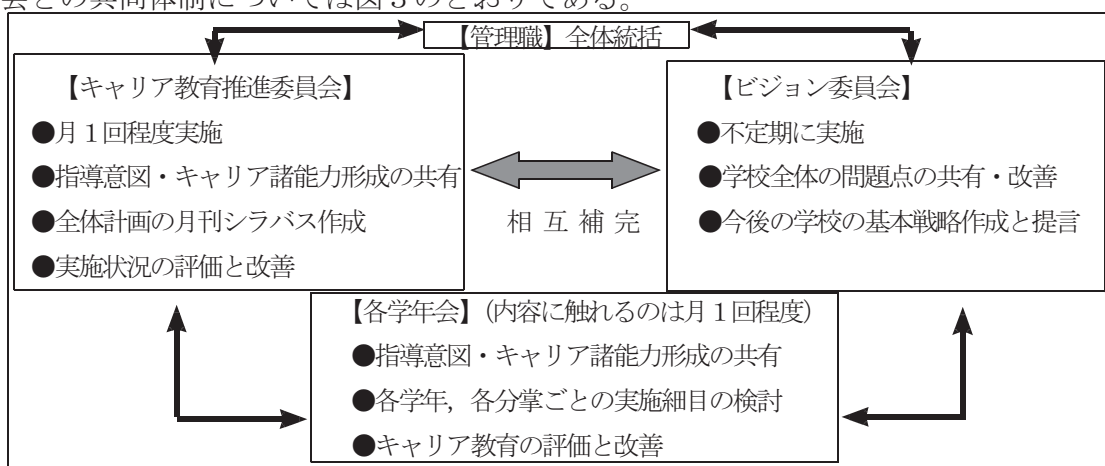


図3 キャリア教育推進委員会とビジョン委員会による共同体制

「学習プログラムの枠組み(例)」の視点に基づく共通理解の形成や共通実践の確認のための機能をキャリア教育推進委員会に、教育活動の問題点を共有し臨機に対応し改善を図るという機能をビジョン委員会にもたせ、校内の体制を整備した。

(2) キャリア教育の共通理解の形成

① キャリア教育推進のための講演会の実施

本校では、これまでも広島県立尾道北高校を参考に、人生観、進路観、職業観、勤労観を養い、主体的に進路を選択する力を育むために、進路指導の中核をなす3年間の教育プログラムを開発し、これを「キャリア教育」と呼んできた。

だが、この教育プログラムは「学習プログラムの枠組み(例)」の視点からすれば、キャリア教育の一部に過ぎない。平成20年度からのキャリア教育の実施にあたり、本校の教育活動は「学習プログラムの枠組み(例)」の視点にかなうものであり、本校では、「教育活動全般が本校のキャリア教育の学習プログラムだ」という共通理解を形成するため、講演会を実施した。

ア キャリア教育実践先進校の講演会の実施（実施日：平成20年3月14日（金）、講師：新井立夫氏（元静岡県立松崎高等学校進路指導主事、現文教大学専任講師））

キャリア教育の先進校である松崎高校は、平成9年度から「生徒指導なくして進路指導なし」、「人間力を育み定着させる進路指導」を理念として、職業観、勤労観を育むために4領域の能力の育成を図り、TQC（全社的品質管理）的な発想からキャリア教育を推進した。その中で、生徒各自の職業観、勤労観を育むため、また、進路希望先にかかわらず学力は必要だという考えから、進学者約80名、就職者約35名の学校であるが、全員を対象に大学での模擬講義受講等や就業体験を実施している。この結果、平成11年から7年連続で進学、就職共100%の進路実現を達成した。人間力の育成を理念として学校の教育活動を改善させ、地域からの信頼を得るようになり、現在、TQCの発想でキャリア教育を推進する姿は、まさに本校の歩んできた過程と重なり、目指すべき未来像ともいえる。キャリア教育の共通理解形成のために大変貴重な講演となった。

イ 人間力を育む部活動指導の講演会の実施（実施日：平成20年6月14日（金）、講師：滑川正昭氏（茨城県立多賀高等学校長））

講演会は、検証のとおり、本校では部活動が4領域の能力の育成に重要であるため、部活動を通して人間力を育むという共通理解の形成のために実施した。

講師の滑川先生は、日立第一高等学校在職時ラグビー部の監督として、社会に有為な人材を多数輩出し、同時に県内111連勝という実績を残した。

演題でもあった「人間力を高めて勝つ（克つ）部活動」とは、ルールや礼儀を生徒に指導し、人間力を高め社会に有為な人材を育てることだということや、部活動は4領域の能力でも特に人間関係形成能力を育むために重要な機会であるので、生徒・保護者との関係形成のポイントや指導者の心構えなどについて講演をいただいた。部活動において人間力を高めることの重要性、実際の部活動指導上のポイントを職員間で共有でき、キャリア教育の共通理解形成のために大変貴重な講演となった。

② 共通理解形成のための月刊シラバスと共通実践事項の作成

宮城県泉松陵高等学校では、3年間を見すえた共通実践をシラバス化し、それを月刊シラバスとして作成し直すことで、職員間の共通理解を形成することに成功している。

この実践にならい、本校ではまず3本柱について、4領域の能力の育成と学校の指導意図として共有したいポイントをまとめ、各分掌のシラバスを作成し、これを月刊シラ

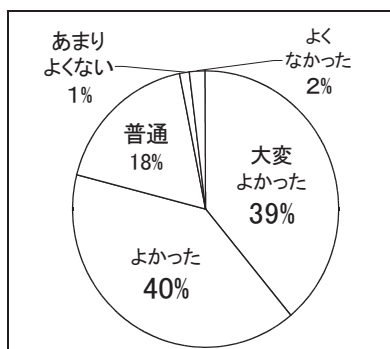
バスとして月1回のキャリア教育推進委員会で検討し、その検討を受けて各学年会で話し合い、実施の主体である各学年ごとの共通理解を図った。

当初、「4領域の能力を本校の教育活動でいかに育成するか」と考え実践に入ったが、通常の会議では、「目の前の教育活動で4領域の能力や態度を具体的にどのように育むのか」という議論を深めるのは難しい。そこで、「日常の教育活動が4領域の能力の何を育成しているのか」という視点から、生徒の月ごとの傾向や指導上のポイントをまとめ、生徒の具体的行動の変化を求める共通実践事項を作成し、月刊化して議論のたたき台とした。話題の出発点が生徒の具体的行動である方が、幅広い議論の参加と内容の深まりが可能である。

(3) キャリア教育見学会の実施

本校では、平成16年度入学生から、人生観、進路観、職業観、勤労観を育成することを目的として、3年間の教育プログラムを実践している。1年次には大学見学会及び模擬授業参加（東京方面）、2年次にはキャリア教育見学会として事業所見学を実施している。これらの行事を中核として、事前、事後指導を含め、1年次には社会や上級校、職業を知り文理選択につなげ、2年次には職業、生活をリアルにとらえ、3年次には主体的な進路選択ができるよう、各学年15回程度のプログラムを実施している。

図4 キャリア教育見学会に関する生徒の意識調査



キャリア教育見学会の最大の目的は、企業の求める人材像を現実的に理解し、高校生活でいかに自分を人材化するかを考えることと、企業の社会的使命、個性について理解し、将来の進路選択につなげることである。このため、午前、午後で2か所の事業所を見学し、企業の特徴、求める人材像についての講話もいただいている。その中で、日頃の生徒指導が必要とされる理由を、社会人としてのルールやマナー、きちんとした服装の大切さという

ようなことから、企業の方に直接生徒に話していただいている。また、仕事のやりがい等についても話していただいております。自分を成長させた先にやりがいがあることを生徒に理解してもらえるようにしている。見学会の生徒の感想は表3のとおりで、約80%の生徒が肯定的反応である。

(4) 生徒の「学習プログラムの枠組み(例)」における4領域の能力形成の状況

① 4領域の能力形成における自己評価アンケートの結果

表3 4領域の能力の自己評価

	1年	2年	3年
人間関係	3.1	2.9	3.7
情報活用	2.8	2.7	3.6
将来設計	2.9	2.8	3.7
意思決定	3.1	2.9	3.9
平均	3.0	2.8	3.7

現在の4領域の能力の形成について、「学習プログラムの枠組み(例)」の項目から99項目を抜粋し、5段階評価で3を「中学までで、できていた」とし、生徒に自己評価アンケートを実施した。1年生は5月、2年生はキャリア教育見学会実施後の7月、3年生は進路が決定しつつある12月に実施した。1、2年生を比べると、全体的に1年生の方が数値が高い。2年生が「できていない」と自己評価する項目で、1年生との差が大きいのは、「自分のよいところを見つける」、「異年齢集団の活動に参加し、役割と責任を果たそうとする」等がある。中学時代から

さらに広がる人間関係の中で、生徒たちが悩んでいる様子の表れではないだろうか。3年生はすべてにおいて数値が向上する。進路が決定した者も多く、やり遂げた達成感が自己効力感につながり数値が上昇するのではないかと考えられる。4領域の中では、意思決定能力の領域が全体的に数値が高く、最高値は「自分の好きなもの、大切なものをもつ」で4.2である。進路決定に直面し、自分の興味関心を大切に意思を決定した表れではないだろうか。また、これは小学校低学年で養う態度であるが、その大切さを改めて認識することができる。

② 教員による生徒の4領域の能力評価と共通理解の評価

表4 4領域の能力の教員評価

	1年	2年	3年
人間関係	3.7	4.0	4.0
情報活用	3.7	4.0	3.8
将来設計	3.6	3.8	3.6
意思決定	3.6	3.7	3.8
平均	3.7	3.9	3.8

教員による評価は、12月に細目ではなく4領域についてのみ行った。必ずしも生徒との自己評価とは一致しない。特に2年生は教員と生徒の自己評価に大きな差が見られる。生徒の自己評価は、内面的な葛藤や達成感、自己効力感、自分の基準の変化等と関連が深いのではないかと推察できる。

同時に、5段階評価で共通理解についてアンケートを行った。3を「ふつう」として、「人間力の育成」については平均3.7、「4領域の能力の育成」については平均3.4であった。コメントでは、「共通理解と実践の必要性は分かるが、日常の中では忘れがちだ。」というものが多かった。

5 研究のまとめと本校からの提言

(1) 研究のまとめ

① キャリア教育による学校の改善

文武不岐、人間力の向上を理念として学校の教育活動を改善し、地域からの信頼を回復した。4領域の能力の視点はなかったが、検証の結果として4領域の能力の視点にかなっていたということは、キャリア教育によって学校を改善したと言える。

② キャリア教育による教育活動の新たな意義付け

本校の検証結果では、4領域の能力の育成のためには、進路指導、生徒指導、特別活動、すべてが必要となる。これにより、文武不岐の新たな意義付けもできた。

③ 共通理解の形成と実践のポイント

教員間の共通理解形成の可否は、「日常の中でいかに4領域の視点をもつか」だということが分かった。学校本来の「人を育む」という視点を日常の中に浸透させ、PDCAによって継続的に改善を図ることが必要である。

(2) 本校からの提言

検証のとおり、本校では4領域の能力を育成する機会は豊富であるといえる。また、生徒の行事の満足度も低くはない。しかし、すぐに4領域の能力の評価にはつながらない。3年生の自己評価からは、決断と行動による経験を積み、達成感、自己効力感の向上に伴って評価が向上すると考えられる。「学校は良質な経験を積み、人を育む場」という共通理解の基に、学校を改善し続けることが大切であると考えられる。

高等学校実践事例2 「キャリア発達を支援するインターンシップ」

県立明野高等学校 URL:<http://www.akeno-h.ed.jp/>

1 学校の概要

本校は、周囲を豊かな林に囲まれ、静かな環境の中にあり、現在1学年普通科3クラス、310名余の生徒が在籍している。昭和52年に創立以来、創立3年目にして甲子園出場、二度甲子園に歩を進めるなど学校として隆盛を極めた時期と、入学者が激減した時期を経験し現在に至っている。この状況を乗り越えるために、これまで様々な試行錯誤を繰り返し、現在はコース制や少人数制、教科間選択や多数の学校設定科目を設けるなど、生徒の実態やニーズに応じたカリキュラムを実践している。

本校の教育は、①個に応じた生徒指導と基本的な生活習慣の確立、②「分かる授業」「楽しい授業」を通しての基礎学力の定着、③生徒一人一人の進路希望の実現と望ましい職業観・勤労観の育成、④特別活動及び部活動の活性化、⑤保護者・地域に根ざした開かれた学校づくりの五つの柱を目標として掲げ、日々教育活動の充実のために邁進している。

2 キャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発の概要

本校はこれまで、生徒の学習意欲の欠如や学力不足、夢や希望の希薄さや卒業後の離職率の高さなど、進路に関する多くの課題を抱えてきた。そのために、生徒の実態やニーズに応じたカリキュラムの開発や改善に取り組み、様々な学校行事や教育活動を計画し実施してきた。

しかし、準備に膨大な手間をかけた学校行事であっても、「とりあえずやりました」方式の一過性行事で終わってしまい、果たして生徒の学びが高まったかという疑問が残っていた。また、や

る気と活力に満ちた教員が多いが、経験には乏しく、教育活動がマニュアル化され硬直化しているという課題もあった。そこで、教職員の共通理解を図りながらカリキュラムの見直しと改善を図るために、生徒の実態やニーズを考慮した上で、図1のように2年間の研究を進めることとした。

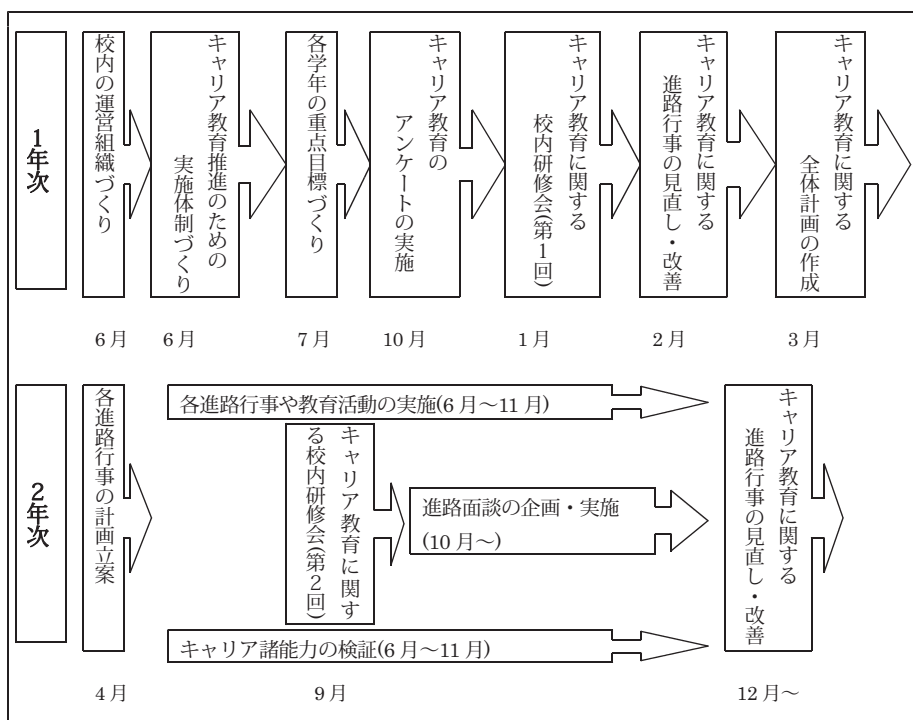


図1 キャリア教育に関する研究の概要

3 特に力を入れてきた取組

- (1) キャリア教育推進のための体制づくりと教職員の共通理解
- (2) キャリア教育推進のためのカリキュラムの見直しと改善

4 実践内容

- (1) キャリア教育推進のための体制づくりと教職員の共通理解

① キャリア教育推進のための体制づくりと重点目標の設定

本校では、教務主任、進路指導主事、生徒指導主事と各学年主任で構成するG6という組織があり、これまで定期的集まりをもってきた。そこで、キャリア教育を推進するための運営組織については、既存の組織G6をそのまま「キャリア教育推進委員会」として活用することにした(図2)。

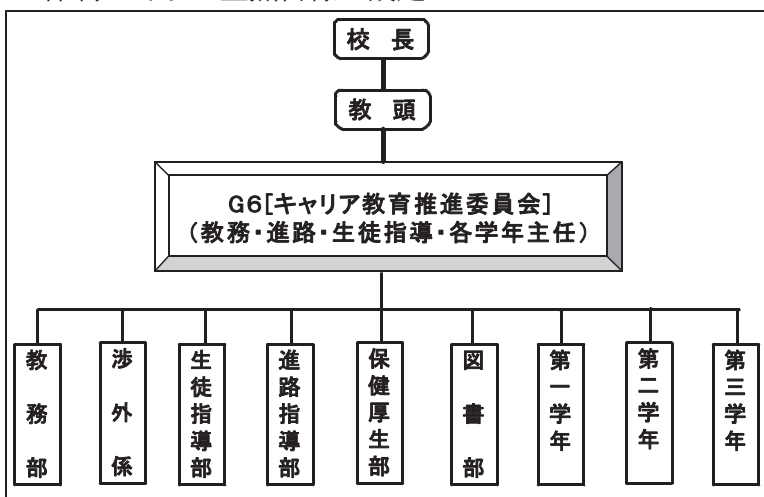


図2 校内運営組織図

また、キャリア教育の実施体制については、キャリア教育推進委員会を中心に、学校行事、各学年の行事及び各種教育活動をサポートするために、各校務分掌との連携を図った(図3)。

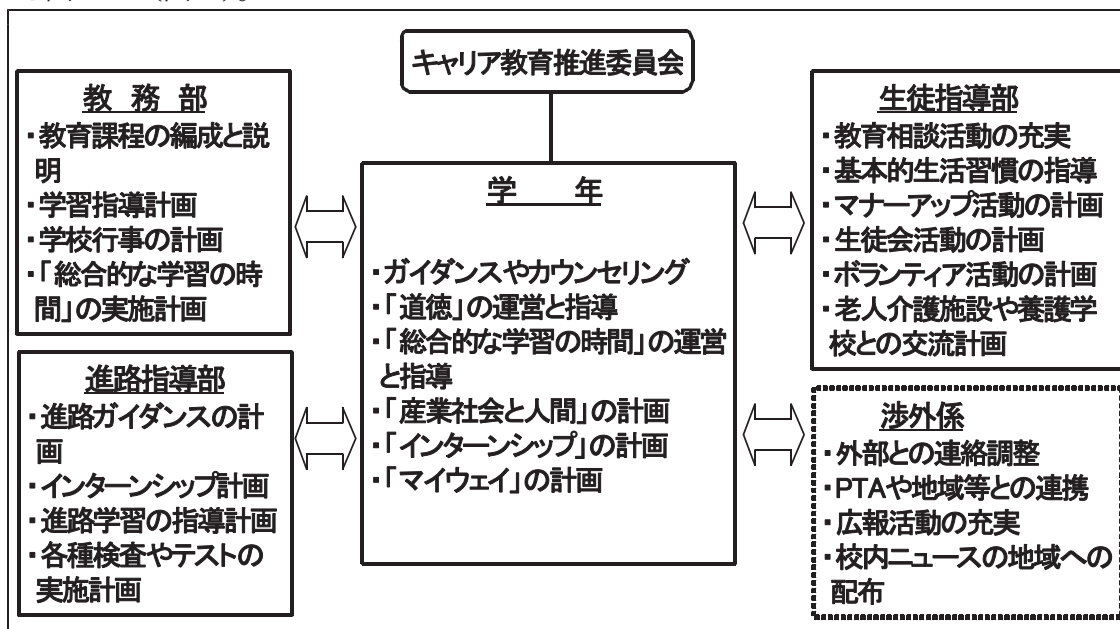


図3 キャリア教育推進のための実施体制

以上のような組織と実施体制に基づき、発達段階に応じてキャリア教育を推進するために、キャリア発達に関する各学年ごとの重点目標を定めた(表1)。これらを踏まえ、本校におけるキャリア教育に関するイメージ図を作成した。

表1 各学年のキャリア発達に関する重点目標

1 学 年	○新しい環境に適応するとともに他者との望ましい人間関係を構築できる。 ○自己の能力・適性を理解できる。 ○様々な情報を収集し進路選択の幅を広げることができる。
2 学 年	○他者の価値観や個性を肯定的に認め、受容できる。 ○自己の職業的な能力・適性を理解し将来設計ができる。 ○進路実現に向けた課題を理解し、検討できる。
3 学 年	○自己の能力・適性を的確に判断し、卒業後の進路について具体的な目標と課題を定め実行に移すことができる。 ○理想と現実の葛藤を通して困難を克服するスキルを身に付ける。

② キャリア教育に関する教職員の共通理解

ア キャリア教育に関するアンケートの実施(平成19年10月実施)

本校教職員22人を対象に、キャリア教育について教職員の意識調査を行った。それによると、本校生徒のキャリア諸能力については、人間関係形成能力である「自他の理解能力」や「コミュニケーション能力」と意思決定能力である「選択能力」や「課題解決能力」に関して特に課題があることが分かった。また、ほとんどの教職員が、若者にニートやフリーターが年々増加している点や職業人としての資質が低下している点に危惧を抱いており、職場（企業）見学やインターンシップ等の様々な教育活動の必要性を認めている。さらに、教員の社会勤労体験やキャリア教育に関する研修の必要性も認め、キャリア教育を今後一層進めていくことに関しては肯定的にとらえている。反面、半数以上の教職員が、キャリア教育のために新たな時間を確保することや各教科でキャリア教育を意識した授業を行うことに関しては困難である、と回答している。

以上のことから、キャリア教育を推進するためには、効率的な校内研修を実施するとともに、効果的で学びの質を高めるカリキュラムの改善をしていく必要があると感じた。

イ キャリア教育に関する校内研修の実施

キャリア教育の推進に向けて、校内の教職員の共通理解を図るために、2回の校内研修を部活動のない放課後や非授業日に1～2時間程度実施した。

・第1回キャリア教育に関する研修会(平成20年1月30日)

「キャリア教育を推進するための課題」と題して、指導者である教員のキャリア教育に関する専門性の向上を図るとともに、キャリア教育の共通理解を図った。特に、現在行っている様々な教育活動をキャリア教育の視点からもう一度見直し、キャリア教育の諸能力である8能力を高めたり深めたりする教育活動は何かということ、付箋を用いたワークショップ型研修で実施した。

・第2回キャリア教育に関する研修会(平成20年9月30日)

「キャリア・カウセリング」と題して、教育研修センター担当指導主事よりキャリア・カウセリングの講義を受けた。また、参加者を3人1組ずつに分け、ロールプレイの演習を行うとにより、キャリア・カウセリングの手法の一端を学んだ。

このカウンセリングの技法は、その後の個別面談や三者面談に生かしていくことにした。

(2) キャリア教育推進のためのカリキュラムの見直しと改善

① インターンシップを中心とした取組

これまで本校では、様々な進路行事を実施してはきたが、一過性の行事として終わってきており、準備に膨大な時間と労力をかけた割にはキャリア諸能力を育むことができたか疑問が残った。そこで、一過性の行事にせず、各行事のつながりをもたせ、行事の事前事後の教育活動を充実させるよう改善を図るとともに、各行事のねらいや教育活動の価値を生徒に意識させることが大切と考えた。特に、本校では、2年生全員に行うインターンシップを中心にすえ、他の進路行事を関連付け、つながりをもたせようとした。

ア インターンシップ実施までの進路行事

図4は、インターンシップ実施までの進路行事の流れを表したものである。

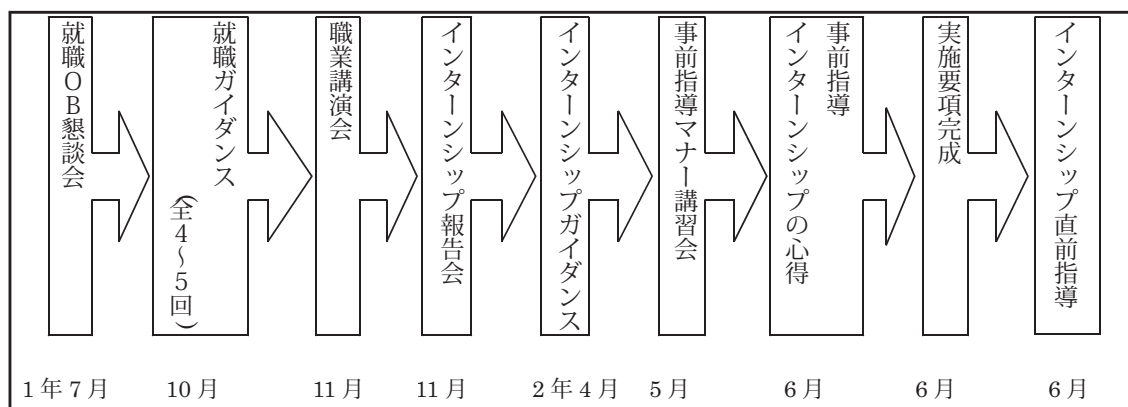


図4 インターンシップ実施までの進路行事

1年生では、卒業生から話を聞く就職OB懇談会に始まり、就職ガイダンス、職業講演会、2年生代表者によるインターンシップ報告会へとつなげていく。なお、この間、道徳や総合的な学習の時間も関連付け、特に、コミュニケーション能力や職業理解能力を育むとともに、自己の能力や適性を理解させ、進路選択の幅を広げさせるようにする。2年生になると、インターンシップガイダンスや事前マナー講習会などを通して、他者の価値観や個性を理解し、受容できるようにしていく。

イ インターンシップの実施について

インターンシップは、6月下旬、2日間にわたり、2年生106人全員が近隣46事業所に赴き実施した。事業所については、製造、販売、幼稚園・保育所、老人ホーム、消防署、JA等多業種に及んだ。図5は、インターンシップ実施後における生徒へのキャリア諸能力に関する意識調査の結果である。

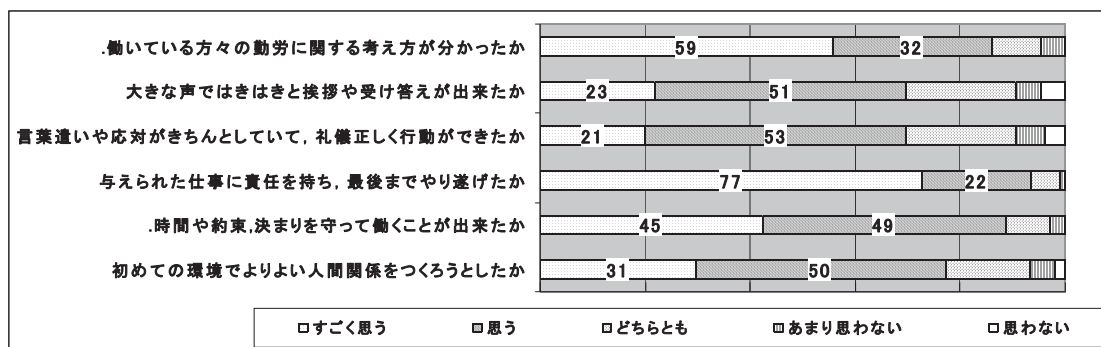


図5 インターンシップ実施後のキャリア諸能力等についての意識調査

前ページのキャリア諸能力等についての意識調査からは、7割以上の生徒が自他の理解能力、コミュニケーション能力や役割把握・認識能力を身に付けているととらえていることがわかる。特に、インターンシップを通して勤労に関する考えの変容があったと答えた生徒の割合は、85%を越えている。報告書の内容からは、実習中生徒のほとんどが出社時間・挨拶・言葉遣いについてよくできており、実習態度も良好であったことが分かった。生徒の感想文からは、仕事をやり遂げた喜びや他者からの温かい対応への感謝の気持ち、社会の厳しさ、働いている人の苦労など、体験することによる多くの気付きや学びを読み取ることができた。総じて、生徒各個人が自己の将来や進路について考えるよい機会となった。インターンシップに参加することにより、生徒は自分の可能性に気付き、また異世代の他者との協力関係の中で、責任をもった行動をなした喜びと自信を得ることができた。実習現場での生の言葉、価値観に直接に触れる体験も勤労観・職業観の形成のきっかけとなり、また「生きる力」につながっていくと考える。

ウ インターンシップ実施後の進路行事

図6は、インターンシップ実施後の進路行事の流れを表したものである。

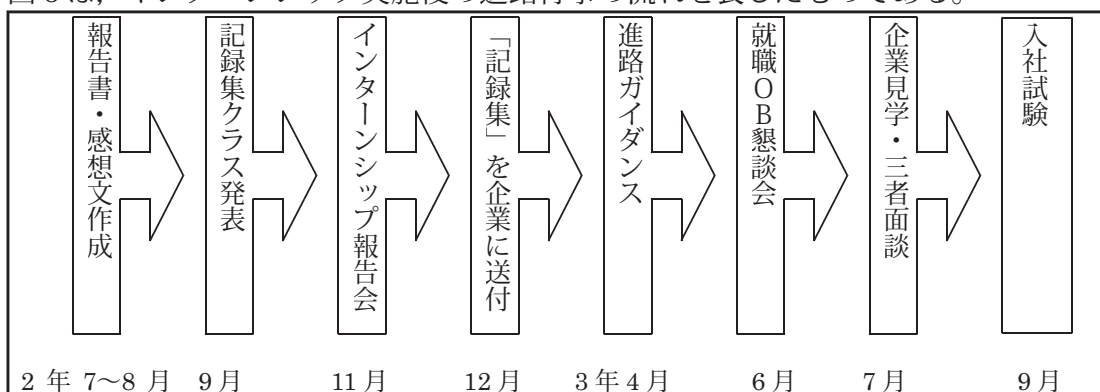


図6 インターンシップ実施後の進路行事

インターンシップ後には、生徒各個人がインターンシップについての報告書や感想文を作成し、クラスでの発表を行うことによって、プレゼン等のコミュニケーション能力をさらに高めるとともに、自己の職業的な能力・適性を理解し、将来設計ができるようにした。また、日々の教育活動を通して、進路実現に向けた課題を理解し、課題解決のための一歩を踏み出せるようにした。あわせて「記録集」をインターンシップ実施企業に送付して次年度の足がかりをつけておくようにした。さらに、3年生では、進路ガイダンスや卒業生から話を聞く就職OB懇談会や企業見学、キャリア・カウンセリングを通して、卒業後の進路について目標と課題を定め、具体的な努力ができるようにした。また、理想と現実の葛藤を通して、困難を克服するスキルを身に付けられるようにした。

② キャリア教育を推進するその他の教育活動

キャリア教育の推進を図る取組として、1年生で実施する道徳や産業社会と人間、全学年で週2時間実施する総合的な学習の時間「啓明タイム」等、進路行事につながる教育活動は数多くある。すべての生徒対象ではないが、特に、自他の理解能力やコミュニケーション能力の伸長等、キャリア発達を促す教育活動を以下に紹介する。

ア マナーアップ運動

春と秋の年2回、近隣小・中学校と連携して、自他の理解能力やコミュニケーション能力の伸長をねらいとして、マナーアップ運動を実施している。本校からは、生徒会中心に40人程度参加し、近隣小学校の校門付近で朝の挨拶運動を展開している。

イ ボランティア活動

県立協和養護学校と連携し、自他の理解能力やコミュニケーション能力の伸長をねらいとして、協和養護学校の運動会や収穫祭に希望者を募ってボランティアを派遣している。また、総合的な学習の時間の一環として啓明タイム「保育」選択者を対象に、餅つきの補助をしながら養護学校の児童生徒と交流をしていく取組を実施している。

ウ 家庭・地域に対する啓発活動

明野高等学校で行っている行事や活動の状況を、カラーのスナップ写真にして「進路ニュース」や「明野高校最新ニュース」に掲載し、保護者、地域住民、通学生徒のいる近隣中学校に配付している。域内の中学校訪問や中学校説明会の際にも、ハイスクールガイドとあわせて生徒や保護者に説明・配付している。この活動は、保護者や地域住民等とのコミュニケーションを行う契機となることをねらいとしている。今年度は4,500部を作成し、旧明野町の全家庭に配布する予定である。

5 研究のまとめと本校からの提言

(1) キャリア教育推進のための体制づくりと教職員の共通理解について

新たにキャリア教育のための組織を編成せず、既存の組織形態をそのまま活用したことは、効率的で運用しやすい方法であった。また、キャリア教育に関する校内研修会を実施したことは、全職員がキャリア教育に関して理解を深め、各教育活動についてのねらいや価値付けについて認識を深めることができた。

【提言1】キャリア教育を推進するためには、効率的・効果的な体制づくりを行うとともに、校内研修を通して教職員の共通理解を図る必要がある。

(2) キャリア教育推進のためのカリキュラムの見直しと改善

インターンシップを中心として、進路行事や各教育活動を関連付け、つなげていくことは、それぞれの学びの質を高め、生徒のキャリア発達を促す役割を果たした。ボランティア活動をはじめとする体験的活動は、自他の理解能力やコミュニケーション能力を高める取組となったと思われる。

【提言2】五感を通して獲得する行為である体験活動により、自己の将来に対するものの見方や考え方を養うことができる。体験活動が単なる体験で終わるのではなく、体験を通して自己理解が深まり、価値観が形成されるような取組が求められる。

【提言3】各教育活動の計画を立案する際には、どういう能力を獲得させるか、ねらいを明確にし、系統性のある計画を立てるべきである。その際、教員間の共通理解と意思統一を図っておくことも大切である。

【提言4】一過性の行事とならないように、事前・事後学習を必ず行う。特に事後学習を通してどれだけ学びが深まったのか変容状況等を確認させる。また、事後学習することが、次の行事や教育活動の事前学習になるような計画を立て、教育活動をつなげていくことが大切である。

V 今後の課題

今回の研究では、現在県内の各学校において、キャリア教育に関する教職員の共通理解や育成する能力・態度の明確化、指導計画の作成及び校内研修の進め方等に課題があることを踏まえ、キャリア教育を立ち上げる段階のカリキュラム開発の手順を、組織マネジメントの視点も取り入れながら六つのステップに分けて示した。

これらのステップは、計画(Plan)を実践(Do)し、評価(Check)して改善(Action)に結び付けるマネジメント・サイクル(PDCA)の、計画段階に当たるものである。研究協力校の実践事例には、計画に基づき実践された内容や、過去の取組を改善した事例も示したが、研究の視点の中心は計画段階に置いた。

そこで、本研究を今後、各学校のキャリア教育の推進にさらに資するものとするためには、実践段階以降の取組について、その在り方や内容、方法等を明らかにしていく必要がある。

具体的には、各校種に応じた具体的な実践や評価の工夫、全教職員がかかわるというキャリア教育の特質に基づく改善から計画へのマネジメントの在り方、さらに、キャリア教育が児童生徒一人一人のキャリア発達を支援するものであるという視点から、キャリア・カウンセリングについても研究を進めていく必要があると考える。

〈資料1〉

「キャリア教育への取組に関する実態調査」実施要項

茨城県教育研修センター

1 調査のねらい

現在各学校で取り組まれているキャリア教育の状況を把握するとともに、その実施上の課題を明らかにし、「キャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発」に関する研究の基礎資料を得る。

2 調査の内容

- (1) キャリア教育への取組の状況
- (2) キャリア教育の実施上の課題

3 調査の対象

県内すべての市町村立小・中学校，県立高等学校

4 調査回答者

小学校：教務主任

中学校及び高等学校：進路指導主事

5 回答方法及び回答期限

回答方法：教育情報ネットワークのアンケート機能による

回答期限：平成19年8月24日（金）

〈資料2〉

「キャリア教育への取組に関する実態調査」

回答の仕方について

教育情報ネットワークのアンケート機能にて回答してください。

○のチェックボタンは、1つ選択

□のチェックボタンは、複数選択可

は、テキスト入力

- 1 学校種をお答えください。
○小学校 ○中学校 ○高等学校
- 2 キャリア教育は教職員にどの程度共通理解されていますか。
○十分共通理解されている
○概ね共通理解されている
○少し共通理解されている
○共通理解されていない
- 3 本年度キャリア教育に関する校内研修を何回実施していますか。(計画を含む)
○実施していない ○1回 ○2回 ○3回 ○4回 ○5回以上
- 4 3について、実施している場合はその内容を、実施していない場合はその理由をお答えください。

- 5 学校教育目標や教育方針等にキャリア教育が位置付けられていますか。
○はい ○いいえ
- 6 キャリア教育を推進するための校内体制は整備されていますか。
○はい ○いいえ
- 7 キャリア教育で育成する能力・態度が明確になっていますか。
○はい ○いいえ

参考

○ 「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（報告書）（平成16年1月28日）」の参考資料である「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」は、「職業観」「勤労観」の形成に関連する能力を、「人間関係形成能力」「情報活用能力」、「将来設計能力」、「意思決定能力」の四つの能力領域に大別し、小学校の低・中・高学年、中学校、高等学校のそれぞれの段階において身に付けることが期待される能力・態度を具体的に示している。各学校においては、本資料を活用し、自校の「学習プログラムの枠組み」を作成することが期待されている。

- 8 キャリア教育の全体計画が作成されていますか。
○はい ○いいえ
- 9 キャリア教育の年間指導計画が作成されていますか。
○はい ○いいえ

10 本年度キャリア教育の視点からキャリア教育を実践している（計画を含む）教科等について、該当するものを次から選んでください。（「その他」を選択した場合は、具体的な内容をお答えください。）

- 道徳 特別活動 総合的な学習の時間 国語 社会
 地理歴史 公民 算数、数学 理科 生活 音楽
 図画工作 美術 芸術 家庭 技術・家庭 情報
 体育、保健体育 外国語 専門教育に関する各教科
 その他

11 本年度キャリア教育の視点から異校種と連携を図って実践した内容（計画を含む）についてお答えください。（連携を図った校種も記入、未実施の場合は空欄）

12 キャリア・カウンセリングは、各学年に計画的に位置付けられていますか。

- はい いいえ

13 （中学校のみ）職業体験は、キャリア教育の視点から他の学年の活動と関連付けて実施されていますか。

- はい いいえ

14 （高等学校のみ）インターンシップは、キャリア教育の視点から他の学年の活動と関連付けて実施されていますか。

- はい いいえ

15 キャリア教育を推進するうえで、現在最も課題となっていることを、次から一つ選んでください。（「その他」を選択した場合は、具体的な内容をお答えください。）

- 全教職員によるキャリア教育の理解
 計画・実践のための校内体制づくり
 キャリア教育推進の手順の明確化
 指導計画（全体計画、年間指導計画等）の作成
 キャリア・カウンセリング等の教員の指導力の向上
 保護者や事業所、関係機関等との連携
 児童生徒の変容の評価
 その他

〈資料3〉

「キャリア教育への取組に関する実態調査」の結果と考察（小学校）

※各設問における は、結果の概要である。

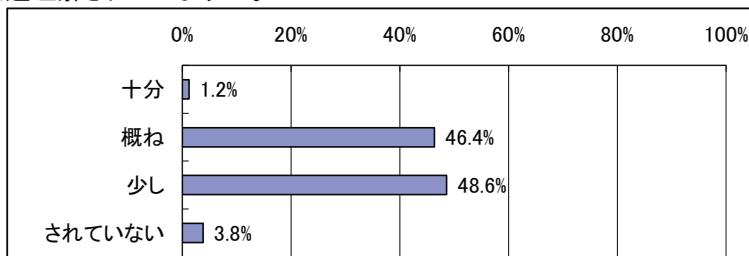
※各設問において無回答がある場合は、集計に加えない。

設問1 学校種をお答えください。

小学校	576
-----	-----

設問2 キャリア教育は教職員にどの程度共通理解されていますか。

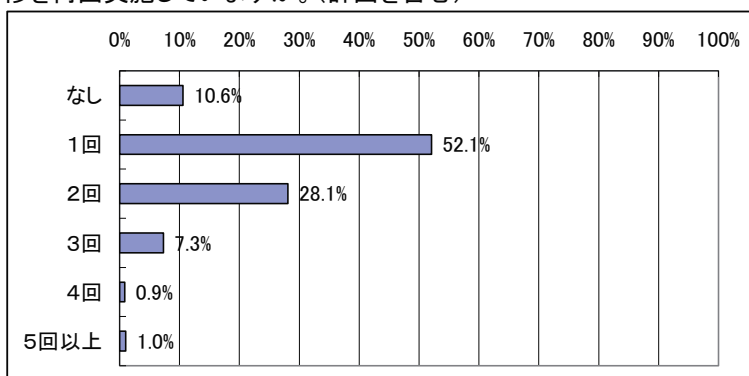
	校数	割合
十分	7	1.2%
概ね	267	46.4%
少し	280	48.6%
されていない	22	3.8%



設問2 従来進路指導のなかった小学校に、キャリア教育が浸透しつつある様子が見える。

設問3 本年度キャリア教育に関する校内研修を何回実施していますか。（計画を含む）

	校数	割合
なし	61	10.6%
1回	300	52.1%
2回	162	28.1%
3回	42	7.3%
4回	5	0.9%
5回以上	6	1.0%



設問3 全体の約9割の学校が校内研修を実施しており、約半数の学校が年1回の実施である。

設問4 3について、実施している場合はその内容を、実施していない場合はその理由（記述）

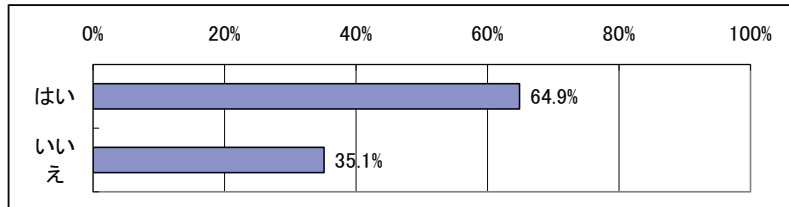
回答	校数	実施している場合の主な内容
キャリア教育の概要についての伝達	119	・県、研修センターでの研修会報告
全教職員によるキャリア教育の理解	141	・キャリア教育の意義、ねらい
計画・実践のための校内体制づくり	22	・キャリア教育の進め方 ・校内体制の整備
指導計画(全体計画, 年間指導計画等)の作成	181	・全体計画の作成 ・年間指導計画の作成(予定も含む)
キャリア教育で育てたい資質や能力について	6	・能力・態度の洗い出し, 整理
キャリア・カウンセリング等の教員の指導力の向上	1	・キャリア・カウンセリング
授業づくりについて(教科, 領域, 総合, 体験など)	26	・授業実践 ・指導案作成 ・実践例の検討 ・体験活動の計画と評価
家庭や地域, 関係機関との連携について	2	・地域との連携 ・関係機関との連携

実施していない場合の理由

研修体制ができていない	2
他の研修(研究)を優先している	11
研修時間を確保できない	6
キャリア教育推進の計画が不十分で研修の見通しが立たない	7
キャリア教育担当者が位置付けられていない	1

設問5 学校教育目標や教育方針等にキャリア教育が位置付けられていますか。

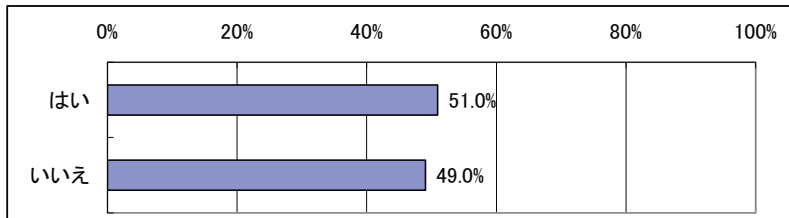
	校数	割合
はい	373	64.9%
いいえ	202	35.1%



設問5 約6割の学校で、学校教育目標や教育方針等にキャリア教育が位置付けられている。

設問6 キャリア教育を推進するための校内体制は整備されていますか。

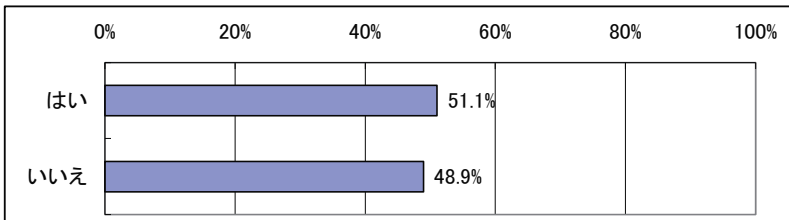
	校数	割合
はい	292	51.0%
いいえ	281	49.0%



設問6 約半数の学校で校内体制が整備されている。

設問7 キャリア教育で育成する能力・態度が明確になっていますか。

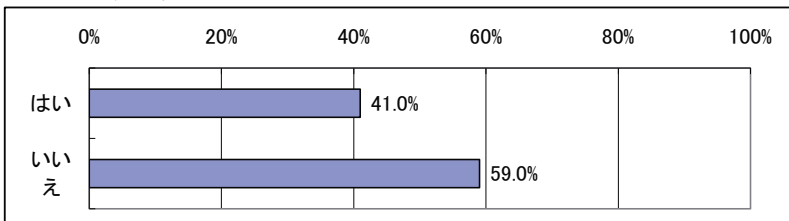
	校数	割合
はい	290	51.1%
いいえ	278	48.9%



設問7 約半数の学校で育成する能力・態度が明確になっている。

設問8 キャリア教育の全体計画が作成されていますか。

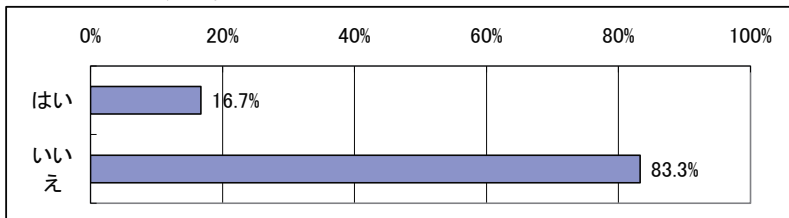
	校数	割合
はい	234	41.0%
いいえ	337	59.0%



設問8 約4割の学校で全体計画が作成されている。設問5の結果と合わせると、学校目標や教育方針等にキャリア教育が位置付けられていても、指導計画の立案には至っていない学校がある。

設問9 キャリア教育の年間指導計画が作成されていますか。

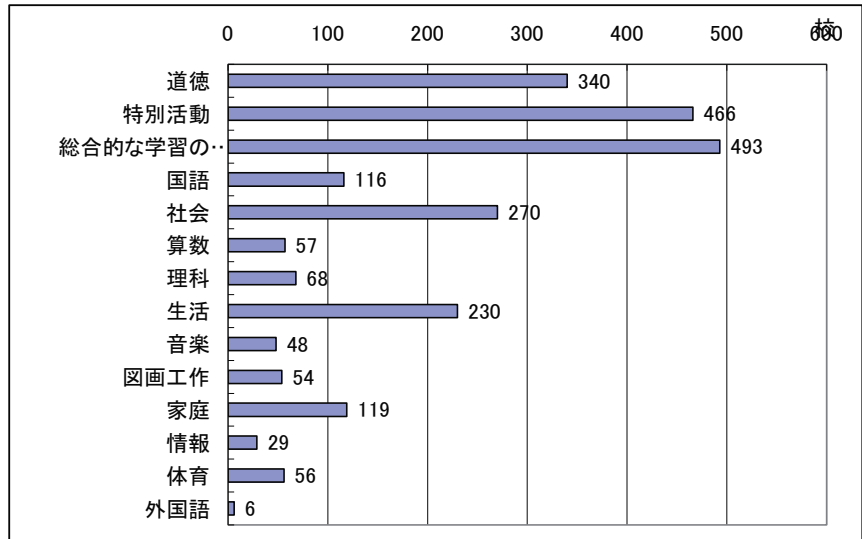
	校数	割合
はい	96	16.7%
いいえ	478	83.3%



設問9 約8割を越える学校で年間指導計画が作成されていない。設問8との関連でとらえると、全体計画が作成されていても年間指導計画が作成されていない学校がある。

設問10 本年度キャリア教育の視点からキャリア教育を実践している(計画を含む)教科等について、該当するものを次から選んでください。(複数選択可)

	校数
道徳	340
特別活動	466
総合的な学習の時間	493
国語	116
社会	270
算数	57
理科	68
生活	230
音楽	48
図画工作	54
家庭	119
情報	29
体育	56
外国語	6



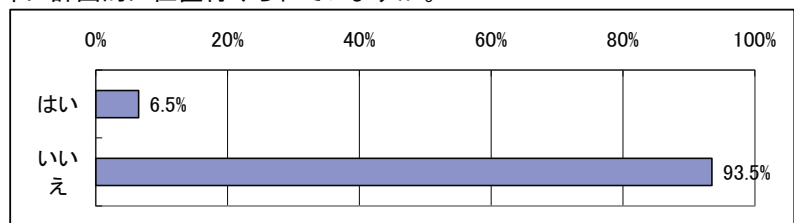
設問10 道徳、特別活動、総合的な学習の時間を中心に実践している。教科においては、働くことに関する内容が含まれる、社会科や生活科での取組がみられる。

設問11 本年度キャリア教育の視点から異校種と連携を図って実践した内容

連携先	校数	主な内容
幼稚園・保育所	39	・幼稚園・保育園児を招いての1年生児童との交流集会 ・なかよし遊びや清掃活動
中学校	61	・中学生を招いての音楽鑑賞会 ・中学校へ出向いての部活動見学 ・学区の中学校における6年生児童の体験入学 ・教員の出前授業 ・小・中合同のボランティア活動
高等学校	3	・県立高等学校の見学 ・農作業の体験学習やボランティア清掃活動
特別支援学校	7	・養護学校との学校行事における交流
大学	1	・茨城大学との連携

設問12 キャリア・カウンセリングは、各学年に計画的に位置付けられていますか。

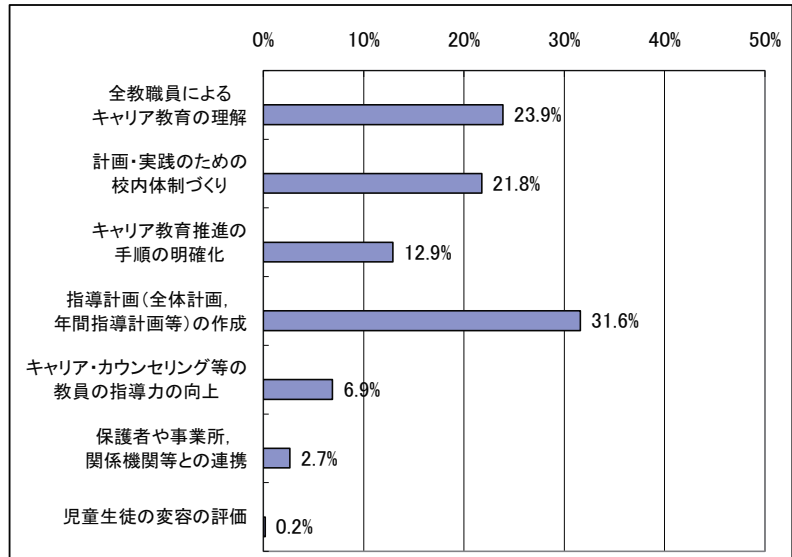
	校数	割合
はい	37	6.5%
いいえ	532	93.5%



設問12 約9割の学校が、キャリア・カウンセリングを各学年に計画的に位置付けていない。

設問15 キャリア教育を推進するうえで、現在最も課題となっていること

	校数	割合
全教職員による キャリア教育の理解	135	23.9%
計画・実践のための 校内体制づくり	123	21.8%
キャリア教育推進の 手順の明確化	73	12.9%
指導計画(全体計画, 年間指導計画等)の作成	179	31.6%
キャリア・カウンセリング等の 教員の指導力の向上	39	6.9%
保護者や事業所, 関係機関等との連携	15	2.7%
児童生徒の変容の評価	1	0.2%
その他	0	0.0%



設問15	設問3、4の結果より、大部分の学校でキャリア教育の理解や計画づくりを中心に研修が行われているが、それらは依然として課題であることが分かる。
------	---

考 察	<p>約9割の学校がキャリア教育に関する校内研修を実施し、6割以上の学校が学校教育目標や教育方針等にキャリア教育を位置付けるなど、キャリア教育を推進しようとする意識の高さが見られる。しかし、半数以上の学校で、教職員の共通理解と指導計画の作成に課題が見られる。</p> <p>今後、本研究においては、キャリア教育についての基本的な考え方を分かりやすく示すとともに、教職員の共通理解を図るための効果的な校内研修の在り方や、指導計画の作成方法などを示す必要がある。</p>
------------	---

〈資料4〉

「キャリア教育への取組に関する実態調査」の結果と考察（中学校）

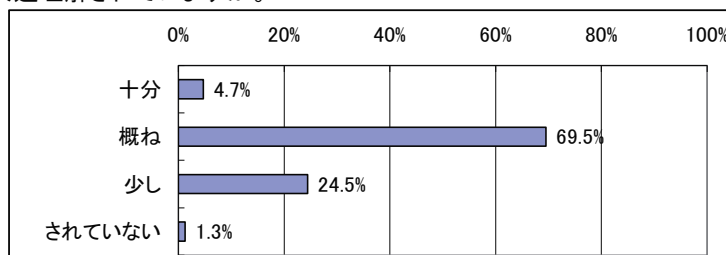
※各設問における□は、結果の概要である。
 ※各設問において無回答がある場合は、集計に加えない。

設問1 学校種をお答えください。

中学校	233
-----	-----

設問2 キャリア教育は教職員にどの程度共通理解されていますか。

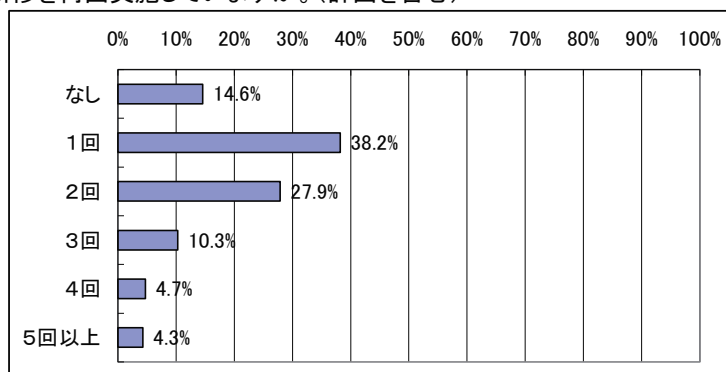
	校数	割合
十分	11	4.7%
概ね	162	69.5%
少し	57	24.5%
されていない	3	1.3%



設問2 「十分」、 「概ね」 合わせて約7割の学校で共通理解が図られている。

設問3 本年度キャリア教育に関する校内研修を何回実施していますか。（計画を含む）

	校数	割合
なし	34	14.6%
1回	89	38.2%
2回	65	27.9%
3回	24	10.3%
4回	11	4.7%
5回以上	10	4.3%



設問3 全体の約9割の学校が校内研修を実施しており、約7割の学校が年1、2回の実施である。

設問4 3について、実施している場合はその内容を、実施していない場合はその理由（記述）

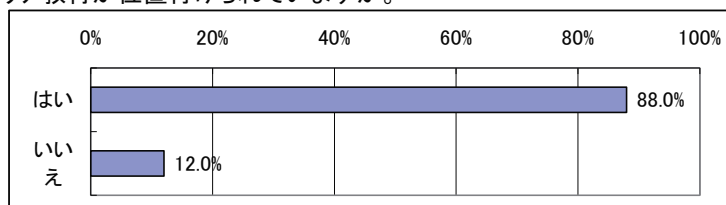
回答	校数	実施している場合の内容
キャリア教育の概要についての伝達	31	・県、研修センター、市町村での研修会報告
全教職員によるキャリア教育の理解	48	・キャリア教育の意義、ねらい
計画・実践のための校内体制づくり	22	・キャリア教育の進め方 ・校内体制の整備
指導計画(全体計画、年間指導計画等)の作成	58	・全体計画の作成 ・年間指導計画の作成(予定も含む)
キャリア教育で育てたい能力や態度について	5	・「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」に示された4領域・8能力
キャリア・カウンセリング等の教員の指導力の向上	1	・キャリア・カウンセリングの進め方
授業づくりについて(教科、領域、総合など)	10	・教科学習との関連 ・道徳との関連 ・総合的な学習の時間の計画
キャリア・スタート・ウィーク、職場体験学習	28	・職場体験学習の計画と実践 ・キャリア・スタート・ウィークの共通理解
家庭や地域、関係機関との連携について	3	・小学校との合同研究協議 ・小中学校合同講演会

実施していない場合の理由

研修体制ができていない	3
他の研修(研究)を優先している	8
研修時間を確保できない	7
キャリア教育推進の計画が不十分で研修の見通しが立たない	3

設問5 学校教育目標や教育方針等にキャリア教育が位置付けられていますか。

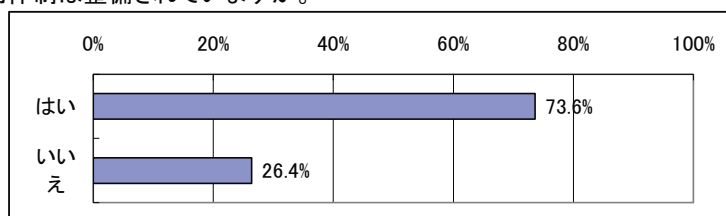
	校数	割合
はい	205	88.0%
いいえ	28	12.0%



設問5 約9割の学校で、学校教育目標や教育方針等にキャリア教育が位置付けられている。

設問6 キャリア教育を推進するための校内体制は整備されていますか。

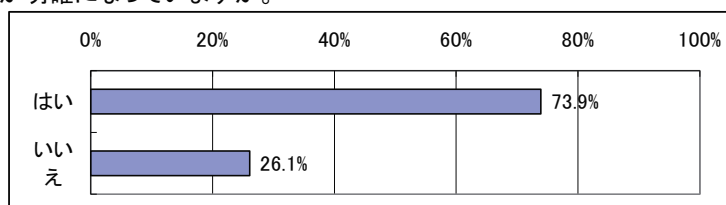
	校数	割合
はい	170	73.6%
いいえ	61	26.4%



設問6 約7割の学校で校内体制が整備されている。

設問7 キャリア教育で育成する能力・態度が明確になっていますか。

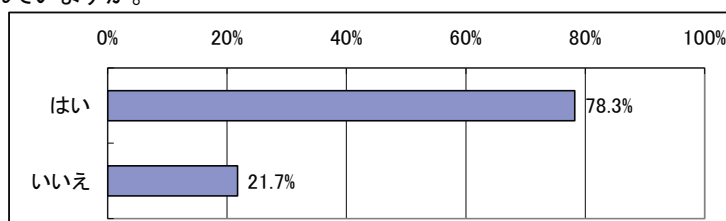
	校数	割合
はい	170	73.9%
いいえ	60	26.1%



設問7 約7割の学校で育成する能力・態度が明確になっている。

設問8 キャリア教育の全体計画が作成されていますか。

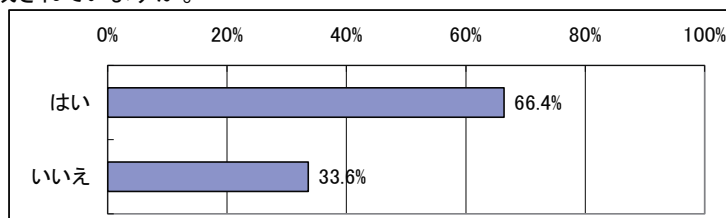
	校数	割合
はい	180	78.3%
いいえ	50	21.7%



設問8 約8割の学校で全体計画が作成されている。

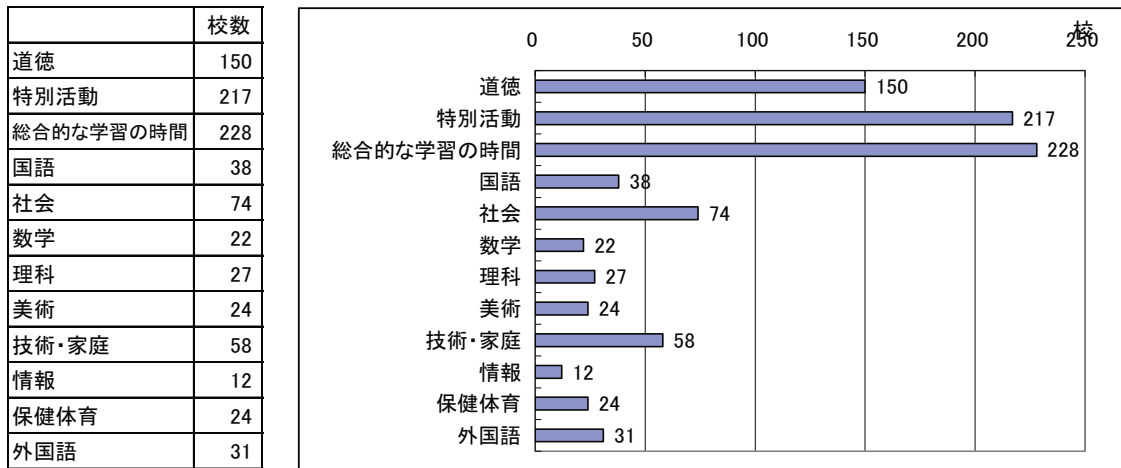
設問9 キャリア教育の年間指導計画が作成されていますか。

	校数	割合
はい	154	66.4%
いいえ	78	33.6%



設問9 約7割の学校で年間指導計画が作成されている。

設問10 本年度キャリア教育の視点からキャリア教育を実践している(計画を含む)教科等について、該当するものを次から選んでください。(複数選択可)

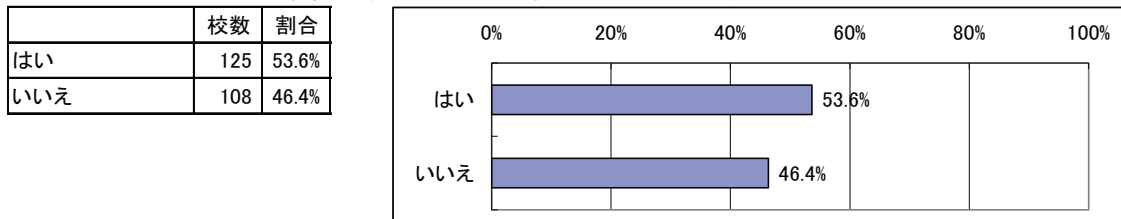


設問10 道徳、特別活動、総合的な学習の時間を中心に実践している。教科においては、働くことに関する内容が含まれる社会科や技術・家庭科での取組がみられる。

設問11 本年度キャリア教育の視点から異校種と連携を図って実践した内容

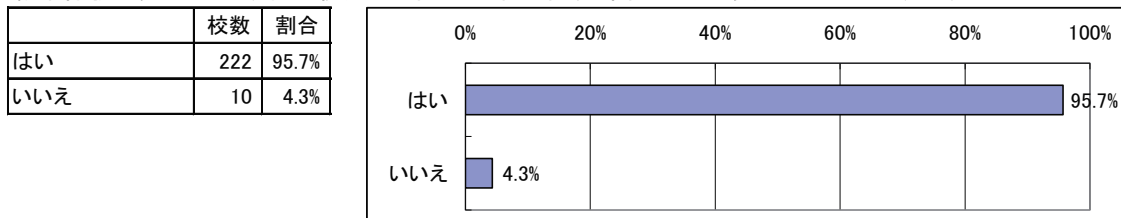
連携先	校数	主な内容
幼稚園・保育所	10	・体験学習 ・保育実習
小学校	27	・あいさつ運動 ・中学校の説明
高等学校	33	・高校説明会 ・体験入学 ・看護に関する学習 ・高校生との座談会
特別支援学校	4	・交流会
大学・専門学校	2	・部活動での交流, 指導 ・専門学校での勤労体験

設問12 キャリア・カウンセリングは、各学年に計画的に位置付けられていますか。



設問12 約半数の学校が、各学年に計画的に位置付けている。

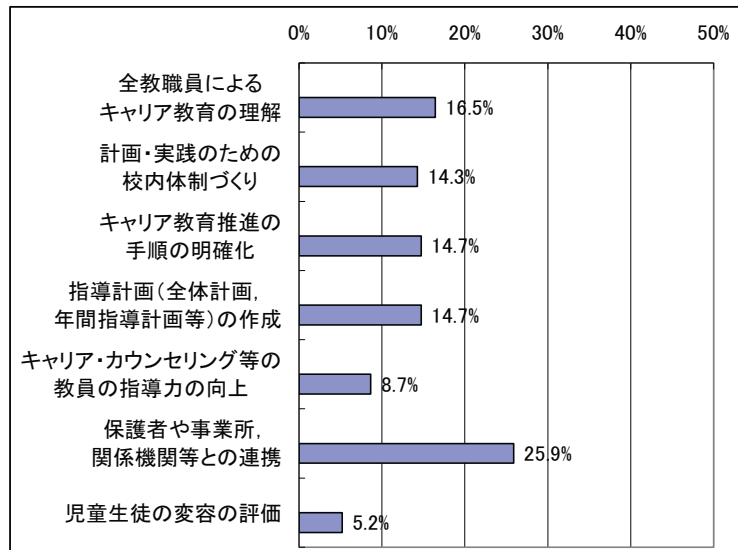
設問13 職業体験は、キャリア教育の視点から他の学年の活動と関連付けて実施されていますか。



設問13 9割以上の学校で、他の学年の活動と関連付けて実施している。

設問15 キャリア教育を推進するうえで、現在最も課題となっていること

	校数	割合
全教職員による キャリア教育の理解 計画・実践のための 校内体制づくり	38	16.5%
キャリア教育推進の 手順の明確化	34	14.7%
指導計画(全体計画, 年間指導計画等)の作成	34	14.7%
キャリア・カウンセリング等の 教員の指導力の向上	20	8.7%
保護者や事業所, 関係機関等との連携	60	25.9%
児童生徒の変容の評価	12	5.2%
その他	0	0.0%



設問15 最も課題ととらえているのは、外部との連携である。また、理解と計画の段階に課題を抱えている学校は、合わせて約6割ある。

考 察

約7割の学校でキャリア教育の共通理解や校内体制の整備、指導計画の作成が進んでおり、実践についてはほぼ全校で総合的な学習の時間や特別活動を中心に行っている。しかし、育成する能力・態度の明確化とそれに基づく指導計画の作成を一層推進し、実践をより充実させていくことが主な課題といえる。

今後、本研究においては、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」の自校化及び3年間の系統性に配慮した指導計画の作成と実践の方法を示す必要がある。

〈資料5〉

「キャリア教育への取組に関する実態調査」の結果と考察（高等学校）

※各設問における は、結果の概要である。

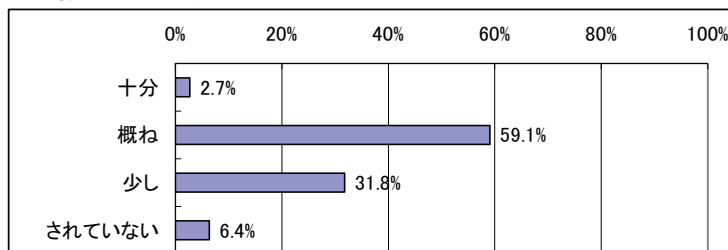
※各設問において無回答がある場合は、集計に加えない。

設問1 学校種をお答えください。

高等学校	110
------	-----

設問2 キャリア教育は教職員にどの程度共通理解されていますか。

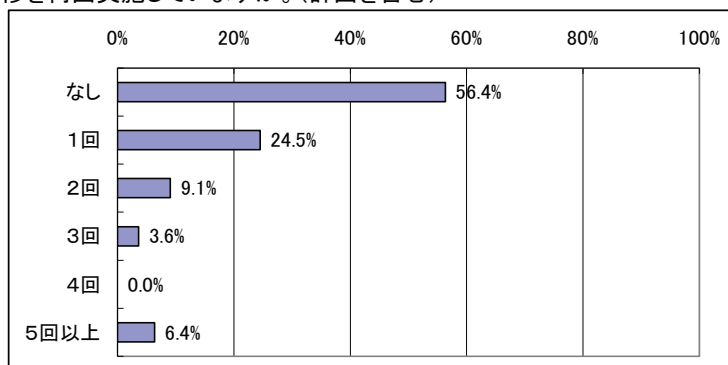
	校数	割合
十分	3	2.7%
概ね	65	59.1%
少し	35	31.8%
されていない	7	6.4%



設問2 「十分」、 「概ね」 合わせて約6割の学校で共通理解が図られている。

設問3 本年度キャリア教育に関する校内研修を何回実施していますか。(計画を含む)

	校数	割合
なし	62	56.4%
1回	27	24.5%
2回	10	9.1%
3回	4	3.6%
4回	0	0.0%
5回以上	7	6.4%



設問3 半数以上の学校でキャリア教育に関する校内研修が実施されていない。校内研修を通しての共通理解が課題である。

設問4 3について、実施している場合はその内容を、実施していない場合はその理由(記述)

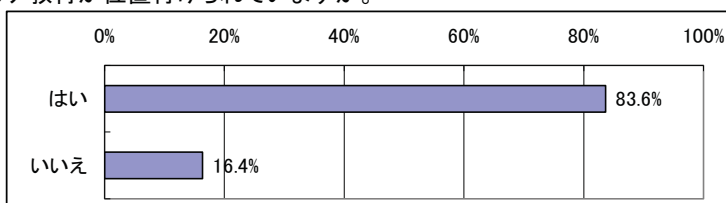
回答	校数	実施している場合の内容
キャリア教育の概要についての伝達	3	・出張研修の報告
全教職員によるキャリア教育の理解	12	・定義、意義について ・国や県の資料の共通理解 ・外部講師による研修 ・学年単位での研修
指導計画(全体計画、年間指導計画等)の作成	1	・全体計画
家庭や地域、関係機関との連携について	4	・日本版デュアルシステム ・インターンシップ
進学・就職指導に関する研修	8	・進学指導 ・就職指導 ・進路情報交換会

実施していない場合の理由

研修体制ができていない	6
他の研修(研究)を優先している	4
研修時間を確保できない	11
キャリア教育推進の計画が不十分で研修の見通しが立たない	7
各教科、学年、個人で対応している	6
教職員の理解、認識が不足している	7
既に共通理解が図られている	4
進学・就職指導が機能している	2
就職希望の生徒がいない	1

設問5 学校教育目標や教育方針等にキャリア教育が位置付けられていますか。

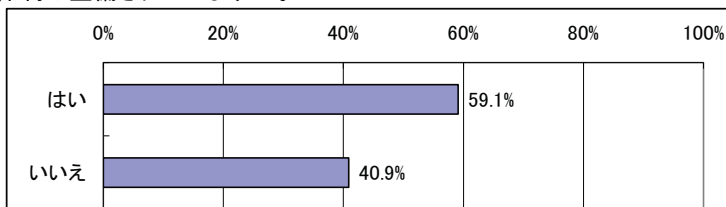
	校数	割合
はい	92	83.6%
いいえ	18	16.4%



設問5 約8割の学校で、学校教育目標や教育方針等にキャリア教育が位置付けられている。

設問6 キャリア教育を推進するための校内体制は整備されていますか。

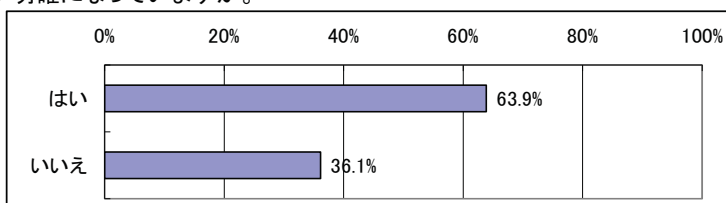
	校数	割合
はい	65	59.1%
いいえ	45	40.9%



設問6 約6割の学校で校内体制が整備されている。

設問7 キャリア教育で育成する能力・態度が明確になっていますか。

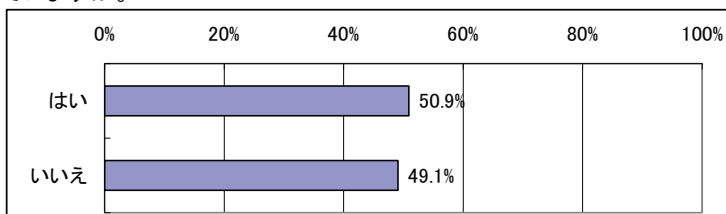
	校数	割合
はい	69	63.9%
いいえ	39	36.1%



設問7 約6割の学校で育成する能力・態度が明確になっている。

設問8 キャリア教育の全体計画が作成されていますか。

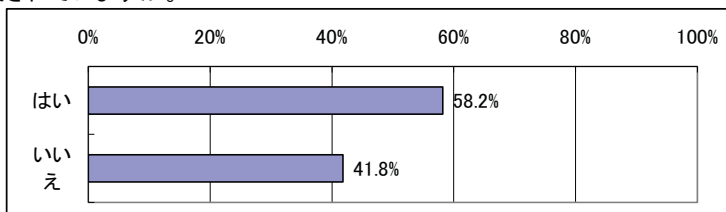
	校数	割合
はい	55	50.9%
いいえ	53	49.1%



設問8 約半数の学校で全体計画が作成されている。設問5の結果と合わせると、学校目標や教育方針等にキャリア教育が位置付けられていても、指導計画の立案には至っていない学校がある。

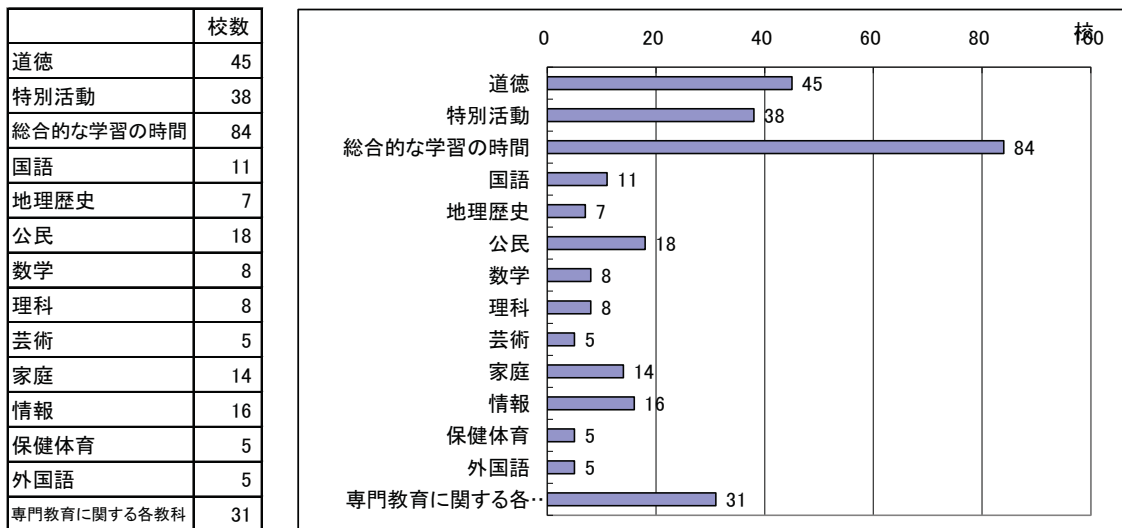
設問9 キャリア教育の年間指導計画が作成されていますか。

	校数	割合
はい	64	58.2%
いいえ	46	41.8%



設問9 約6割の学校で年間指導計画が作成されている。

設問10 本年度キャリア教育の視点からキャリア教育を実践している(計画を含む)教科等について、該当するものを次から選んでください。(複数選択可)

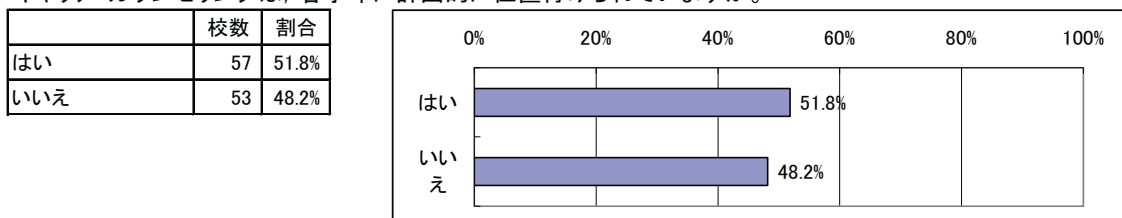


設問10 道徳、特別活動、総合的な学習の時間を中心に実践している。また、専門教育に関する各教科での取組もみられる。

設問11 本年度キャリア教育の視点から異校種と連携を図って実践した内容

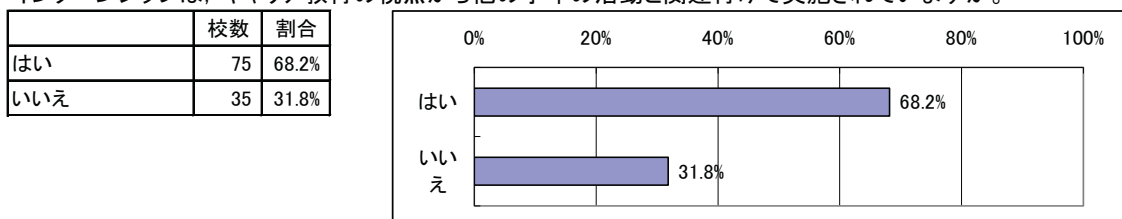
連携先	校数	主な内容
幼稚園・保育所	1	・ふれあいスクール
小学校	2	・ふれあいスクール
中学校	1	・福祉に関する授業のサポート
特別支援学校	4	・学校間交流
大学・専門学校	20	・学校訪問 ・模擬授業 ・説明会 ・出前授業
企業等	3	・訪問

設問12 キャリア・カウンセリングは、各学年に計画的に位置付けられていますか。



設問12 約半数の学校が、各学年に計画的に位置付けている。

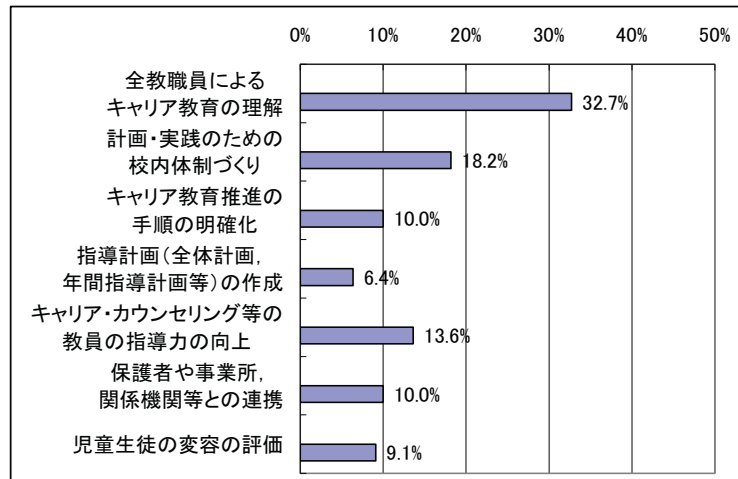
設問14 インターンシップは、キャリア教育の視点から他の学年の活動と関連付けて実施されていますか。



設問14 約7割の学校で他の学年の活動と関連付けて実施している。

設問15 キャリア教育を推進するうえで、現在最も課題となっていること

	校数	割合
全教職員による キャリア教育の理解	36	32.7%
計画・実践のための 校内体制づくり	20	18.2%
キャリア教育推進の 手順の明確化	11	10.0%
指導計画(全体計画、 年間指導計画等)の作成	7	6.4%
キャリア・カウンセリング等の 教員の指導力の向上	15	13.6%
保護者や事業所、 関係機関等との連携	11	10.0%
児童生徒の変容の評価	10	9.1%
その他	0	0.0%



設問15	約半数の学校が、理解と校内体制づくりを課題ととらえている。また、キャリア・カウンセリング等の教員の指導力の向上も課題ととらえている。
------	--

考 察	<p>約8割の学校で、学校教育目標や教育方針等にキャリア教育が位置付けられており、約6割の学校で校内体制の整備がなされている。また、6割前後の学校でキャリア・カウンセリングやインターンシップに取り組んでいる。しかし、校内研修を実施している学校は約4割であり、教職員の共通理解を課題として挙げている学校が最も多い。</p> <p>今後、本研究においては、各学校の特性・特質を生かしつつ、育成する能力・態度の明確化のための校内研修及び指導計画の見直し・改善の在り方を示す必要がある。</p>
------------	---

<資料 6>

○職業観・動労観を育む学習プログラムの枠組み（例）一職業的（進路）発達にかかわる諸能力の育成の観点から ※ 太字は、「職業観・動労観の育成」との関連が特に強いものを示す

	小 学 校		中 学 校		高 学 校		高 等 学 校
	低 学 年	中 学 年	進 路 的 探 索 ・ 選 択 に か か る 基 盤 形 成 の 時 期	現 実 的 探 索 と 暫 定 的 選 択 の 時 期	中 学 校	高 学 校	
職業的（進路）発達段階	職業的（進路）発達段階（小・高専学校段階） 各発達段階において達成しておくべき課題として、 進路・職業の選択能力及び将来の職業人として必要な資質の形成という側面から捉えたもの。		進路の探索・選択にかかわる基盤形成の時期		現実的探索と暫定的選択の時期		現実的探索・試行と社会的移行準備の時期
職業的（進路）発達にかかわる諸能力	職業的（進路）発達にかかわる諸能力		職業的（進路）発達を促すために育成される具体的な能力		職業的（進路）発達を促すために育成される具体的な能力		職業的（進路）発達を促すために育成される具体的な能力
領域説明	他者の個性を尊重し、個性を伸ばすこと、多様な個性を認め、協力を取り組む。		自分のよいところを見分け、友達の良いところを認め、励まし合う、自分の生活を支えている人に感謝する。		自分の長所や欠点を発揮でき、自分らしさを発揮し、話し合いなど積極的に参加し、自分も理解しようとする。		自己の職業的な能力・適性を理解し、それを受けて伸ばそうとする。 他者の価値観や個性のユニークさを理解し、それを受け入れる。 互いに支え合い分け合い関係を築く。
人間関係形成能力	【自己の理解能力】 他者の個性を尊重し、個性を伸ばすこと、多様な個性を認め、協力を取り組む。 【コミュニケーション能力】 多様な集団・組織の中で、コミュニケーションの取組や、自己の成長を果したがる能力		自分のよいところを見分け、友達の良いところを認め、励まし合う、自分の生活を支えている人に感謝する。		自分の長所や欠点を発揮でき、自分らしさを発揮し、話し合いなど積極的に参加し、自分も理解しようとする。		自己の職業的な能力・適性を理解し、それを受けて伸ばそうとする。 他者の価値観や個性のユニークさを理解し、それを受け入れる。 互いに支え合い分け合い関係を築く。
情報活用能力	学ぶこと、意義や多様な価値観を理解し、活発に活用して、自己の方向性を生かす。		いろいろな職業や生き方があつたり、関心・興味・楽しさなどが分かる。		身近な産業・職業の様子が分かる。必要な情報を探求し、活用する。		卒業後の進路や職業・産業の動向について、多面的・多角的に情報を集め検討する。 就職後の職業や上級学校卒業時の就職等に関する情報を探求する。 職業生活における権利・義務や責任及び職業に就く手続・方法などが分かる。 調べたことなどから、意見を述べて発表する。
将来設計能力	夢や希望を持つ。将来の生活を考え、社会の現実が自分を踏まえ、自己の将来を設計する。		係や担当の活動に取り組み、それらの大切さが分かる。		係や担当の活動に積極的に取り組む。楽しさが分かる。		卒業後の進路や職業・産業の動向について、多面的・多角的に情報を集め検討する。 就職後の職業や上級学校卒業時の就職等に関する情報を探求する。 職業生活における権利・義務や責任及び職業に就く手続・方法などが分かる。 調べたことなどから、意見を述べて発表する。
意思決定能力	自ら意思を持って、進路や職業の選択を行い、課題を克服する。		自分のやりたいこと、進んで取り組むこと、進んでいくことが、自分自身のことである。		自分のやりたいこと、進んで取り組むこと、進んでいくことが、自分自身のことである。		卒業後の進路や職業・産業の動向について、多面的・多角的に情報を集め検討する。 就職後の職業や上級学校卒業時の就職等に関する情報を探求する。 職業生活における権利・義務や責任及び職業に就く手続・方法などが分かる。 調べたことなどから、意見を述べて発表する。

○ 参考文献

- ・三村隆男 『キャリア教育入門』 実業之日本社 平成16年10月
- ・三村隆男編 『図解 はじめる小学校キャリア教育』 実業之日本社 平成16年11月
- ・沼津市立原東小学校・三村隆男共編 『キャリア教育が小学校を変える！』 実業之日本社 平成17年4月
- ・児島邦宏・三村隆男編 『小学校・キャリア教育のカリキュラムと展開案』 明治図書 平成18年3月
- ・三村隆男編著 『キャリア教育と道徳教育で学校を変える！』 実業之日本社 平成18年7月
- ・山崎保寿編著 『キャリア教育が高校を変える』 学事出版 平成18年7月
- ・亀井浩明・鹿嶋研之助編著 『小中学校のキャリア教育実践プログラム』 ぎょうせい 平成18年9月
- ・日本キャリア教育学会編 『キャリア・カウンセリング ハンドブック』 中部日本教育文化会 平成18年11月
- ・中央教育審議会 『初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）』 平成11年12月
- ・文部科学省 『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（報告書）』 平成16年1月
- ・文部科学省 『中学校 職場体験ガイド』 平成17年11月
- ・文部科学省 『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引』 平成18年11月
- ・文部科学省 『高等学校におけるキャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（報告書）』 平成18年11月
- ・国立教育政策研究所生徒指導研究センター 『キャリア教育体験活動事例集（第1分冊）』 平成20年3月
- ・渡辺三枝子 「小学校からのキャリア教育のすすめ」 『教育展望2003年7・8月合併号』 教育調査研究所 平成15年8月 pp. 22-29
- ・鹿嶋研之助 「キャリア教育でめざすこと」 『指導と評価2006年5月号』 日本図書文化協会 平成18年5月 pp. 4-7
- ・渡辺三枝子 「キャリア教育の現状と課題」 『指導と評価2006年5月号』 日本図書文化協会 平成18年5月 pp. 8-11
- ・玄田有史 「キャリア教育と体験活動の意味」 『中等教育資料平成19年1月号』 ぎょうせい 平成19年1月 pp. 10-13
- ・鹿嶋研之助 「中学校、高等学校におけるキャリア教育の取組」 『中等教育資料平成19年1月号』 ぎょうせい 平成19年1月 pp. 14-19
- ・杉田洋 「小学校におけるキャリア教育」 『初等教育資料平成19年3月号』 東洋館出版社 平成19年3月 pp. 2-5
- ・渡辺三枝子 「小学校におけるキャリア教育の現状と課題」 『初等教育資料平成19年3月号』 東洋館出版社 平成19年3月 pp. 6-9
- ・鹿嶋研之助 「育てたい能力や態度を明確にした指導計画の作成の視点と配慮事項」 『初等教育資料平成19年3月号』 東洋館出版社 平成19年3月 pp. 10-13
- ・渡辺三枝子 「過渡期を迎えたキャリア教育」 『教育展望2007年10月号』 教育調査研究所 平成19年10月 pp. 46-51
- ・独立行政法人労働政策研究・研修機構 『職業レディネス・テスト [第3版] 手引』 平成18年7月

○ 研究関係者

1 研究助言者

早稲田大学大学院 教授 三村 隆男 (平成19年度は国立大学法人上越教育大学准教授)

2 研究協力校・研究協力員

東海村立白方小学校 教諭 埴 克也
神栖市立深芝小学校 教諭 野口 桂子
古河市立駒羽根小学校 教諭 松本 政明 (平成20年度)
教諭 能城 忠雄 (平成19年度)
日立市立日高中学校 教諭 杉山 義文
阿見町立阿見中学校 教諭 川中 俊治
県立多賀高等学校 教諭 長山 祐司
県立明野高等学校 教諭 高橋 教夫

3 教育研修センター

所	長	中村 一夫 (平成20年度)	大川 秀一 (平成19年度)
	次長兼教職教育課長	和泉田 寛	
	教職教育課指導主事	黒田 裕之 木村 益巳	菊池 彰 小野口 吉政
	同	市毛 栄 廣澤 淳子	奥谷 克二 小泉 一彦
	同	豊田 昌幸 (平成20年度)	菅又 章雄 (平成20年度)
	同	菊池 哲也 (平成20年度)	小沼 浩幸 (平成20年度)
	同	大林 邦仁 (平成19年度)	江原 忠宏 (平成19年度)

研究報告書 第65号

キャリア教育に関する研究

キャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発

平成19・20年度

平成21年3月発行

編集 茨城県教育研修センター教職教育課

発行 茨城県教育研修センター

〒309-1722 茨城県笠間市平町1410

TEL 0296(78)3212 (教職教育課直通)

FAX 0296(78)2122

URL <http://www.center.ibk.ed.jp/>